The 8th International Student Forum

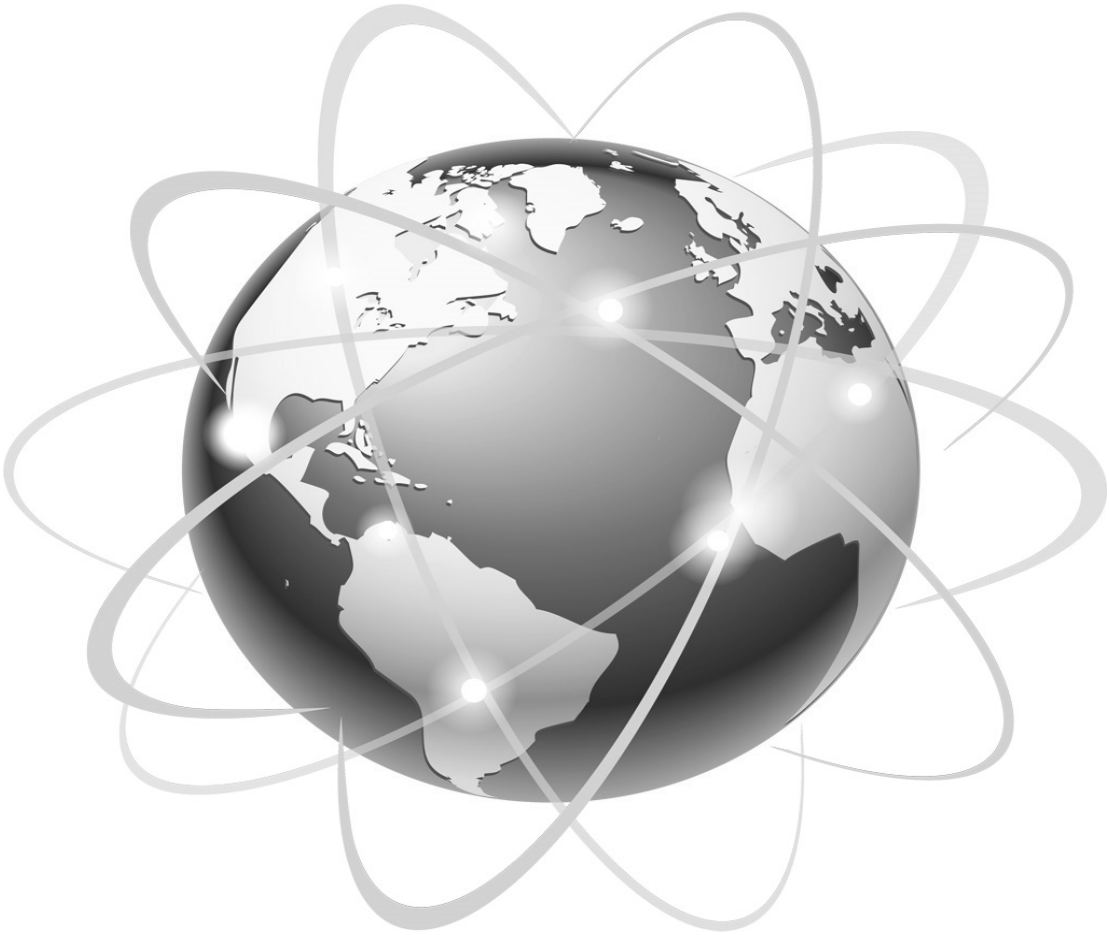
Harmonious Relationships in East Asia

2019.02.07~02.16

Ochanomizu University

Tokyo, Japan

第8回国際学生フォーラム報告書



目次

第８回国際学生フォーラム概要（森山新） 2

参加学生レポート 12
　本学学生 12
　海外学生 60

シンポジウム予稿集（基調講演・招待講演・シンポジウム） 88

しおり（学生代表） 118
　日本語版 118
　英語版 134

編集後記（森山新） 150

第 8 回国際学生フォーラム概要

森山新（お茶の水女子大学）

1. 概観

日時　2019 年 2 月 7 日（木）～2 月 16 日（土）
場所　お茶の水女子大学
主催　お茶の水女子大学国際教育センター・グローバル文化学環

2012 年に第 1 回が行われ、今回が第 8 回（海外開催を含めると第 10 回）となる国際学生フォーラムは、本学から 21 名、海外からは 5 か国、6 大学、14 名の学生が本学に集い、実施された（本プログラムは日本学生支援機構のショートステイ・プログラムに採択されている）。

東日本大震災がきっかけに始まったこのプログラムは、当初は東日本大震災の復興支援や学生の国際連帯に焦点をあて、世界の学生が交流し、討論する場として開催されてきたが、回を重ねる毎に徐々に討論の範囲を広げ、今回は最近の東アジアにおける国家間の関係悪化を念頭に、最大の災害とも言える「戦争」をいかに克服し、東アジアが共に生きることができるのか、について討論を行った。海外からは当事者である韓国、中国に加え、戦争を乗り越え共同体を築いたヨーロッパ、人種・文化の壁を乗り越え、多文化主義に至ったオセアニア、世界のリーダー的役割を担ってきたアメリカからも参加者を募った。

2 月 7 日にチェックイン、8 日に開講式・講演会・歓迎会を実施、9 日にはテーマに関するスタディ・ツアーを実施した。11 日、12 日には参加大学がそれぞれの立場から、東アジア、そして世界が様々な困難や対立を乗り越えて、共に生きることができるのかについての発表を行い、その後、全体討論において、その回答を見出すべく、議論が行われた。カンタベリー大学（ニュージーランド）の発表では、多文化主義が国籍や民族の壁を克服する道を提供してくれた。続くヴァッサー大学（アメリカ）の発表では、対立を克服し、平和を実現するリーダーシップとはどのようなものかについて語られ、ワルシャワ大学（ポーランド）の発表では、ポーランドがたどってきた歴史を振り返り、共同体（欧州連合）の建設と参加が果たした役割について語られた。さらに、大連理工大（中国）の発表では、日中韓の大学生が連帯し共に生きるために、国際的なグループ結成の具体案が示された。また、これまで交流を続けてきた、釜山外国語大学校・同徳女子大学校（韓国）からは、これまで本学と行ってきたテレビ会議システムを利用した国際合同遠隔授業や日韓大学生国際交流セミナーの成功を踏まえ、日韓、そして東アジアが共に生きるための具体的な提案が示された。最後の本学学生の発表では、東アジア対立の原因を分析し、かつヨーロッパが対立を乗り越えて共同体を建設した歩みを参考に、東アジア共生のためのシティズンシップを育む具体的提案がなされた。発表は複言語主義の考えに基づき、海外の参加者は日本語で、日本の参加者は英語で行われた。

本プログラムは、2 年生以上は「グローバル化と言語教育 1」、1 年生は「多文化交流実習 3」を履修して参加した。10 月に参加者を募集し、11 月～1 月には毎週、事前学習を行った。また、参加者は、学生代表、シンポジウム発表、開講式・閉講式、歓迎会・送別会、講演会・シンポジウム、ツアーの 6 つのグループに分かれ、教員らのサポートのもとに事前の準備を進め、学生自らの手でフォーラムの準備と運営を行った。

残念ながら今日の東アジアには国家間の様々な対立が存在し、解決の見通しは全く立たずにいる。そのような中、世界の学生が集い、東アジアと世界の共生のために、互いの意見に耳を傾け、忌憚のない対話と話し合いが持たれたことは、非常に喜ばしいことであると言わざるを得ない。本プログラムが、対立の多い東アジア、そして世界に、和解と共生をもたらす第一歩となれば幸いである。

2. 日程表

月日（曜日）	午前	午後
10 月	説明会・参加者募集	
11 月～1 月	事前学習（毎週月曜 9-10 時間目）	
2 月 7 日（木）	海外参加者来日・入寮	
2 月 8 日（金）	開講式・オリエンテーション	講演会・歓迎会
2 月 9 日（土）	スタディ・ツアー（江戸東京博物館、横網町公園他）	
2 月 10 日（日）	発表準備	
2 月 11 日（月）	来賓挨拶　金榮敏（同徳女子大・教員） 学生発表（カンタベリー大・ヴァッサー大・ワルシャワ大・大連理工大・釜山外大）	
2 月 12 日（火）	来賓挨拶　王冲（大連理工大・教員） 学生発表（同徳女子大・お茶の水女子大）	全体討論
2 月 13 日（水）	東京文化体験ツアー（お台場・銀座）	
2 月 14 日（木）	自由研修	
2 月 15 日（金）	閉講式	送別会
2 月 16 日（土）	退寮・帰国の途に	

3. 参加者

3.1 本学参加者（21 名、履修・聴講含む、一般参加除く）

氏名	大学	学部	学科	学年	担当
g1710202	安食　礼子	文	言語（グロ文）	2	代表
g1612406	本田　歩	文	人社（グロ文）	3	代表
g1710219	榎本　愛子	文	言語（グロ文）	2	発表
g1710222	大山　可乃	文	言語（グロ文）	2	発表
g1710241	酒井　麻佑子	文	言語（グロ文）	2	発表
g1810249	柄田　千尋	文	言語	1	開閉講式
g1710421	高橋　あみ	文	人社（グロ文）	2	開閉講式
g1810436	森下　瑠里花	文	人間社会科学	1	開講式
g1830113	上山　友梨子	生活	食物栄養	1	シンポ
g1810414	桑原　千尋	文	人社	1	シンポ
k1890064	王　艶		研究生		シンポ
k1890078	シュウ　キンエイ		研究生		シンポ
g1620421	古市　萌	理	生物	3	歓迎会
k1890032	ソヌ　ジミン		交換留学生		歓迎会
k1890034	チェ　ウンジン		交換留学生		歓迎会
k1890051	尹 海貞		交換留学生		送別会
g1620422	水城　真智子	理	生物	3	送別会
g1710266	中村　祐貴	文	言語（グロ文）	2	ツアー
g1710275	深山　華手那	文	言語	2	ツアー
g1830217	松中　円来	生活	人間環境科学	1	ツアー
g1810269	古尾谷　志歩	文	言語	1	ツアー

3.2 海外参加者（14 名）

氏名	大学（国）	バディ
キム・ソハ	同徳女子大学校（韓国）	高橋
イム・ヒジン	同徳女子大学校（韓国）	深山
キム・ドハ	同徳女子大学校（韓国）	上山
チョー・ソネ	同徳女子大学校（韓国）	桑原
シン・スンア	同徳女子大学校（韓国）	松中・ソヌ
ベク・ミラ	釜山外国語大学（韓国）	王・安食
ソン・ユジン	釜山外国語大学（韓国）	榎本・大山
リュウ・モクカン	大連理工大学（中国）	古市・水城
シユウ・シュガン	大連理工大学（中国）	本田・周
ガベウ・マルティナ	ワルシャワ大学（ポーランド）	柄田・森下
ザウォイスカ・アリチア	ワルシャワ大学（ポーランド）	古尾谷・ユン
ダッフィー・ウィリアム	ヴァッサー大学（アメリカ）	安食・本田
ターナー・クリス	カンタベリー大学（ニュージーラン	中村・松中
フリン・エミリー	カンタベリー大学（ニュージーラン	酒井・ソヌ

4. スタッフ

大学	名前	所属	役職
お茶の水女子大学	森山　新	グローバル文化学環・国際教育センター	教員
お茶の水女子大学	井上 貴恵	国際教育センター	AF
お茶の水女子大学	長塚 尚子	国際教育センター	AA

5. 講師その他

大学	名前	所属	役職
山口大学	山本 冴里	招待講演会・講師	教員
お茶の水女子大学	小松 祐子	招待講演会・講師	教員
同徳女子大学校	金　榮敏	引率・シンポジウム挨拶	教員
大連理工大学	王　　冲	引率・シンポジウム挨拶	教員

6. 参考写真

開講式・基調講演（2 月 8 日）

大学紹介（2 月 8 日）

小松祐子先生講演（2 月 8 日）

山本冴里先生講演

歓迎会（2 月 8 日）

スタディー・ツアー（2 月 9 日）

シンポジウム・来賓挨拶（2 月 11 日）

シンポジウム・カンタベリー大学発表（2 月 11 日）

シンポジウム・ヴァッサー大学発表（2 月 11 日）

シンポジウム・ワルシャワ大学発表（2 月 11 日）

シンポジウム・大連理工大学発表（2 月 11 日）

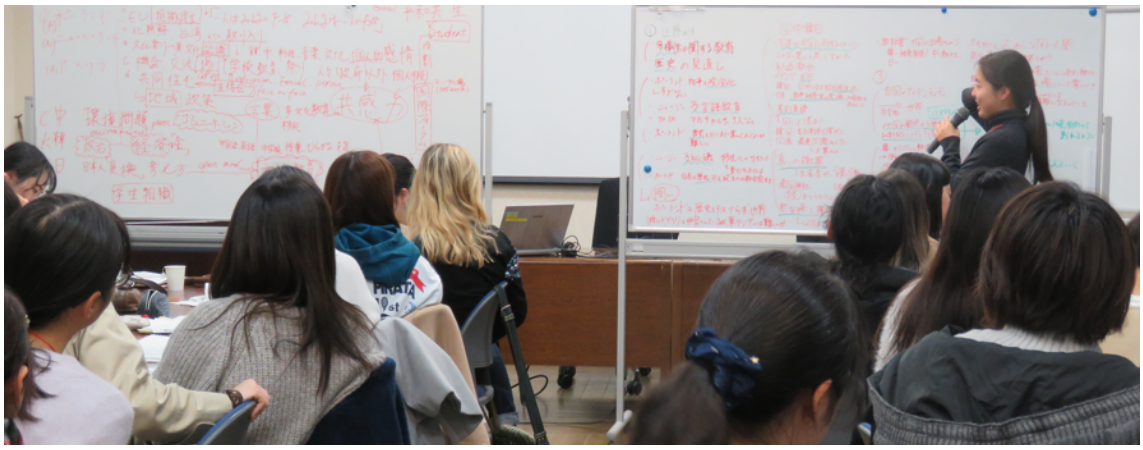
シンポジウム・釜山外国語大学校発表（2 月 11 日）

シンポジウム・来賓挨拶（2 月 12 日）

シンポジウム・同徳女子大学校発表（2 月 12 日）

シンポジウム・お茶の水女子大学発表（2 月 12 日）

シンポジウム・全体討論（2 月 12 日）



シンポジウム・記念撮影（2 月 12 日）

スタディ・ツアー（2 月 13・14 日）

閉講式（2 月 15 日）

送別会（2 月 15 日）

【参加学生レポート：本学学生】

「コミュニティ」を考える

1. 国際的交流的側面

今回、国際学生フォーラムに参加するにあたり、２名の学生のバディを担当し、主にこの２名との交流の機会が多かった。アメリカ・ヴァッサー大学からの学生と韓国・釜山外国語大学の学生である。ここでは、特にこの２人との交流を通して気づいた相違点を挙げる。

まず、共通点として、２人とも以前日本への留学経験があったということだ。そのため、日本での滞在に不自由が無く（電車の乗り継ぎなど)、また既に日本での交友関係が築けていた。これは、自身のバディに限らず、多くの海外からの学生も同様であったという印象がある。国際学生フォーラムの準備期間中は、毎日バディ達と遊んだり、日本らしい地を観光したりなどするもの（韓国語研修がそうだったので）だとばかり意気込んでいた。しかし、蓋を開けてみると、久しく会っていなかった友人達と再会するなど予定が詰まっており、想定していたよりも交流する時間が少なかった。また、学生の多くは、いわゆる「日本らしい」場所は既に行ったことがあり、どこを案内すればかなり困った記憶がある。全体として、普段交流することの少ない海外にルーツを持つ学生と交流の機会が与えられ満足している反面、意気込んでいた分消化不良になってしまった感触がある。

次に、異なる点であり、自身が課題だと感じたこととして、国際学生フォーラムのプログラム全体を通して、欧米圏とアジア圏にコミュニティが二手に分かれてしまったことである。これは、この後の項目２で述べる予定の言語レベルや母語、興味のある日本(のジャンル)の側面、そしてイベントの主旨に起因するものと考えられる。はっきりと２つに分かれてしまわぬよう、せめて日本人が加わることで疎外感を与えぬよう、一人の日本人として、積極的に「欧米圏のコミュニティ」の方々との交流を図った。その影響で、あまり韓国の学生と長い時間交流をできなかったことは後悔している。さて、欧米圏の方々は日本のポップカルチャーやサブカルチャー、和食などの文化的側面に興味を持たれていた印象がある。特に、自身がバディを担当したアメリカの学生はアニメや漫画に造詣があり、自身もそのようなジャンルに非常に詳しいと自負していたため、交流がスムーズであった。実際、コアなアニメファンが訪れるような場所を案内できたり、作品を紹介できたり、学生のニーズに応えることができたのではないだろうか。一方で、アジア圏の方々は、日本の音楽や俳優などの文化的側面に興味を持っていたり、日本で働くことを視野に入れている人もいるのではないかという印象があった。自身と同じくらい日本についても詳しく、１対１で交流する際には、母語が違うだけであまり外国人と「国際的な」交流をしているという感覚はなかった。ただ、フォーラムに参加している韓国人学生が非常に多かったこと、大山寮などお茶大に在籍している韓国人学生も一定数いることなどから、アジア圏（主に韓国人同士の）コミュニティが形成されてしまったと考えられる。韓国人コミュニティという多に対して１人で交流することに少し消極的になってしまったかもしれない。同族で固まることは、異文化地では安心できるものだとは重々理解している。ただ、国際交流を図る場ではとても勿体無いことであり、ホストであるお茶大生がこの２つのコミュニティの架け橋となれるようさらに尽力する必要性を感じた。

以上のことから、普段交流する機会のない海外の学生とのコミュニケーションをとることができて満足している一方で、課題も見えた。日本をある程度知っている学生にも楽しんでもらえるようなアクション、欧米圏とアジア圏を分断しないようなより質の高い国際的な交流が求められる。

2. 言語使用・学習の側面

ここでは、自身の言語使用について、また外国人学生の日本語使用について気づいたことをまとめる。

まずは、自分の言語使用を振り返る。英語は、アメリカ人のバディが日本語の意味がわからなかった時に英語で少し説明する時に使用した程度である。基本的には、海外学生のせっかく日本滞在なのだから、極力日本語での交流をと考え、日本語の使用を努めた。そもそも、アメリカからの学生のバディに志願したのも、自身の英語力を向上させながらも、学生の日本語をサポートできたらと考えたためである。英語圏の学生達が英語で赤裸々に話している内容も、ほとんど理解できたのでとても興味深かった。韓国語は、自分の知っている韓国語を韓国人学生達との交流のトリガーとして使った程度で、韓国語でのみの交流は無かった。これは自分の語学力不足によるものである。この、外国語の使用差は非常に興味深い。言語能力の高い外国語ほど必要な時や困った時のみ補助的に使用し、能力の低い外国語ほど自分の知っている限りのものを絞り出してまで積極的にコミュニケーションの中に取り入れようとするのだ。前者の方がより自然で理想的な外国語のコミュニケーションではないだろうか。結局、結果としてはフォーラムの行程の殆どで日本語を使用していたことがわかる。学生の大多数がある程度の日本語力を有していたことを踏まえれば妥当であ

る。今度似たような機会があれば、英語の次に、（日常会話程度ならば）学習しているドイツ語やロシア語を使用してみたい。

次に、海外から参加した学生の言語使用も少し考察する。フォーラム期間中は基本的に日本語を使用していたが、同じ英語圏同士、中国人同士、ポーランド人同士、韓国人同士で難しい話やお茶大生にあまり聞いて欲しくないような赤裸々な話をする際には母語を使用していた。母語の方が話しやすいということもあるが、それ以上に他の学生に理解されたくないという思いもあるのだろう。印象的だったのが、英語圏の学生とポーランドの学生の間では英語で交流を図っていたのに対し、英語圏の学生とアジア圏の学生は日本語で会話をしていたことだ。欧米圏は同族としてのコミュニティ意識があり、アジア圏の人は「他」として認識しているのかもしれない。また、質問の際も、英語圏の学生が英語で質問している場面が散見された。実際に、学生達本人にシンポジウムの内容を理解しているか聞いたところ、かなりアジア圏の学生と遜色ない程度理解しているようだった。英語で質問をするのも、元々の積極性が高く発言数が多かったり、英語でならば他の人全体にも通じるのではないかという意識があるからなのかもしれない。さらに、欧米の学生が韓国・中国からの学生の日本語力に圧倒され、自分の日本語力を過小評価してしまっている傾向もあった。欧米圏の言語を母語とする人々にとって英語を習得しやすいように、日本語と韓国語は文法が似ていたり日本語と中国語は双方とも漢字を使用することなどから、韓国人や中国人にとって日本語は学びやすいものなのかもしれない。実際、自身も世界各国から学生が集まって英語で行うプログラムの際、自分の英語力に自信がなくなってしまった経験がある。各学生がより対等に話し合える環境作りを、ホスト校側が積極的に行っていくべきである。

このような、意識や使用言語の違いが、先の項目で挙げたような欧米圏の学生とアジア圏の学生との壁の一因になっていると考えられる。

以上のことから、その言語の能力によって使用方法が異なること、また言語がアイデンティティやコミュニティを形作る大きな要因だとわかる。その上で、そのコミュニティを越えて交流し、より大きな共同体ができるような意識づくりが必要なのだと再確認した。

3. 学問的学び

基調・招待講演やシンポジウムでの学生の発表を受けて、多文化主義への意識と情報をどう受け取るかが異文化共生を果たす上で課題となるのだと認識した。

まず、多文化主義への意識づけである。小松先生の講義では、（先の項目でも言及した）アイデンティティを形成する要因となり得る言語教育的側面より共生を図るベルギーのケーススタディを教わった。一つの国に、様々な民族が存在するだけでは多文化共生には繋がらない、一国家の中でも民族の対等性を制度上で示す必要があると学んだ。山本先生の講義では、そもそも共に生きるとはどのようなことか、多文化共生の本質を教わった。我々のアイデンティティは単純なものではなく、他者に影響を受け、他者の介入のもとで形成されているのだと分かった。また、既に多文化主義を実践しているニュージーランドからの学生の発表を聞き、どのような意識を持って様々な人と接しているか、またその実践方法を学んだ。

以上のような学びを通して、自分たちの意識が多文化主義から如何にかけ離れていたか痛感した。私を含め、多くの日本人は日本人であることや日本文化・伝統にある程度誇りを持っている。そのアイデンティティ、ルーツ、文化や伝統は日本固有のものだと信じて疑わず、他者の影響を受けたとは思いもよらないだろう。しかし、文化が文化となり得るのも、他者の存在があってこそであり、他者を認識・容認する必要があるだろう。また、日本の社会が日本人以外を異文化、自分たちとは異なる人々として遠ざけていることを再確認した。ニュージーランドからの学生に質問した際、彼らはアフリカ系の人々をも同じ共同体の一員として認識していると話してくれた。日本ではどうだろうか。「在日」はあくまで「在日」として扱われ、帰化したとしても純日本人とは区別されていないだろうか。そもそも、ニュージーランドのような多文化社会において、アフリカ系の人々も共同体の一員であるから、アフリカ系文化は異文化ではないと言う。同じ社会に住む人々と同じ共同体を形成し、その共同体内の多様な文化を異文化として距離を置いてしまうことのないような意識作りが必要だと感じた。

さらに、情報・報道をどう受け取るか、ということである。東アジア内の対立は、メディアによる表現方法の差が一因とされている。韓国の学生の発表にもあったように、一つのニュースでさえも国によってその報道の仕方、言葉の選び方は変化する。メディアを通して一般市民の感情を煽ろうとする政治的意図、そして勿論制作側の自国への尊重により偏った報道がなされてしまう。そのような現状を踏まえ、中国の学生からは東アジア全体の情報機関の設立が提案されていた。ここから、既に多くの学生がメディアに対して問題意識を持っており、変えようと努力していることが分かった。

ただ、まずは我々一人一人のリテラシーを高めることが再優先だろう。招待講演でのディスカッションや国際結婚をしている先生方のお話を通じて、自分たちで情報を選択する必要性を学んだ。同じ事例についても、多方面・多言語の記事に当たってみることが肝要であり、そのための外国語教育である。ヨーロッパ

では母語プラス２言語の３言語学ぶシステムがあり、これは非常に理にかなっていると感じた。というのも、日本と韓国のような対立している問題の記事を読む際、日本側と韓国側の報道では自分たちを優位に立たせるような情報が掲載されるものと推定できる。そこに、ポーランド語のような第三者的な立場の言語で書かれた記事をさらに読むことで、中立的な立場からの視点も見えるはずだ。故に、外国語を３つ以上学び、リテラシーを高めることが共生への一歩となると学ぶことができた。

4. イベントとしてのフォーラムについて

今回、この国際学生フォーラムを学生代表として参加し、他係の準備段階などを見てきた視点からこのイベントを評価してみる。

まず、良かった点である。１つは、ホスト校として、海外からの学生を歓迎し、サポートすることはできた点である。歓送迎会やツアーなど皆でイベントを楽しむムードは作れていたし、実際楽しかったという声もたくさん聞いた。お茶大生がバディをしっかりサポートし、時折外へ出かけている姿も散見されたので、大きな問題・不満は無くイベントを終えられたのではないだろうか。２つ目に、各国からの学生の発表を通して、学生側の視点からの現状や問題意識などを交換し、しかも日本語を統一言語として交流できたのは良かったと考える。ニュース記事などからは分からない、学生の視点からの意見はとても貴重である。学生同士で思いの丈を話し、それを自分の中で反芻しさらに考えるなど、イベントが終わってからも何かを持ち帰ることのできるイベントになった。この一連の流れを、英語といういわゆるグローバルな言語では無く、皆が日本語で意見交換できたことも共生への一歩と言えるのではないだろうか。３点目は、イベントの準備・運営を学生主体で行なった点である。勿論、森山先生をはじめ、先生方のお力なしには成功しなかったと考えている。お茶大生主体で行うことで、一人一人真摯に仕事と向き合いより良いものにしようという意識が高まった。学生視点での運営だからこそ、お茶大生は自分の行動に責任を持つことができ、海外からの学生から好評だったといえよう。

次に、限界点や改善が見込まれる点である。１つは、東アジア内の共生をテーマとして掲げていたために、アメリカ・ニュージーランド・ポーランドの学生が少し蚊帳の外であり、おいていかれている印象があったことだ。原因としては、欧米圏の学生が韓日・中日・中韓の情勢にあまり詳しくないこと（歴史上の言葉などをあまり理解できていない）、日本語能力に対する自信の喪失（代わりに英語で対応してしまうこと）、そもそも東アジア内の話だから関係が薄いと考えてしまう意識などが挙げられる。これはシンポジウムに限らず、他の交流の場面でも欧米圏とアジア圏の分断が見られてしまった。確かに、世界の共生のためにはまず東アジアの課題を解決する必要がある。ただし、（ただでさえ、異文化地ではアジア圏と欧米圏での分断が起こりやすいので）世界の共生を最大目標と掲げる限りは、誰も外れることなく皆で話し合えるような環境づくりが求められる。２つ目として、日本文化をかなり知っている人でも楽しめるようなイベント作りである。高度な日本語力を必要とするこの国際学生フォーラムに参加する学生の多くは、日本での留学経験のある者など、日本に精通している学生が大部分を占める。開講式での説明やツアーで訪れる施設などは、東京をよく知る学生とそうでない学生とでは対応を分けるなど、双方が楽しめる工夫があると良いかもしれない。３点目は、（これは自分の反省でもあるが）学生代表というのも名ばかりで、他の係に比べかなり仕事に余裕があったため、さらに多く仕事を回してもらっても構わないと感じたことである。具体的には、各係の進捗状況の把握や、いつまでにどの係が何をすれば良いかという仕事の明確化などを担っても良いかも知れない。今回、学生代表としてパンフレットを作成したのだが、かなり余裕があった（普段から似たような仕事を行なっている）ために、（各係から頂いた英語の原稿を）日本語に翻訳し、英日の２つのバージョンのパンフレットを作ったわけである。対して、他の係の仕事が本当に大変そうに見えたため、仕事を代表に分担してもらえるとスムーズになるのではと感じた。

5. 趣味と国際的交流

少し脱線した話にはなってしまうが、今回のイベントでの国際的交流を通して感じたことをもう一つだけ述べたい。

項目１でもあったように、自身は重度のアニメオタクである。漫画を読んだり、アニメを見たり、ゲームをしたり、絵を描いたり、声優のイベントに行くことがこの上ない幸せなのである。同じ趣味を共有できるような友人の多くはSNSを通して知り合った本名を知らない人たちばかりである。大学では、自分がアニメオタクであると悟られないように、理解の無い人にきみ悪がられないように、初対面では殆ど話題に出さず、身に付けるものにも気を配っていたものだ。というのも、いわゆるアニメオタクは暗い、社会性の低い印象を与えてしまうからである。

ただ、今回のフォーラムに参加し、自分の趣味は隠すべきでは無いと確信した。むしろ、日本に興味のある海外の学生にとっては、自分は良いコンテンツを提供できる存在であり、趣味を強みにできるのだと気づくことができた。学生のニーズに応えることができるだけの知識を有していたことが、これほど満たされた

気持ちにつながったことはない。実際、今回のフォーラムでも、自分の知識をフル活用してコアな日本文化を紹介したり自分にとっては生き慣れた場所を案内するなど、学生とともに趣味を共有できるなどした。趣味の一つであるイラストもバディが帰国する際にプレゼントしたところ、かなり喜んでもらえたようで大変嬉しかった。自分の趣味は隠すべき恥ずかしいものではなく、積極的に公開して良いものだと、認識を改めるきっかけになった。

今回のように、日本側がホスト校として日本を案内する場合、学生が日本のある側面に精通しているとより参加学生を楽しめることができよう。自身のようなポップカルチャーだけでなく、茶道や漢字が得意なだけでも大変なアドバンテージになるはずだ。国際的な学問を主に学んでいるため海外に視点が向きがちであるが、たまには日本国内のことや自分自身を振り返ってみて、自分の糧にしても良いのかも知れない。

6.東アジア・世界がともに生きることについて

項目３と重なる点もあるが、東アジア・世界がともに生きるために、「より正確な情報をもとにした対話」及び「多様性の中で生きていく意識」の２つが肝要であると考える。

まず、「より正確な情報をもとにした対話」についてである。現在のメディアでは、主に事の結果や映像映えするような切り取られた過激な場面が大体的に報道されている。それらに惑わされる事なく、事のプロセス（交わした条約の移り変わりなど）や全体像を見ることのできるようなリテラシーを各々が養う必要がある。外国語学習による多言語での情報獲得、政治的・文化的な海外への興味、東アジアや世界の問題が自分にも関わるものだと捉える「当事者意識」などがメディアリテラシーの向上につながる。政治的な対立に疑問を持ったり、その国の文化へ単純な興味を持つだけでも、その国の報道があった際にアンテナが働き、自分でさらに調べようという気持ちになるものである。このような興味や、旅行でその地を訪れたことがあったり、海外に友人がいるなどの個人的なつながりなどが「当事者意識」つながる。東アジア・世界の問題を他人事として捉えなければ、より正しい情報を掴もうとするものだ。（実際、自分も知り合いができた土地のニュースは無意識でも気にしてしまうものだ。）その上で、対話を重要視する。現在、韓日や中日の対立では、意見が異なった場合にはお互いに非難するだけで、言葉のキャッチボールが成立していない。お互いの真意やそう発言する背景がわからないのである。だからこそ、学生の我々がお互いに対話をし、なぜそう考えるのか赤裸々に言い合うと良いだろう。時には喧嘩になるかもしれないが、ある程度までの妥協点は見つかるのではないか。話し合った上で、自分たちに非があったと分かれば、その時に謝れば良い。全くもって悪く無いと思えば謝らなければ良く、建前の謝罪は必要無いのだ。率直に言えば、平和的な共生は理想であって、意見のぶつかり合いなしには共生は果たせないと考える。お互いに面と向かって対立することを恐れて、陰口を言い合うよりも、衝突をする方がずっと良い。以上のことから、より正しい情報・知識を獲得した上での面と向かった話し合いが共生に不可欠であると考える。

次に、「多様性の中で生きていく意識」についてである。ニュージーランドの学生の発表を聞き、共生を果たすために我々に最も欠けていると感じたものである。というのも、民族的多様性に限らず、日本の社会において他と少しでも異なる人を奇異の目で見たり、排除する傾向が無いだろうか。しかも、直接的に喧嘩をするのではなく、気味悪がって距離を置いたり無視するなど一切の関わりを断とうとする。実際、自分自身も海外から帰国し日本の小学校に戻ってから、少し英語ができたり、自分のアイデンティティの中にアメリカの文化が流れ込んでいたので、クラスからかなり浮いてしまったりいじめ紛いの経験をしたものだ。同じ日本人でも変わった人を排除してしまうのだから、国籍やルーツが違えば尚更である。この価値観・認識の傾向を変えていかなければ、東アジア・世界の共生は叶わない。多様性に寛容になるためには、先ほども言及したような、様々な人と知り合い、個人的なつながりを持つことや自分から旅行などを通してマイノリティになる経験が役に立つ。そうして、同じ共同体を構成するメンバーとして多様性を容認する姿勢を養っていけば良いのだ。

この国際学生フォーラム（の主にシンポジウム）を通して、日本語を学習している親日的な学生の視点からも日本に悪い点があるのではという指摘があり、その他の国々にも改善すべき非はあるのだと判明した。中国の学生が提案してくれたような組織の設立はあくまで理想かも知れないが、学生たちは政治家が動くのを待っているばかりではいられない。これまで出会った海外の人々のつながりを大切にし、海外への個人的なつながりを維持する、ネット上で積極的に対話の機会を設けるなど実現可能なことはたくさんある。個人が世界の問題を自分と結びつけて、自分ごととして行動に移せるならば、少しは世界は変わるのでは無いだろうか。

グローバルな市民として東アジアの共生に向けてできること

1. 国際交流的側面

国同士を超えた学生同士の交流を通して、あらためて心を開いて積極的に話しかけにいくことの大切さを学んだ。例え話しかけるための特別なトピックが無くても、ファッションのことや日本食のことなど話しやすいトピックで、親しげに自分から話しかけにいくこと、少なくとも話しやすそうな雰囲気を出すことを心がけて 10 日間過ごした。その甲斐もあって、海外学生全員とコミュニケーションを取れたのは勿論のこと、8 割ぐらいの海外参加学生と一日のスケジュールを終えた後、プライベートで遊びに行くことができた。学生たちとコミュニケーションを取る中で、「笑い」を共有できたことがとても嬉しかった。笑いのツボは各国で多少異なるはずだが、これを言ったら盛り上がるだろうなという発言を私が行った際、本当に笑いがとれ、場の雰囲気を楽しくすることができたことには小さな感動を覚えた。

もう一点、海外学生と交流する中で気づいたことは、私自身が無意識に、「あなたの国ではどうなの？」と海外学生に頻繁に聞いていたように、海外学生は自分の国のことをよく知っているはずだという考えの元で、会話を進めていたことである。その際、回答をしてもらえない際には、なぜ自分の国の文化や制度等について知らないのかと残念な気持ちになった。そして、答えてもらえれば、その情報を大抵は信じてしまっていた。だが一方で、自分が他国を訪れた際、同様の質問をされた場合、私は母語以外の言葉（私の場合は英語のみだが）で日本について正確な情報を伝えることができるだろうか。ニュースを普段から見たうえで日本の状況を客観的に捉え、それを単純化しすぎずに英語で伝えることができるのか考えてみると、私自身まだまだ努力の余地があると言わざるを得ない。

後期から半期オーストラリアに留学するのだが、その前に自分が努力すべき点、今のままで良い点の両方を知れて良かった。

2. 言語使用・学習の側面

良かった点は、私自身が、第二言語で日本語を学んでいる人たちに対して、よりわかりやすい日本語を話す努力を休憩中もディスカッション中も、遊んでいるときも行えていたことである。特に、ディスカッションにおいては、専門用語や難しい熟語をいかに全員が分かりやすい言葉に置き換えるかということに頭を使った。バディとの会話も同様であった。私には、アメリカ人のバディと中国人のバディがおり、2 人とも意思疎通が難しくなる時があった。アメリカ人のバディとの場合は、私が英語圏に留学に行くため、個人的にはもっと英語を使いたいという気持ちもあり、そのような時には英語を使って話をした。私にとってはそれで問題はなかったが、バディからは「英語ではなく日本語でもう一度話してくれないか」と頼まれることもしばしばあり、日本語を学びたいという本人の意思を尊重し、やさしい日本語で繰り返して話をした。そうすると、彼の場合はすぐに理解をしてくれた。中国人のバディの場合も、やさしい日本語で何度も言い換えるという方法がもっとも意思疎通を簡単にした。彼女の場合は、英語の方が分からず、やさしい日本語を話しながら、同時に紙に言いたいことを書くという方法を使ってコミュニケーションをとった。このように、日本語を話すネイティブの側が意識的に言語のレベルを変えたり、コミュニケーションの手段を増やしたりといった工夫をすることが、当然のことではあるが、より良い意思疎通に不可欠であった。

日本語を学ぶ海外留学生からは、言語を学ぶモチベーションをもらえた。勿論、海外の参加学生の中での言語レベルに差は無かったとは言えないが、第二言語を一から覚え、終始ほとんど日本語でフォーラムに臨んでいたことに感銘を覚えた。このような国際的なイベント時には、公用語として英語が使われることが往々にしてあるが、今回は、政治や歴史を扱う難しいテーマを日本語で話すという難易度の高いことを海外の学生は行ってくれた。彼ら・彼女らが普通に運搬しているように見える日本語の能力も、何千時間もの努力の上に身に付いたことだと考えれば、その努力は敬服に値する。参加してくれた海外学生は、どの方も日本語をよりうまくなろうという強い意志を見せ、今後も継続的に日本語を学ぶと述べていた。私自身も、英語は当然のこと、また別の言語も学ぶ必要があると認識した。

3. 学問的学び

フォーラムの開校式で、森山先生がフォーラムの意義を分かりやすく、ご自分の経験を基に話をしてくれたため、私自身も気を引き締めて 10 日間の行程に参加することができた。参加学生も、ただの遊びではない授業としてフォーラムの目的を再確認することができただろう。講演でも、ともすれば私たちは二元論的に物事を単純化し、理解してしまいがちだが、それを乗り越えることなしには、グローバル化時代において国家間、国民間の倫理的な関係性は作れないということを学んだ。

シンポジウムでは、多角的な視点で東アジアの共生について考えること、信頼関係を持つ友人同士が対面で議論することの重要性を学ぶことができた。参加学生の言語的なレベルのばらつき、東アジア（特に日韓関係

に横たわっている諸問題）に関する知識量の差を考えた時、「慰安婦問題解決のための日韓の学生の協働」というテーマであったら、よりプラクティカルで深い議論ができたかもしれない。だが今回、多文化主義を国策として行うニュージーランド、各国の政治に長年介入してきた、世界のリーダーを標榜するアメリカ、EU を構成する一国として血みどろの幾多の大戦を乗り越えてきたポーランドも日中韓に加えて議論ができたことで、双方の学生にとっても学問的なメリットを得ることができた。東アジア以外の国から来た学生は、自らが関心を持つ日本という国が抱えている東アジアにおける諸課題について議論しながら、その地域の共生について考える機会を得、東アジアに属する学生たちは、日中韓の外側の別の国の成功事例や思考を提供してもらうことで、新たな見方を獲得した。無論、同質性が EU 圏内の国よりも少なく、移民に対して寛容でない東アジアの現実、また戦後責任についての日本側の不誠実な対応等を踏まえると、EU の事例や、「過去の問題と現代の政治を切り離すべき」というポーランド学生から出た意見をそのまま受け入れるのは乱暴である。だが、なぜポーランド学生がそう考えるのか、なぜ EU が必要とされたのかという背景を共に考えることは、非常に示唆的であった。

次に、信頼関係を持つ友人同士が対面して対話する重要性について述べる。特に、慰安婦問題や歴史教科書の記述、靖国神社参拝について韓国人の学生と私で話をしたときに醸成された緊張感を感じた際にそのように思った。私にとってその緊張感は、有意義な対話のために不可欠であり、心地の良い物であった。なぜなら、その緊張感は、自分の大切な友人をできる限り傷つけない表現を選びながらも、相手との間に存在する壁を乗り越え、より親しくなるために、相手を不快にさせうる意見をあえて言うために生まれたからである。相手との友好関係を維持、強化するためにあえてタブー視されている事柄を扱うと両義的な状況は、これを言ってもきっと友情関係が壊れないだろうと信じられるような相手との信頼関係が無ければ、乗り越えることが難しい。顔の見えない不特定の相手に対して、オンライン上で向けられている、日韓の間に横たわる政治的・歴史的な問題を扱った発言を見てみれば明白だろう。そこには、私が上記で述べた心地の良い緊張感は存在せず、ただ相手への怒りと自分の意見を絶対視する思いがつづられているだけであろう。この意味で、シンポジウムが初日や 2 日目というお互い交流ができておらず、相手を理解したいと思う衝動が少ない時期ではなく、共にツアーに参加したり、プライベートで遊んだりした 5 日目に行われた意義は大きいと言える。

4. イベントとしてのフォーラムについて

まずフォーラムの良かった点としては、フレンドリーな雰囲気の中、全員がバディやバディ以外の人と楽しい時間を共有することができたことである。その理由としては、歓迎会・ツアーをはじめとする海外学生と親しくなるために練りに練られた企画に加え、全体の雰囲気がオープンであったことがあげられると思う。特に韓国から来た学生らは大変人懐っこく、気軽に声をかけてくれた。彼らのおかげで国を超えた交流が容易になったように思う。もう一点は、シンポジウムにおける各大学の発表と質疑応答である。どの大学も、自らのバックグラウンドから興味深い意見、提案を発表してくれた。特に印象深かったのは、ポーランドからの学生が発表時や個人的に意見を問われた際に、繰り返し「ポーランドは戦時中に多くの大変な目に合い、凄惨な歴史を抱えている。だが、過去は過去のこととしてそれを現在の政治や国民感情には反映しないような政策をとっている。過去の出来事と現在の出来事は別個のものとして捉えるべき」と話をしていたことだ。この考えを、今なお対立が根強くある日本・中国・韓国など東アジアの共生のために提言したのである。この提案は、ポーランドの歴史や政治を学んだ彼女らの立場から生まれたものであり、東アジアの共生のために相応しいものかは置いといて、彼女たちだからこそ言えたという意味で、貴重であった。また、韓国の学生が「韓国国内における日本との和解を妨げる要因」について批判的な発言をしてくれたことも、非常に価値あることであった。なぜなら、韓国側にも問題点があるにしても、韓国人と同じテーブルについて、話し合いをする際には、日本人としての私は、それに触れる前に、日本側が抱える多くの課題について思考しなければならないと思うからだ。ゆえに、私自身が思っていても言いにくい韓国側の課題を韓国人の学生が詳しく述べてくれたことは、重要であったのだ。このような中身の濃い発表があったため、その直後の質疑応答では、予定していた時間を超えるほど盛り上がっていた。

一方で、フォーラムの改善点は、英語の資料を作ったり、英語と日本語の両方を資料に載せたりといった試みはあったものの、それでも日本語が中心となってしまったがゆえに、講演や議論についていけない学生が少なくなかったことである。具体的には、基調講演における小松裕子先生の講演や、シンポジウムの締めのディスカッションでは、英語や易しい日本語の利用といった配慮が十分でなく、そのために学びの時間を有意義に使えなかったという意見が耳に入っている。今回の 10 日間のイベントは、勿論交流を深めるための観光的な側面もあるが、やはりメインは「東アジアの共生」について思考を深めることである。ならばやはり、日本語がまだ不十分な学生への配慮は、多少、手間と時間がかかってもさらに行うべきだったと考える。もし配慮がよりできていたのなら、ディスカッション後に、全員が「今後個人として何をしていきたいか」と問われていた際に、具体的で中身の濃い発言ができたのではないだろうか。また、東アジアの共生について議論をする際に不可避的に出てくるだろう慰安婦や靖国神社参拝について、参加した学生全員が簡単にでも知識を得てお

く必要があったようにも思う。それがより深い議論には不可欠であったと今では振り返って思う。

5.その他（特になし）

6.東アジア・世界がともに生きることについて

私が東アジア・世界がともに生きることについて学んだことをいくつか記し、その後、レポートの締めくくりとして、今後私が具体的に何をしていくのか宣言したい。

まず、東アジアの共生のために不可欠であるとフォーラムを通じて私が考えた 2 つの事柄について述べたい。1 つ目は、自国や自らの会社の利益のために動きやすい国内メディアの情報に流されないように、多言語でニュースを読み解く言語能力を身に付ける重要性である。韓国の学生の 1 人が、韓日関係を刺激するニュースが韓国で目に入った際には、すぐに日本語で同じ問題を扱うニュースを確認していると話していたり、ポーランドの学生が EU の方針の元、自国の教育機関で二カ国以上の言語を学んだことを生かして、多言語で情報にアクセスしていると話していたりした際に、羨ましさを感じた。東アジアの共生に向けて市民としてアクションを起こしていくためには、言うまでもなく、韓国語や中国語などの習得が必要であるが、まずは私が勉強に励んでいる英語で、BBC や CNN などの他国のニュースチャネルを使って東アジアのニュースを調べていきたいと思う。2 つ目は、同徳女子大の学生が提言していたように「慰安婦問題を政治問題化しすぎない」という点である。たしかに、慰安婦問題の解決には、日韓政府の協働の利害の元、方針を一致させることが重要である。その意味で、慰安婦問題が政治問題であることには議論の余地がない。だが、その一方で、人権問題であり、私たちの問題だという意識は弱いように思う。日本において慰安婦問題が「大日本帝国の軍部によって、元慰安婦の人権が著しく傷つけられた人権問題」として十分認識されているとは言い難い。例えば、核兵器の廃絶という言葉を聞けば、真っ先に広島・長崎の被爆者が思い浮かぶ日本人が多数いることとは対照的に、慰安婦に関しては、「日本政府と韓国政府の間の難しい話」であると考えてしまう日本人は少なくないだろう。事実、日韓での和解を希求しながら、「日本において進行している戦時中に行った東アジア諸国での加害に対する忘却」に関心を持ち、慰安婦問題を調べている私自身も、シンポジウム参加前までは、慰安婦問題を政治的に捉えていた。

世界が共に生きるために、私が必要だと思うことは、EU のような共同体や、多文化共生を理想論として終わらせるのではなく、希望を持ってそこから何か学び取ろうとする姿勢である。今回のシンポジウムで得た情報だけで満足するのではなく、私自身がより詳しく貪欲に学んでいくことが求められている。

私は今回のシンポジウムでの学びを実践に移すために、3 つのことを主に行いたいと思う。
1 つ目が、先ほども記したように、言語の学習に献身し、メディアからの情報のバイアスを最小化することである。2 つ目が、今回のフォーラムに参加した日本人学生とナヌムの家に実際に訪れることである。たとえ元慰安婦に直接会えなくとも、彼らの経験を少しでも学ぶために、自らの足でフィールドに赴きたいのである。慰安婦問題を人権問題として捉えることの重要性を示す根拠として、同徳女子大学の学生はナヌムの家を訪れた日本人学生の感想をとりあげていた。そこで、韓国の学生にナヌムの家に実際に行こうとしていることを話したところ、ぜひ一緒に行きたいというメッセージをもらうことができた。このメッセージをもらった時、心からこのフォーラムに参加したことに喜びを抱いた。現地でまた小さなフォーラムの続きができれば、これ以上に嬉しいことはない。このように、フォーラム終了後も、そこで得た学びと友情を継続させていくための取り組みを行っていかなければと思う。それがこの授業に参加できたことへの感謝を示す方法の 1 つであると思う。3 つ目が、現在所属している国際関係論のゼミで EU について調べたり、8 月から半期の留学を行うオーストラリアのシドニーで多文化共生の雰囲気と課題について学んだりすることである。今後も、主体的に学びを続けていきたいと思う。

世界・東アジアがともに生きるために　～私たちから行動しよう～

1. 国際的交流的側面

今回のフォーラムでは、韓国、中国、ポーランド、アメリカ、ニュージーランドの学生と 10 日間を共に過ごし、友好的な交流をすることができた。私はこれまでも、韓国や中国などのアジアの学生とはなじみがあった。なぜなら、お茶大の授業などを通して、話す機会が比較的多くあったからだ。しかし、ポーランドやアメリカ、ニュージーランドなどのアジア圏以外の学生と交流する機会はあまりなかった。そのため、今回のフォーラムは、私にとって新たな国際交流経験となった。そして、この交流の機会は、「東アジアの共生のために話し合う」という堅苦しい目的だけではなく、様々な国の留学生と友達になり、楽しい時間を共有し、心通う交流するという目的も達成することができた。

私は、フォーラムが始まる前、韓国の釜山外国語大学の学生のバディになりたいと申請した。なぜなら、私は昨年の夏に釜山外国語大学で韓国語を学び、日本語教育実習を行った経験があったからだ。自分の釜山での経験をバディの学生と共有したい、また、韓国についてさらに深く知りたいと思い、このような希望を出した。フォーラム期間中、私は目標通り、バディと密度の濃い交流をすることができた。フォーラム中は、ほとんどの時間をバディと行動を共にし、たくさんのことを話した。大学生の生活、勉強、就職活動の方法、遊びに行くところ、食べ物を日本と韓国で比べ、その違いを見つけることを楽しんだ。私は、バディとの交流を通して、韓国の知らなかった一面について新たに知ることができた。

バディとの密度の濃い交流ができた一方で、私自身の国際交流の範囲がまだ狭い範囲でしかできていないことにも気が付かされた。私は、韓国の言語や文化についてある程度知っているため、交流の場面でよく話しかけたのは韓国人の学生になってしまった。しかし、他の国の学生に対しては、何を話題にすればいいのか、どのように接すればいいのか少し戸惑ってしまった。留学生が近くにいても、話しかける勇気が持てず、もどかしい思いをした。結局、日本の学生が話しかけている隣で、その話を聞いているだけの存在になってしまうことが多かった。本心では、様々な国の学生と友達になりたかったが、積極的に働き掛けることができなかったことを少し後悔している。私が積極的に話しかけることができなかった原因を、フォーラム後に自分なりに分析した。最も大きな原因は、私自身の「国際交流はこうあるべきである」という一種の思い込みがあったからである。その思い込みとは、国際交流をする際は、相手の文化について話題にするべきだというものである。私は、相手が〇〇人だということに目を向けて、相手の国の文化にばかり注目してしまい、狭い視点でしか相手を見ることしかできていなかった。そして、自分の知識が相手と共有するに値するかということばかり考えてしまった。つまり、相手を自分と同じくらいの年齢の学生として見つめ、深く知ろうとすることができていなかったのである。今回の反省から、今後国際交流の場では、日本人と友達になるときと同じように、相手に対して「知りたい」という思いを持って話しかけていきたいと思った。例えば、相手の家族について、趣味について、勉強していることについて、好きな食べ物について深く聞いてみるなど、相手に関心を持てばさまざまな会話ができるだろう。まずは、その人自身についてよく知り、そのうえで相手の国の文化についても理解していくことが積極的な交流につながるのではないかと考えた。

また、今回のフォーラムでは、自分自身が日本のホスト役になったことで、相手に自文化を紹介しなければならない立場になる経験ができた。留学生が日本や東京について疑問を持っていることに答えることの難しさや、東京の良さを紹介することの難しさを実感した。普段当たり前に生活しているからこそ、東京の魅力などを改めて聞かれると、うまく答えることができず、はっとさせられることが多かった。ここでは、特にはっとさせられた具体的な体験を２つ述べていきたい。

１つ目は、バディに「東京で今流行っているものは何？」と聞かれたときである。予想外の質問であったし、普段あまり意識していなかったので、すぐには答えられなかった。迷った末「タピオカとか、クレープとかかな…。」と答えたが、それが正しい答えなのかわからなかった。2 つ目は、留学生と日本人のグループで、原宿に遊びに行ったときのことである。原宿は、日本の若者文化を体感できる街というイメージから、一緒に歩くだけで楽しんでもらえるのではないかと考えた。そして、私たちは実際に原宿に行き、竹下通りを一緒に歩いた。竹下通りを一通り見て、確かに楽しかったが、お店がたくさんあるだけで、面白く日本文化を紹介することができたという満足感はあまり得られなかった。人がたくさんいること、派手な服装をした若者が歩いていることに、留学生は驚いてはくれていた。原宿で珍しいものを見たという経験が、留学生にとって楽しい思い出となってくれていたら幸いだが、私自身、もう少し準備をして迎えた方が良かったと思った。

今回のフォーラムでの「ホスト役」としての自分の役割を評価すると、準備不足であったと言わざるを得ない。フォーラム前は、自分は日本人として留学生の質問に答えればそれで十分だと思っていた。しかし、それだけでは文化交流として不十分だ。なぜなら、自分の国の文化をうまく説明できないままでは、他の国の文化を相対的に理解することができないからだ。ホスト国として、自分の国について説明できるようにし

ておくことは、友達を自分の家に呼ぶときに準備することと同じようなことだと思う。自分が普段生活している家に招くときでさえも、友達のために何かしら準備をするのが普通だ。何のお菓子を出すか、何をして一緒に過ごすかを考えておくように、日本のホスト役として準備をしておくべきだったと思う。

2.言語使用・学習の側面

私は、昨年の４月から１年弱、韓国語を学んできた。その結果、簡単な韓国語のやりとりや文章の作成ができるようになった。今回のフォーラムで私は、バディと韓国語を使っての交流もしたいと考えていた。実際に、フォーラムのバディが決まって、こちらから初めての連絡をするとき、私は日本語、韓国語、英語の3言語でメールの本文を作成した。日本語に加え、今まで自分が学んできた言語を駆使してやりとりをしていくことにわくわくした。そこから数回のやり取りを通して、私のバディは、大学時代に日本に１年間留学して、日本語のスピーキングを身に着けたが、日本語の読み書きは苦手だということを知った。そして、私自身は、韓国語で複雑なことを伝えるほどの能力がなかった。このような双方の言語能力の事情により、フォーラム前のラインでのやりとりは、日本語や韓国語ではなく、英語で行っていた。そのため、バディに会うまでは、「韓国人」のバディとやりとりをしているという感覚はほとんどなかった。相手に伝えたい情報を正確に伝える、という点では、私たちにとって英語が一番便利な「手段」だったと言える。

バディが来日した日、私達は東京駅で待ち合わせをした。初めて会ったとき、「お茶の水女子大学の学生ですか。」と話しかけられ、なんと挨拶をすればいいのか少し戸惑った。今まで英語でやりとりをしていたので、”Hello.”と声をかけたが、「日本語でいいよ」と流ちょうな日本語で話してくれたので、少し驚いた。フォーラムが始まってからは、バディは私が話す日本語をよく理解し、彼女自身も日本語を使いこなしていた。そのため、私はバディが日本語を話してくれることに甘えすぎてしまった。バディと私は、韓国語についての話題に良く振れたが、韓国語で積極的に話すことまではできなかった。相手が日本語を話してくれるという安心感から、自分から韓国語を積極的に使っていこうという勇気を出すことができなかった。

一方で、フォーラムが始まった後は、ライン上ではお互いの言語を積極的に使うようになった。バディは日本語で、私はそれに対して韓国語で答えるなど、簡単なやりとりを互いの言語で行うようになった。バディから、英語のやり取りの合間に日本語のメッセージが送られてきたとき、私は嬉しかった。少しずつでも互いの言語を使うことが、お互いを尊重しあえているという実感になっているのだと感じた。

フォーラム期間は、日本の大学で開催されたということもあり、日本語が主に使用されていた。そのため、日本人学生にとっては「外国語学習になった」という印象はあまりなかったように思う。しかし、留学生との交流が、今後の外国語学習の大きなモチベーションにつながったことは確かである。フォーラム全体を通して、私は海外の学生の語学力の高さに圧倒されることが多かった。私自身今まで、たくさんの外国語教育を受けてきたが、どうしても外国語のスピーキングに抵抗感や難しさを感じてしまっていた。しかし、留学生は日本語を堂々と、そして流ちょうに、自分の言葉として日本語を使いこなしている姿がとても印象的だった。

3.学問的学び

シンポジウムでは、さまざまな国の学生が、東アジアや世界での共生を目指し、自分たちにできることは何か、主体的に考えた成果を発表した。東アジア以外の学生以外にも、ニュージーランド、ポーランド、アメリカの学生から、東アジアでの共生の実現のために提案をしてくれたことはとても大きな学びになった。

例えば、ニュージーランドの発表からは、多文化主義国家として具体的に行っていることを学ぶことができた。ニュージーランドでは他の民族の文化を学ぶための教育や、文化を紹介する祭の開催、言語支援など、さまざまな多文化共生のための実践を行っている。日本でも、このようなニュージーランドの多文化主義政策を前向きに吸収していかなければならないと感じた。以前、お茶大の他の授業で、外務省入管局の職員が、「日本は、現時点では移民国家になることは現実的ではない」とおっしゃっていた。その最も大きな原因は、言語である。日本語はアジア圏の言語とは親和性が高いが、その他の地域の言葉とは大きく異なる点が多く、移民が習得するまでに膨大な資金や労力がかかるからだそうだ。確かに、ニュージーランドと日本では、移民や異文化の受け入れについての歴史的背景が大きく異なり、ニュージーランドで実現できたことを日本がそのまま応用できるわけではないだろう。しかし、ルーツが違う者同士でも、積極的に理解し合おうと努力することが大切であるのだと思う。

ポーランドの発表では、「過去の戦争や争いは現在の国際情勢に影響を与えるべきではない。」という主張に共感した。現在の東アジアでは、過去の対立や争いを解決できておらず、それが国際情勢に影響を与えてしまっている状況である。しかし、私たちは、過去の戦争や争いが国際情勢に影響を与えないために、過去の争いを「なかったこと」にしてはいけない。韓国の同徳女子大学の発表にあったように、過去の対立や争いを「人権問題」として捉え、加害国は、被害者に共感し謝罪する必要がある。このように、過去の対立を解決したうえで、現在の国際関係を構築していくべきだろう。そのうえで、同徳女子大や釜山外国語大学の

発表にあったように、現在東アジアや世界で起きている環境問題について解決しようと努力し、次世代のために平和で持続可能な地球を作り上げていく必要があるのだと考える。

4. イベントとしてのフォーラムについて

このフォーラムでは、10 日間という短い期間であったが、東アジアや世界の共生につながる 1 歩につながったと言える。その理由は 2 つ挙げられる。1 つ目は、国境の壁を越えて、多くの学生と朗らかに楽しく過ごせたからである。初日の歓迎会では、互いに緊張してまだぎこちなさが残っていたが、最終日の送別会では、全体の雰囲気が朗らかで温かいものへと大きく変わった。最終日の送別会では、思い出を付箋に綴り、ホワイトボードに貼る作業をした。全員が思い出を楽しく振り返り、最後にはホワイトボードがカラフルな付箋でいっぱいになった。そして、10 日間の楽しい日々が終わってしまうことを寂しく思った。このような国境を超えた楽しい時間を共に過ごしたことで、私たちはフォーラムが終わった後も連絡を取りあうことができるような仲になった。また、互いの国に遊びに行き、再び会うことができるだろう。私たちは、何か困ったときは互いに助け合えるような、国を超えたつながりを作ることができた。これが、ともに生きることの第一歩につながるだろう。2 つ目は、楽しい時間を共有するだけではなく、今世界にある問題に目を向け、前向きに活動していこうという意識を共有できたからである。普段の学生生活の中で、世界がともに生きるために国境を越えて協力したいと思っても、行動に移すことはなかなかできない。なぜなら、世界や東アジアでともに生きることの重要性を認識している仲間を集め、平和への一歩を踏み出すのには大きなエネルギーが必要だからである。しかし、今回のフォーラムを通して、私たちは互いに「ともに生きていきたい」という思いを共有することができた。そして、具体的な解決策も考え、互いに意見交換することができた。この経験から、私たちは同じ志を持つ仲間がいることを確認することができた。このフォーラムで意見交換をした仲間や共有できた意見は、今後の東アジアや世界の共生のために動き出すための力になるだろう。今後、このフォーラムでできた仲間を今後も大切にして、そして具体的な行動に移すことこそが重要になっていくだろう。

次に、フォーラムの次回に向けての改善点について述べたいと思う。1 つ目は、フォーラムでの主要言語が日本語であったということだ。使われる言語が多くが日本語であったことは、来年度以降改善すべきだろう。フォーラム参加者は全員、日本語がある程度できるという前提のもと、フォーラム中に行われたシンポジウムや連絡では、日本語が主に用いられていた。しかし私のバディは、フォーラムの募集が、「日本語と英語を用いる」ということを聞いて応募したそうで、思ったより英語を使う機会がなかったと言っていた。このことを聞いたとき、留学生の日本語のレベルがどの程度か、日本語学習者にとって、言語学習に最適な内容になっているかまではあまり考慮されていないように感じた。例えば、私のバディは、日本語で日常会話はできるが、読み書きや複雑な話題について話すことがあまりできないというレベルだった。そのため、フォーラム全体でわからないことが多かったという。これは、言語の問題を乗り越えるために、お互いに助けあえることのきっかけにはなったが、留学生がこのフォーラムの目的を十分に達成することにはつながらないだろう。このフォーラムは、政治問題などの複雑な事項を本音で話し合うことが大きな目的だった。お互いの本音で話し合うには、互いの話す言葉を十分に理解したうえで、相手の考えを理解しなければならない。このことから、シンポジウムのときは特に、通訳は必須だったのではないかと考えた。すべての言葉を通訳するのは 2 倍の時間がかかってしまうので、発表言語は日本語、パワーポイントは英語など、聞くか読むかのどちらかで理解できるような工夫をもっと行うべきだと思った。そして、質疑応答などについては、すべて通訳を付けるべきだと思った。来年度からは、通訳の係があってもいいかもしれない。また、日本語表記だけの配布物や連絡が多かったことは問題であると感じた。例えば、ライングループの連絡はほとんど日本語で行われていた。私のバディは漢字が苦手なので、いつも読んでいなかったと言っていた。重要な連絡は、私自身も言葉で確認するようにしていたが、あらゆる連絡や発言を日本語と英語の 2 言語で行うことを徹底すべきだと感じた。これは、留学生への配慮という役割だけでなく、日本人の学生自身の英語力も向上するのに役立つだろう。

2 つ目は、フォーラムに参加するにあたって、私自身も含め、参加者の心構えの共有が不十分であったように思う。10 月から、フォーラム参加メンバーは定期的に集まり、準備を進めていたが、各自の仕事の進捗状況を確認することだけが集まる目的となってしまっていた。フォーラムのイベントがそれぞれどのような目的を持っているのか、どのような思いを込めて計画を立てたのか、フォーラム開始までに共有する機会があってもよかったのではないだろうか。例えば、ツアーの計画してくれたメンバーがどのような意図でツアー場所を決めたのかなどを共有することができていれば、日本人もホスト役として案内する準備がしやすかったのではないかと感じる。また、フォーラム中に日本人参加者の遅刻が多かったことが気になった。スタディーツアーや日本体験ツアーで集合時間があるのにもかかわらず、連絡をせずに遅刻をする学生が少なくなかった。留学生は、いつも時間までに集合しており、よく待たされることになってしまっていた。海外では、日本人は「時間に厳しい」というイメージを持たれているという話をよく聞く。私は、そのイメージを

守らなければならないという義務があると考えているわけではない。日本人の友達同士ならば遅刻はよくあることだからだ。確かに、国際フォーラムで日本学生と留学生は互いに友人になることができた。友人ならば少しの遅刻はあっていいと思うかもしれない。しかし、日本学生は、留学生と友人であると同時に、日本のホスト役でもある。このホスト役としての意識が少し足りなかったように思う。大学主催のフォーラムという行事の中で、日本側で集合時間を公的に決め、留学生に守るように示していた。留学生に集合時間を示したのならば、その責任として、少なくともホスト役である日本人は時間を守るべきだったのではないかと思った。

5. 東アジア・世界がともに生きることについて

先日日経新聞で、日本人への主要国・地域への友好意識調査についての記事を読んだ。北朝鮮について「嫌い」と答えた人は、「どちらかと言えば嫌い」と答えた人を含め 84 パーセント、中国については 76 パーセント、韓国については 61 パーセントだった。これらの国と日本は、地理的に近い関係にあるのにもかかわらず、互いに好意的であるとは言えない。それは、歴史認識の問題があったり、外交関係があまり良好ではなかったりする現状があるからだという。確かに、この結果と分析は現在の世論を表しているのだろうが、記事を見て、フォーラムの参加国の学生を思い出し、悲しい気持ちになった。この世論調査に回答した人の多くは、北朝鮮や中国、韓国の人と交流したことがないまま、イメージで回答しているのだろう。少なくとも、私は現在、中国や韓国に対してマイナスイメージは持っていない。それは、これまでの交流を通して、それぞれの国の学生とともに話し合い、理解し合った経験があるからである。しかし、私自身も現在、北朝鮮に対してはあまり良い印象を抱いていない。なぜなら、北朝鮮については知らないことが多いからである。ニュースなどのメディアで報じられる北朝鮮は、核ミサイルの開発など恐怖を与える存在である。私たちは、メディアの受動的な情報収集だけでは、根拠が少ないまま、相手に対して負のイメージや偏見を持ってしまうのではないだろうか。マスメディアによる受動的な情報収集だけではなく、北朝鮮の核ミサイルの開発を行わなければならない事情を主体的に理解しようとすることで、北朝鮮に対しての印象が変わるかもしれない。また、北朝鮮に暮らす国民がどのような暮らしをしており、どのような考えを持っているのかについてももっと知っていくべきではないだろうか。このように、無知による偏見や負の感情をなくし、互いに共感することが共生のための大きな力になるに違いない。

これを実現するには、まず、東アジア地域のすべての人が、互いの人権を尊重し、現在起こっている問題を解決していこうという共通認識を持たなければならない。例えば、現在はグローバル化が進んでおり、様々な事情により日本国内に移住する外国人が増えてきている。2019 年 4 月からは改正入管法が施行され、さらに外国人の人数が増えるだろう。そうした状況下で、日本人と地域に住む外国人は、職場、学校、地域コミュニティにおいて、互いに協力しなければならない。互いの人権を守るために、賃金格差をなくしたり、災害が起こったときは協力し合って命を守らなければならない。グローバル社会になりつつある日本で、東アジア地域の対立を超え、互いに協力し合わなければいけないことは明白であろう。

そのためには、現在の東アジアの対立の原因を見つめなおす必要がある。そしてそこには、東アジアの過去の対立があるだろう。現在の国家レベルでの東アジアの対立は、過去の条約によって、「解決した」とされているものも多い。しかし、条約で解決したとされている問題であっても、互いに納得できていないからこそ、現在の対立を生んでいるのである。このように、現在まで対立を生んでいる条約に固執し、それを解決の根拠とする価値があると本当に言えるのだろうか。過去に結んだ条約は、その当時の考えに基づいたもので、それが絶対的に正しいとは言えない。過去に「条約を結び、解決した」という理由で、現在の対立を取るに足らないものとするのは、現在の相手の考えを無視した一方的な主張である。相手国の言い分を聞き、改めて互いが納得できるまで話し合うべきだ。しかし、このような国家同士の対立は、個人である私たちが働きかけて解決できることではない。

それでは、私たちは個人としてどのように行動すればよいのだろうか。それは、東アジア人としての他国に対する責任を持ち、常に東アジアの他国について知ろうとする努力をすることだ。私たちは、メディアで取り上げられる東アジアの国が抱える対立や問題を、自分たち自身の問題として捉えなければならない。そして、互いの言語を学び、各国のメディアを比較し、互いの考え方を理解することが偏見をなくしていくことにつながるだろう。また、東アジア地域の人同士の文化交流を積極的に行っていくことが必要だ。現在でも、日本、中国、韓国の 3 国は地理的に近いことから、互いの料理や建築・美術、音楽などの分野では、文化交流が盛んである。しかし、それらの交流は文化だけであり、人同士の交流自体はそこまで活発ではない。今後は現在盛んにおこなわれている文化交流を利用し、人同士の交流を盛んにしていきたい。

そして、これらの行動を先頭に立って、行っていくべきなのは、フォーラムに参加した私たちである。私たちは、平和な東アジアを、そして世界を築いていきたいという共通意識と、それを実現するためのアイデアを一人ひとりが持っている。私たちが意識的に活動を続ければ、そこから大きな変化をもたらす可能性が十分にある。まずは、フォーラムに参加した私たちがこれらを実践して、考えを家族や友達と共有していき

たい。そして私たちの周りから、人々の東アジアの国々への考え方を少しずつ変えていき、「ともに生きる」ことを広めていきたい。

6.結びに

この場をお借りして、今回のフォーラムを開催してくださった森山先生を始めとし、講演をしてくださった大学の先生方、サポートをしてくださった国際センターの井上さんや長塚さん、そしてフォーラム参加者の皆さまに感謝を述べたいと思います。ありがとうございました。

＜参考文献＞

『周辺国への好感度低く　中国「嫌い」7割　本社郵送世論調査』、日本経済新聞、2019-1-21、日本経済新聞電子版（最終閲覧 2019-2-24）
https://www.nikkei.com/article/DGXMZO40237280Q9A120C1905M00/

理解から尊重へ

1.国際的交流的側面

バディ制度が大変良い経験になった。LINE での挨拶からドキドキしながら東京駅にお迎えに行った初対面と、どうしようも無い名残惜しさに駆られたお別れは、終わってしばらく経った今でも忘れられない。短い限られた時間ではあったが、最終日の夜には、食事をしながらお互いの将来について語り合えるほど仲が深まったことを大変嬉しく思っている。また、１０日間、一緒にご飯を食べたり、講義を受けたり、ディスカッションをしたり、ツアーに参加したり、放課後遊びに行ったりと、一緒に過ごし色々な話をすればするほど、バディの母国である韓国に対する興味も自然と深まっていった。韓流ドラマやアイドルにもあまり詳しくない私が、韓国への興味をここまで高めていることに自分でも驚いている。このつながりを大切にしていきたいし、韓国へ近い将来必ず会いにいきたい。

今回の国際フォーラムでは、人と人としての交流の中で、自然と世界に目が向けられたような気がした。また、そういった国際交流を通して、より広いグローバルな視点で物事を考えることができるきっかけになった。今回の実習を通してできた世界との繋がりをこれからも絶やすことなく、互いを知り、互いの国を知っていきながらこの交流を続けていくことがお互いの国の尊重にもつながるだろう。私たちにできることは交流のなかで、相手への理解から尊重へと発展させていくことである。この発展は、人として接していく中で自然に怒るものであることもフォーラムでの交流で体験できた。国際交流を通して相手に対するポジティブな捉え方のシフトが可能であるのだ。未来のより良い東アジア関係、そしてもっと広いスケールでの国際関係を築いていくために、個人レベルでの国際交流の場をもっともっと増やして共生実現のために活用すべきであると考える。

2.言語使用・学習の側面

まず言語使用について。発表やディスカッションの多言語な空間が日常とは少し違ってとても新鮮だった。もっと大学の普段の授業でもこのような環境があったらいいのにと思った。(例えば留学生とお茶大生が一緒に授業を受ける国際交流や多文化共生の授業などにおける講義やグループワークにおいて）韓国語やポーランド語で、「お腹が空いた」「寒い」「ありがとう」などなどちょっとした単語を教えてもらう時間がとても楽しかった。少し単語を教えてもらって使えるようになるだけで、グッと心の距離が縮まったような気がしたからだ。そして、各国の学生が積極的に日本語を話してくれていることに尊敬の意を覚えたとともに、自分が英語や日本語でしか返せないことにもどかしさを感じた。

また、言語学習に関してヴァッサー大学の発表で、外国語を学ぶとその言葉での思考回路にシフトすることができると、言語学習の重要性を示してくださったが、まさに外国語を学ぶことは自分の凝り固まった狭い視野を広げてくれる最も身近なツールであることを改めて認識した。翻訳も検索したらすぐにできてしまう今だからこそ、新しい言語を学んで自分のものにすることには、国を超えることができる様々な可能性があると感じている。完璧に話せることをゴールにしようとしたり難しそうと躊躇せず、様々な言語をかじってみようと思えるようになった。

3.学問的学び

講演では山本先生の「ともに生きる」の定義が印象的だった。「お互いに、相手がいなければできなかった形で何かを達成すること」。東アジアの共生をテーマに発表準備を進めていく中で、メンバーと議論を深めなかなか納得いく答えが出せなかった点だったので、山本先生の定義を聞いて、なるほどと思った。東アジア人としてのアイデンティティを持てたとして、果たしてそれが「ともに生きる」ことに直結するのかが疑問だったからである。その上で、一緒に何か達成して、お互いが必要不可欠な存在であるという認識が必要になってくるのだろう。それは実施したアンケート結果にも明確に現れていたが、やはり東アジア人としてのアイデンティティやつながりが希薄であることを改めて認識した。この認識が薄いことに加え、何かを一緒に達成する経験が少ないので、「ともに生きている」感覚が得られないのだ。国際フォーラムのような場で何か一緒に達成するという成功経験を積み重ねていくことが個人レベルで、共生実現のためにできることなのだと考える。

シンポジウムでは各国の特色が出た発表で大変勉強になったし、東アジアの共生についてそれぞれの国が熱心に考えてきたということがひしひしと伝わってきた。中でも印象的だったのがアジア圏外であるニュージランド、アメリカ、そしてポーランドの発表である。自らの国の歴史や生活環境での経験を紹介しながら、東アジアがいかにして対立を乗り越えて共に生きることができるのかを提案してくださった姿に感動した。そして東アジアの国の発表も共生への道が遠く無いと思えるような前向きな発表で希望が持てるような内容であった。世界の様々な考え方をきく中で、国一つ一つ、そして人間一人一人違いがあるのは当たり前

であり、共生のために必要なものだと気づかされた。その違いがあることで、多様な物の捉え方が生まれ、それらを上手に組み合わせていくことで、世界中の人々が納得して、共生できる世の中を作りあげていけると考える。

そして、今回のフォーラムにおいて担当した発表が印象に残っている。発表準備で、これほど東アジアの現状や問題点について考えたことがなかった上に、答えがないテーマであるからこそ、つまずくことも多々あった。様々な文献を読みながら、一緒に担当した２人と夜遅くまで頭を抱えながら、真剣に共生についてたくさん考えて話し合った時間はファーラムにおいてもっとも印象深いことの一つである。また、発表前に森山先生と山本先生からアドバイスやフェードバックをいただけたことも大変良い経験になった。1、2 年生の他の授業では先生から個別でこんなにもしっかりアドバイスいただけることはなかなかなかったからである。卒論を考える上でも、こういった経験ができたことが大変ありがたく思っている。そして、英語で発表したこと、また共生について深く考えたことは、自分にとって自信につながった。フォーラムという国際的な場で発表させていただいた経験は今後の将来の糧になると確信している。

4. イベントとしてのフォーラムについて

よかった点としては、バディ制度やツアー、ディスカッションなどを通して他国の学生と密に交流できる時間が多かったことである。そして実際に集まってともに過ごすことで、行動をともにして楽しみながらも、時には国家間が抱える難しい問題に一緒に頭を抱え、何ができるのかをそれぞれの視点からシェアして話し合うことができた。また、先生方や国際教育センターの方々の手厚いサポートが大変ありがたく、LINE などで気になったことはすぐに相談できたのがよかった。

改善点としては、３つあげたい。まず１点目に発表に関してであるが、事前準備の段階で、参加する日本人同士でも発表内容についてディスカッションする場がほしかった。担当になった３人で準備をすることで集まりやすく、話し合いが進めやすいという利点ももちろんあるのだが、発表者３人だけの提唱になってしまった。漠然とした大きな難しいテーマのなかで、つまずいてしまう場面もあったので、他の人の意見を積極的に取り入れたり、もしくは準備したものを担当外のみんなの前で発表し、意見をもらう機会を増やすことで、シンポジウムでの発表内容も濃いものに、またディスカッションにおいてももっと深い議論ができたかと思う。２点目に他担当の情報共有（特にツアーと送別会）がもっとあればよかったと思う。小さいことではあるのだが、送別会でのバディへのお土産であらかじめ買っていたクリアファイルと被ってしまい、対応に焦ってしまった。サプライズ要素があるのは日本側の参加者にとっても楽しいことではあるのだが、必要になりそうな情報はあらかじめ共有してもらえると心構えができて担当外の人も積極的に動けると感じた。３つ目に、交流する学生が固定化してしまいがちだったことである。10 日間という短い時間は全ての人と交流するには足りなかったので、プログラムの中でもっと「ごちゃまぜ」になれるような機会が欲しかった。特にディスカッションに関しては、したりない！と思えるほど内容の濃い前向きな議論ができたので、もっともっと議論がしたかったと感じた。シンポジウムだけでなく、基調講演の際にもみんなでディスカッションができると、学びをアウトプットしつつ意見をシェアでき、輪も広がると思う。

5. 東アジア・世界がともに生きることについて

私たち一人一人がいつまでも国や政府の問題に目をそむけていては、本当の意味で東アジアが近づく日はいつまで経っても来ないだろう。ともに生きることを政府レベルの外交にばかり頼ってはいけない。私たち個人が東アジアや世界の歴史を学び、事実を知り、そしてそのことについて深く考える努力をしなければならないと改めて感じた。一見大きすぎる問題で、自分たち国民にできることはないように思える。しかしこのフォーラムで、その国の人が好きだから、その国の人と友達だから、という単純なことが、社会問題に対する危機感を感じるきっかけになるということを体感した。

フォーラムという環境が恵まれていることに終わってから改めて感じている。それは、互いを理解するだけでなく、理解の発展としての相手の「尊重」が実現した環境であったからだ。尊重するということは、相手を理解した上で関わり・つながりを築いていくことである。最終日、思い出のポストイットでいっぱいになったホワイトボードはまさにつながりの証拠であり、尊重の証拠であると思う。ともに生きるとはまさにこういうことなんだな、と心から思った。世界が私たちのような尊重しあえる関係やつながりを築けていければ、対立なんて解決できてしまうのではないかと、軽率ではあるかもしれないが本気で思えたのだ。集まったメンバーが、理解し合い、友情を結び、一人の友人として交流をつづけることは、国際理解・親善を進め、世界をよりよいものへと変えていく大きな希望になると改めて感じることができた。

また、前期に受けた森山先生の釜山外大とのリモート授業を受けるまで日韓問題を直視してこなかった私にとって、今回のフォーラムで日韓よりも広い東アジアスケールでの問題に向き合い、様々な国の人々と話し合えたことは大変大きな収穫だった。どうして私たちのように、国と国同士は仲良くなれないのかと疑問が残るばかりである。歴史上や政治上のわだかまりを超えて交流できる私たちから、共生の第一歩ははじま

るのだと強く考えさせられた国際学生フォーラムだった。

6. 最後に

フォーラムに参加できたこと、そのために関わってくださった方々、新しく出会った学生に感謝申し上げたい。準備を進めていく中で、また本番の 10 日間を通して、自分自身の共生や平和に対する意識が強くなり、自分ができることは何なのか真剣に考えるきっかけとなった。自分が見聞きして感じたことや学んだことを忘れず、今後の学生生活や人生に生かしていきたい。

国際学生フォーラムを通しての学び

1. 国際的交流的側面

このフォーラムを通して、そしてこのフォーラムについて振り返る機会を利用して、国を越えた交流と、国を超えない交流に対する、学生である私の姿勢の共通点・相違点に関して考えた。フォーラム中は国や大学、生活、文化など様々な興味が湧いてきて、沢山質問し合い、お互いを知ることによって関係を築いた。相手のことを知って、もっと仲良くなりたいという思いで交流していた。この姿勢は、国を超えても超えなくても同じであるということに気づいた。日本人同士であっても、お互いのバックグラウンドや趣味などを話すことによって、交流をしていくからだ。ただ、私の場合、国を超えると、相手自身だけではなく、相手の国事情に注目しやすい傾向がある。対して、国を超えない場合は、相手自身に関する質問や話題が多いように感じる。これは、外国が余りにも未知の世界であるため、違いが大きく、どのように違うのか想像できない、という意識が私のなかにあるからだと思った。

政府レベルの問題が交流に影響を及ぼすのは、やはり国を超えた場合である。例えば、韓国からの学生と交流する時には、日韓問題を理由に日本人のことが嫌いなのではないか、仲良くなることができないのではないか、日韓問題関連の話題を出してもよいものか、というような心配や不安を抱いたことがあった。配慮するポイントが、政府レベルの問題に依るものであったのだ。そのような心配や不安を、韓国人全体に抱くことになることが多いのだ。一方で、これまでの、あくまでも私の日本人とのつきあいの中では、その人自身のバックグラウンドに対して、配慮して発言すべきだなと感じたポイントが多かったように思う。配慮すべきポイントが、相手固有なのである。

これらの考察から、私自身が外国人と「国対国」で交流していることもあるということが分かった。その姿勢を全否定する必要はないと思う。その国のことを知りたいと思う好奇心は尊重されるべきだからだ。しかし、その姿勢が、時にはマイナス要素をもつこともある。否定的な決めつけは、相手との交流の妨げになることもあるからだ。ただ、私の中に、政府レベルの問題に依る心配や不安があっても、乗り越えることができたのは、それでも仲良くなりたい、楽しい話もシビアな話もしてみたい、という前向きな気持ちがあったからだと思う。一緒に考えるために集った学生が相手だからこそ、前向きになりやすかったという側面もあるだろう。

2. 言語使用・学習の側面

留学生の皆さんの日本語が上手であったため、日本語を使用できることに甘えていた自分がいたことは反省点である。これまで最も熱心に取り組んできた英語で会話をしたり、韓国語で自分の名前を言ったりして、留学生側の言葉を積極的に使用することもできたと思う。また、留学生の意見・真意を最も詳しく理解するためには、彼らに母国語で話してもらうことが一番であると、今回の交流・シンポジウムを通して感じた。相手を理解するためにも、相手の母国語を理解できることや会話で使用できることは大切であると改めて思った。

これまでは興味・好き嫌いを理由に外国語を選び、学習してきた。大学生になってから勉強し始めた外国語は、難しい・思ったほど楽しくないという理由でやめてしまった。しかし、フォーラムに参加し、議論を重ねるなかで、相手の一番詳しく率直な意見を聞くために、あるいは外国語で書かれたニュースを読むために、外国語の習得は非常に大切であると身をもって感じた。それらのことをするために、特に今回一生懸命考えた東アジアについてこれからも考え続けていくために、私自身が韓国語や中国語を学ぶ必要性を感じているとともに、習得したいという情熱が湧いてきた。

留学生のなかでも、日本語レベルにばらつきがある。議論や会話になると、どうしても話すことができる人が中心になってしまう。そのときに、わかりやすく言い換えたり、ゆっくり話したりすることによって、皆が理解できるように努めること、皆が議論に参加できるようにすることが大切であると分かった。私自身は、やさしい日本語でゆっくり会話するように意識した。意識することに大きな労力は必要なく、大変ではないし、嫌な気持ちもない。ただ、相手のことを温かい気持ちで配慮している、という認識は自分自身にあった。私が、ネイティブと英語で話す際にも、相手は理解しやすいように、思いやりの心をもって英語を発してくれているのだろうと改めて感じた。私にとって分かりやすい英語で話そうと努めてくれる人に対して、感謝の気持ちを忘れないようにしようと思った。同時に、英語に関しては、相手からの心優しい配慮が必要にならないほど、ネイティブ並に話すことができるよう、これからも英語の学習に邁進していこうと思った。

3. 学問的学び

シンポジウムで非常に驚きが大きく、印象に残った学びは、ポーランドの強い未来志向についてである。ワルシャワ大学の学生 2 人によると、ドイツから謝罪を受けたというはっきりとした認識はないという。しかし、過去は過去、歴史は歴史であるという理由で、過去の出来事は置いておき、今現在のことを考えるべ

きだと繰り返し述べていたことが印象的であった。その未来志向の背景には何があるのか、どうしてそのように思えるのか、EU が関係しているのか、気になった。また、「過去を“置いておく”」「過去を“考えない”」という言葉をそのまま鵜呑みにしてはいけないようにも思った。過去の対立における問題の一応の解決を経た上で反省材料として扱うのか、問題は未だ解決していないが触れていないのか、によって、大きく言葉の意味合いは異なってくる。このトピックに関して、東アジアに注目すると、全体討論において、日本が今過去を“置いた”場合、日本にとって都合が良すぎる結果他国に反感を抱かせてしまうという意見が出た。過去を“置く”際にも、きっと相互に理解・妥協しなければいけない。ポーランドの姿勢をそのまま日本及び東アジアに応用することは難しいだろう。現に、戦時中から続く問題が完全に解決していない状況のなか、経済・産業面における協力が進んでおり、人・文化の移動もさかんである。東アジアの場合、戦争関連の問題が取り残されているという言い方もできるかもしれない。

これまで、グローバル文化学環所属の学生であることや国際関係に興味があることを理由に、日韓問題や日中問題について考えていかなければならない、と感じていたのは事実である。しかし、今思えば半強制的な義務感であったと思う。実際は、そのような問題について考えなくても、私自身は、特に何事もなく生きている。今回、フォーラムで議論するなかで、東アジアの問題に限らず、環境問題や社会問題、日米関係などあらゆる課題に関して考えていかなければならない責任感を感じた。そして考え続けていきたいという強い思いを自分のなかに感じた。これは、理性的に理屈があるというよりは、感情的にわきあがった思いであった。これこそが、山本先生がおっしゃった「責任感」である。そしてこの責任感が、小松先生の講演にあった言語教育、同徳女子大学の社会問題を共に解決しようという姿勢、ニュージーランドの多文化主義の背景にある移民へのサポート、大連理工大学が提案した非常に具体的な事業グループ、世界的にリーダーシップを示すアメリカが何ができるか考えたヴッサー大学の発表、釜山外国語大学が紹介したバケツチャレンジ、ワルシャワ大学による未来志向的に一緒に将来をつくりあげるべきだという主張、私たちが発表で唱えた、東アジアの共生及びシティズンシップに関する考えにあてはまる、もしくは通ずるのではないか、と考えた。

フォーラムの準備期間及びシンポジウムを通して、言葉とその言葉が含みもつ実際のアクションに対する解釈の仕方について考えさせられた。発表を内容を考える上で、まず「共生＝共に生きること」とは何だろうか、という疑問にぶち当たった。多文化共生、異文化共生、ともに生きる･･･様々な場面で使われているが、非常に抽象的な言葉であることに気づいた。「共生」とは、実際にどのような考えをもち行動することを指すのか、が分からず、3 人で意見を交わしながら固めていった。私たちのなかで「共生」が何なのか明確になってくることによって、提案内容やその背景にある問題が具体化していった。シンポジウムでは、真の謝罪とは何なのかというテーマを皆で議論し合った。謝罪のあり方に対する解釈が、日本と韓国の間で異なっていること、慰安婦問題の被害者が求める謝罪を日本側は行なっていないということ、一方で日本側は謝罪をしたつもりだということなどが分かった。ただ単に反省と謝罪の言葉を述べれば良いのではなく、相手の心に響く謝罪をしなければ意味がないのではないかと思った。フォーム全体を通して「解決」という言葉に関しても考えさせられた。日韓問題の解決とは何なのだろうか。今国家レベルでもめていることが全て収まれば解決なのだろうか。個人個人が一緒に問題を考えていこうという気持ちをもつことができれば解決なのだろうか。一方で、日本の過去の行為、つまり戦時中に韓国人や中国人を残酷な形で搾取したことについては、これからも反省と償いの気持ちを持ち続けなくてはならず、解決という言葉を用いることは難しい、適さないのではないだろうか。容易に用いることができる熟語の意味合いや解釈の仕方について考えることの重要性や面白みに気づいたフォーラムであった。

4. イベントとしてのフォーラムについて

良かった点の一つ目は、各担当がしっかり仕事を行なったおかげで、いずれの活動においても担当者を信頼して安心して活動に取り組むことができたことだ。不快感や不安感を感じることがほとんどなかった。お茶の水女子大学側全体に、快く迎え入れようという精神があったように思う。また、留学生側も進んで活動に参加していこう、交流していこうという姿勢が見受けられた。良かった点二つ目は、シンポジウムだけではなく、スタディツアーや自由研修、歓送迎会など、仲を深める活動がしっかり確保されていたことだ。日程のなかに組み込まれていたことによって、必然的に留学生と一緒にいる時間をもつことができたからだ。一年次に履修したサマープログラムでは、日程に交流機会を含めていなかったため、多くの留学生は各自東京観光や友人との約束を日中に入れていた。その結果、予定が合わず、プロジェクトワークの予定をたてることが難しかったという声も私の周りにはあった。日程を決めて、ある程度参加学生を拘束しておくことは、学生間の交流やワークの充実度を高めるために、必要なのではないかと思った。

難しいと思った点は、留学生間の交流が少なかったことだ。欧米からの学生とアジアからの学生の間に溝があったわけではなかった。しかし、ご飯を食べるときや移動するときは、やはり同じ国及び大学同士でかたまって行動することが多かったように思う。また、お茶大生－留学生の交流はさかんだったが、留学生同士の交流は相対的に少なかった。バディはあらゆる面で必要であるが、バディがいることによって、どうしてもバデ

ィ及びお茶大生－留学生の交流の場が増えてしまう。もう少し留学生同士の交流がさかんになってもよいのではないかと思った。ただ、これには当人の性格やその場の流れなども背景にあるだろう。また、歓迎会・送別会・議論以外は、強制的に様々な国籍の人々が話さなければいけないという機会はない。新しく人間関係をつくっていく必要のある環境に置かれたときに、誰か知っている人と一緒にいると安心する気持ちも分かる。自由研修や日程外の交流時に、お茶の水女子大学側が複数名集まることよって、必然的に留学生同士も、より近い距離で同じ時間を過ごすことができていたため、受入側に、そのような意識があってもよいのではないかと思った。

改善点は、発表者以外のお茶の水女子大学学生に、シンポジウムの内容に関して、考える時間が少なかったことだ。フォーラム前に考える機会があるのとないのとで、学びが増減するとは思わない。ただ、これまでの大学での授業全体を通しても、自分なりにしっかり考えて挑む議論や論文テストほど、得たものや充実感は大きかったように感じている。また、東アジアの学生として、主催者側の学生として、フォーラムに向けて皆が事前に考える姿勢はあっても良いのではないか。一方で、それぞれ担当していることがあるため、全員が発表者のレベルまで熟考することができる機会を与えることが難しいということも事実である。発表者がシンポジウムのテーマに関して熟考できるのに対して、他の担当者は国際イベントを運営するという経験ができるという点では、各自メリットを得ていることには間違いない。そこで、お茶の水女子大学学生同士で（グループに分かれる/全体で）、テーマについて考えていることや疑問に思うことを話し合ってみるのはどうだろうか。テーマが難しく、うまく言葉にできないこともあるだろう。しかし、うまく言葉にできないモヤモヤや知りたいことを自覚した上で、シンポジウムに臨み、モヤモヤを解決しようと努力することによって、各自学びの成長をはっきりと実感することができるのではないだろうか。

5.東アジア・世界がともに生きることについて

東アジア、そして世界の人々が、様々な問題を一緒になんとかしていきたい、一緒に考えていきたいと心の底から思い、何らかの形でアクションを起こしたいと思うことこそ、ともに生きることだと私は思う。シンポジウムで多くの人が言っていたように、政府間の対立を解決することは非常に難しいと考える。そのなかで、個人レベルの対立を解決するため、そして東アジア、世界がともに生きるためには、直接交流と対話をすることが一番重要であると考える。なぜなら、個人レベルの対立は、政府の対立を理由にした心の問題であると考えたからだ。相手を憎悪して、自分の一方的な考えに基づいて相手を非難して、相手の意見を聞こうとしないのは、冷たい心であるからだ。他の国の人に冷たい心をもってしまうのは、メディアや教育、差別用語などによって植え付けられる否定的なイメージがあるというのが最も大きな理由であるだろう。この冷たい心を温かい・優しい心に変えていくために、つまり、相手を尊敬して、相手の意見に耳を傾けて、意見の背景も理解しようと努めて、自身の考えについて反省もすることができるようになるために、直接的な交流と対話が重要なのだ。直接交流することによって、相手の様々な側面を知ることができ、否定的なイメージは減るだろう。実際、私は、はじめて韓国人と直接交流したときに、韓国人全員が日本人のことを嫌っているわけではないと実感することができた。対話は、相手の意見と自分の意見について考えて、前向きな方向性を見いだすことができる上に、互いの距離をさらに縮める。友人と喧嘩をした際には、お互いの悪かったところを反省して、互いに謝ったものだ。直接交流と対話を通じて、相手は大切な存在になる。大切な存在になると、国家間関係が悪化したり、相手の国で災害が起こったりすると、心配し、何かできることをやりたい、なんとか改善していきたい、という強い思いがこみ上げてくるはずだ。この思いは、前述した「責任感」と通ずるところがあるだろう。慰安婦問題についても、政府の問題ではなく、人権問題として受け止めることができるようになるのではないか。もしメディアから自国中心的な情報が流れてきたとしても、内容を批判的に受け止めることができるだろう。確かに、偏見や対抗心をうみやすいメディアや教育を改革していくことも大切である。しかし、今回の直接交流と対話を通して、自分の五感で情報を得て、実際に自分で対話したり考えたりするという実体験は私の心や考え方を大きく動かしたと感じている。深く共生について考えたからこそ、様々なメディアの情報を得ていく必要性と得ていきたいという思いをこれまでの人生で１番感じた。お茶の水女子大学にまで来てくれた留学生や一緒にフォーラムの準備をしてきたお茶の水女子大学の学生の皆さんとの絆を大切にしたい、これからも交流を続けていきたい、再会したいという熱い気持ちも生まれた。したがって、私は東アジア、そして世界がともに生きるために、直接交流と対話が最も有効な手段の１つであると考える。科学技術の発展を利用した遠隔授業や交流プログラムが人々の身近なところに増えていったら良いと思う。また、そのような機会に挑戦したいと思う人が増えたら良いと思う。そのために私自身は、今回のフォーラムを通して感じたことを周囲の人々に広めて、彼らの東アジアに関するイメージにプラスの影響を与えるだけではなく、直接交流や対話に興味をもってもらえるようにしていきたい。これから本格的に実習を開始するだろうグローバル文化学環の後輩たちに勧めていきたい。また、今回出会った皆さんとの交流をこれからも続け、問題について対話もしていく。直接交流と対話を通して皆が温かい心をもち、ともに生きてくことの重要性を感じていけたら嬉しい。

国際交流を通して感じた言語教育の重要性

1.国際交流的側面

私は国際交流に関するイベントに今まで全く参加したことがなく、今回のフォーラム参加を決めたのも自分にとっては一大決心でした。国を超えた学生交流は自分にとって非常に新鮮なものであったとともに、ツアーなどで海外学生に対して日本の文化について説明をする機会を通して日本について今までよりも詳しくなることができたように思いました。さらにこの機会に、自分は日本に住んでいる身でありながら日本の歴史や文化についての知識を全然持っていなかったということを実感しました。また、講演の合間や討論で海外の学生と話している時に、日本人の歴史認識について聞かれることが何度かありましたが、そこでも自分の認識の甘さを感じました。まずフォーラム前の段階では、自分の認識云々以前に日本と東アジアの国々の時事問題に対する関心が薄く、どういう問題が起きているのか全然知らない状態でした。国際交流の場で海外の学生が自分の周りの国に対する認識を語っているのに対して、自分があまりにも無知な状態でいたということを痛いほど感じてかなりショックを受けました。

2.言語使用・学習の側面

今回のフォーラムでは、あまり英語を使う機会がなかったのですが、海外学生の方々が母国語ではない日本語を非常に上手く使いこなしている様子を見て、大変刺激を受けました。特にバディのワルシャワ大学の学生の方々は英語も日本語もとても上手で、フォーラム期間中たくさんお話しする中で、語学ができることによって触れ合える世界が広がるということを学ぶと共に、積極的に言葉を発していくことの重要性も感じました。また、私は後期の月曜日の昼休みに行われていたポーランド語講座に参加して、今回のフォーラムに備えてポーランド語の勉強をしました。ポーランド語を学ぶのはもちろん初めてで、こんにちはやありがとうなどの初歩的なあいさつも全く分からない状態からのスタートでしたが、あいさつや文法の初歩を学ぶうちに少しずつ身体に言葉が定着していく感覚を味わうことができました。言語だけでなくポーランドの文化について触れたことによって、ポーランドという国自体をより身近な存在に感じることができたのはとても良い経験になったと思います。現代では英語ができれば世界中の多くの国の人たちと会話ができるため、英語だけ勉強していれば語学学習は十分だという考え方もできると思います。しかし、私がフォーラムを終えてみて感じたのは、今まで全く触れたことがなかったような言語を勉強してみることで見えてくるものが増えるということです。私自身が体験した例を挙げると、Twitter や Instagram などで覚えたばかりのポーランド語をいろいろ入力して検索してみても、初めて見るような行事や食べ物の画像に出会うことができました。ほんの数か月勉強するだけでも、ネット上で見た簡単なポーランド語の文の構造が分かるようになる喜びが感じられたり、テレビなどでポーランドについて放送されているのを見ても親近感が湧くようになったり、自分の心の中でも大きく変化が起こったような気がしています。外国語を自分で自由自在に操れるようになるにはとても時間がかかりますが、初歩を学ぶだけでも非常に多くのものが得られるということが分かったため、これからもっと積極的にいろいろな種類の言語を学習してみようと思う気持ちが強くなりました。

3.学問的学び

まず、小松先生による講演ではベルギーとカナダの言語教育について学びました。ベルギーにはオランダ語話者とフランス語話者がいることは何となく知っていましたが、対立が起きていたということはこの講演で初めて知りました。複数の言語を身に付けることを積極的に評価するという「複言語主義」が欧州の言語政策として紹介されていましたが、私はこれを聞いて日本でもこの考え方が定着すればもう少し他の国への理解が深まるのではないかと思いました。イマ―ジョン教育についての話も初めて耳にしましたが、今後のベルギーでこの制度がどのような展開を見せていくのか注目していきたいです。山口大学の山本先生の講演は周りの人と話し合う機会がたくさん設けられていて、頭を使いながら楽しんで講演を聞くことができました。私たちはつい物事を二元的に捉えてしまいがちですが、そこまで世の中は単純にはできていないということを深く感じました。共に生きるために、私たちそれぞれが色々な影響を受けて自己の精神や思想を形作っていると考えれば、もっと互いに歩み寄ることができるということを学びました。各大学のプレゼンテーションではいずれにおいてもいろいろな視点から共生についての提案がなされていて、どれもとても興味深かったです。東アジア以外の国々の発表では日本との歴史的背景や文化的背景の違いも感じたものの、それぞれの国が共生のためにどのようなことに取り組んできたのかを知ることができたのに加えて、各国の歴史や文化について詳しく知る良い機会になりました。特にポーランドの歴史については知らないことだらけだったので、プレゼンテーションを聞いて非常に勉強になりました。

4.イベントとしてのフォーラムについて

このフォーラムの良かった点は、海外学生とのパーティーやツアーなどの交流の機会がたくさんあったことで、濃い時間を自分のバディと過ごすことができたということです。期間中にイベントがずっと入っているわけでなく、自由に予定を決められる日があったのも各々の希望に沿ったプランが作れたという点で非常に良かったと思います。また、良くなかった点は、シンポジウム、特に招待講演で学生ではなく先生が主体となって質疑応答の時間を進めるような形になってしまったということです。学生からの意見もいくつかは出ていたものの、シンポジウム初日ということもあって全体的に雰囲気もかたく、私自身も少し身構えすぎてしまっていたというように感じました。最初だと思って身構えることなく、もう少し学生が質問者として積極性を持ってシンポジウムに参加していくべきだと思いました。また、このことに関連して私はフォーラムの前に東アジアの問題についてもう少し勉強してからシンポジウムなどに臨むべきだったということを少し後悔しました。フォーラム前はどうしても他の準備のことに意識が行ってしまって、なかなか自分で時間を割いて調べる作業をしなかったのはあまり良くなかったと思いました。もちろん東アジアの問題だけでなく国際情勢に日頃から興味を持ったり、いろいろな分野の知識を取り入れたりした上でシンポジウムに臨めばもっと討論を盛り上げることができたと思いました。

5. 東アジア・世界が共に生きることについて

現在は、日中関係が温かい関係になりつつあるとともに、日韓関係はあまりよくない状況であります。日中韓の間での互いの理解を深めるために私が最も重要な事項だと考えていることは、言語教育です。今回のフォーラム中に出た意見として、学生の間で国連のような組織を作るということがありましたが、積極的に国際問題に注目していく学生がいる一方で、学生の大多数を占めているのは、国際問題は自分がかかわる問題ではなくて政府をはじめとする国際問題に携わるような人たちが何とかするものだろうと思って当事者意識を持っていない人たちばかりであると考えます。共生ということで他の国と本当に友好な関係を築きたければ、大多数の人の意識を何とかする以外に道はなく、その大多数の人のほとんどが通る道として教育があります。その中でも言語教育は国際的な会話を行うツールとしてなくてはならないものであるとともに、言語を学ぶことに加えてその言語圏の国々の風土や生活習慣について理解を深めるということが共生を目指すうえで重要な意味を成すと考えられます。言語の授業の在り方としても、ただ文法事項の教育を行いその理解を測るテストをするだけでは教育として足りないはずです。言語教育では、ただ暗記したり文章を作れるようになったりするということをゴールと考えるのではなく、言語の習得とともに自国とは違った文化についての知識を得ることを目指していくべきだということを、今回のフォーラムを通して学びました。言葉が通じるのと通じないのとでは人間同士の間の心の距離が大きく変わるように思います。東アジア・世界が共に生きるために、まず日本人が色々な国の言語に触れたり、言語教育の場でももっといろいろな国の文化や風土に触れる機会を作ったりする必要があるように感じました。

共通点と相違点の見方と国家間の問題と個人間の問題の区別

1. 国際的交流的側面

国が違うということは、何かの違いを生み出すということになり、争いを生む原因となりうるが、国際的交流の面からは、話題を作るという点では、違うということはメリットになった。何かの話になった際に、「韓国ではどうなの？」などという発言に繋がり、話が広がると共に知らなかったことを知る絶好の機会になった。また、これらのことから違う点だけでなく、同じ点などを知ることができた。韓国でも日本の音楽が聞かれていること、いのしし年と豚年で違いはあったものの干支が韓国にも存在していることなど、違いを楽しむだけでなく、同じことを喜ぶこともできた。しかし、自分の国についてあまりにも知らないことを思い知らされた。バディがよく質問をしてくれる人であったこともそう感じる大きな理由であるとは思うが、「なぜ駅名、電車名が数字でないのか」「その駅名、電車名はどのような由来なのか」「今のはやりの有名人は誰か」などと聞かれ、すぐ答えられなかったことが多かった。当たり前であるからこそ、何も疑問に思わない面もあったことも事実であると考えられ、また調べることで自分の知識が増えたこともあるが、国際交流をするにあたり、日本についてよく知っておく必要があると考えた。私が日本人であるからこそ聞いてきたことであるからこそ聞いてくれたはずであるのに申し訳ない気持ちと恥ずかしい気持ちが入り混じった気持ちになった。バディは私がバディの国の話を振ればすぐに答えられるのにも関わらず、自分は答えられなかったことが多かった。また、自分の国についても知識不足を感じたが、それと同じくらい相手の国についての興味があまりにもなかったと感じた。韓国人は日本の俳優やアイドルの話をしてくれたのにも関わらず、私は韓国のドラマやアイドルについてはほんの少ししか知らなかった。もっと事前に韓国について調べるべきであったな、と感じることが多かった。

2. 言語使用・学習の側面

外国語の使用に関して、まず英語については自分から使用しようという気持ちがなかったことを感じた。韓国の学生はニュージーランドやアメリカの学生に対して英語でコミュニケーションを取っていたりしていたのにも関わらず、私はアメリカの学生とニュージーランドの学生が英語でコミュニケーションを取っていても日本語で対応してしまうことが多かったので、このフォーラムは日本で行われ、日本語を話すことのできる海外の学生とともに過ごした 10 日間であったが、英語でコミュニケーションを取っている時ぐらいは積極的に英語で会話をすべきであったな、と感じた。私は英語に自信がなく、だからこそ日本語を使ってしまうところもあったが、日本語以外の言語を使ってはいけないというルールもなく、私がアメリカにインターンをした時は日本語を話すことができるアメリカ人が完璧でなくても日本語で時々話しかけてくれることがあり、それは私にとってとても救いになったので、もっと英語で話しかけていれば相手にとっても少し楽であったのかな、と思った。

また韓国語に関しては、私は学習したことがないので、あの 10 日間のみで韓国語で会話できるようにすることは非現実的であるが、韓国語の単語をもっと積極的に聞いていくべきであったな、と思った。韓国から来た学生が、「寒い」を韓国語でなんというのか、というのを教えてくれた時、外に出で、韓国語で「寒い」といったところとても嬉しそうな表情を浮かべていた。今思うとアメリカでインターンをしているとき「～は日本語でなんというの？」と聞いてくれた時とても嬉しかったことを覚えている。国際学生フォーラムでは、聞いたとしても覚えられなかったらどうしようという心配をしてしまい、聞くことを怖がってしまったが、自分が聞かれたときは自分の文化に興味を持ってくれたのかとただただ嬉しかったので、もっと聞いてよかったな、と思った。国際学生フォーラムが後半戦になっていくと積極的に聞くことも増えたが、もっと早くするべきであったなと思った。

3. 学問的学び

学問的な学びとしては、自分が当然と思っていることに対しても他の国にとっては常識ではないことに気が付いた。私がこれに気付いたのは、フォーラムでの韓国の発表で、独島(竹島)の文字を見た時であった。私は、もし表記するとしたら竹島(独島)になるので、このような点から異なるのだな、と思った。韓国からの発表で、独島とだけ書いて竹島を表記しないこともよいことではなく、また、日本からの発表で竹島とだけ書いて独島を表記しないこともよいことではないが、竹島(独島)も独島(竹島)もカッコ表記の部分が一応書いておく、というような意味合いに感じられるので、もし国をまたいだ共通の教科書を作るとすれば表記の問題はからんでくるのではないか、と思った。非常に些細なことであるために気にしない人は気にしない問題であり、かつカッコ表記による表現以外に何があるのかというのも私には分からないが、もしその点に焦点を当てるとしたらどのように解決するのだろうか、と思った。

また、どの国であっても自分にとって不都合である歴史はあまり学校では教えられない傾向にあるのではないか、と思った。領土問題などでは、韓国や中国と主張が食い違っていると教科書に書かれていたので、日本の領土であると書かれていないため、日本の教科書は中立的な書かれ方をしているのだと勝手に思っていたが、今回のフォーラムでそれは誤りであったな、と考えた。私は竹島や尖閣諸島という名前でしかこれらの島を把握していなかったが、日本で竹島と言われている島は韓国では独島と呼ばれており、日本で尖閣諸

島と呼ばれている島は中国では釣魚島と呼ばれていることについて無知であり、また、日本の教科書では韓国での呼ばれ方や中国での呼ばれ方が書いてあったとしても竹島(独島)や尖閣諸島(釣魚島)という書かれ方であり、独島や釣魚島と書けなかったとしても竹島や尖閣諸島と書けていれば問題がない。また、戦争に関しても原爆や東京大空襲など被害の歴史については小学校から学ぶが、中国や韓国などへの加害の歴史は中学や高校になって少し触れられるほどであり、慰安婦問題に関しては今回のフォーラムを通じて自分が極めて無知であることに気付かされた。今の日本の教育では、被害と加害の歴史を両方学んでいるとは言い難く、日本をよいものとして教え込もうという姿勢が感じられた。日本にとって都合のいいものだけでなく、都合の悪い面も吸収していくことが重要であると感じた。

4.イベントとしてのフォーラムについて

今回のフォーラムについて、良かった点と悪かった点は表裏一体であるように感じた。今回のフォーラムは少人数で構成されていたからこそ、お茶大生だけでなく、海外の学生とも多くの方と交流を持つことができた。特に同徳女子大学の学生とはバディだけでなく、他の同徳女子大学の学生とたくさんコミュニケーションを取ることができたと思う。日本にいてこんなにも海外の学生とコミュニケーションを取ることはなかなかないのでそのチャンスを今回はよく掴めたと思う。これに関しては今回のフォーラムでの良い点であると思う。しかし、仲良くなったからこそ、私の中で今の関係を壊したくないと思い、自分の意見を素直に言えない部分もあったな、とも考えている。これはこのフォーラムの問題ではなく、私個人の問題でもあるとは思うが、シンポジウムの中で、同徳女子大学の学生が日本の韓国への謝罪を要求した時に、もう少し柔らかい口調で言ってもよいのではないか、と思ってしまった部分があった。もちろん、間違いなく慰安婦の問題は韓国にとって辛い歴史であり、謝罪を要求するのは当然であると頭ではわかっていても、仲良くなったからこそ少し奥まった話をしても問題ないという思考回路になるのではなく、仲良くなったはずなのにどうしてそのようなことを言うのだろうという考え方になってしまったことに気が付いた。自分の中で、日本と韓国の間での歴史や、今の問題などは触れてはいけない、わかり合えない部分であると考えてしまっているところがあることが分かった。ただ、この問題はきちんと解決をしなければならない問題であり、あまりお互いのことをよく知らない間柄でこのことについて話し合うのもよくないと思うので、どのようにしたら相手の意見を受け入れられるのか、これは私の問題でもあると思うので、これからもっと考えていきたいと思う。

5.東アジア・世界が共に生きることについて

イスラム国など文化や宗教の違いや物理的距離を越えて世界が共に生きることが東アジアが共に生きることよりも強調されていたように感じるが、今回のフォーラムを通じて、東アジアが共に生き、そこから世界が共に生きるようにするという順番であるのだと考えた。ゆえに今回は東アジアが共に生きることについて述べていこうと思う。今日東アジアには領土問題や歴史的問題など様々な問題が起こっている。それに対してはうやむやになっているのが現状であり、解決には程遠い状態であろう。それを解決策を講じるのは私にとって難しいことであるが、東アジアが共に生きる第一歩になるのは、シンポジウムの討論の中でも上がっていたが、言語教育にあると思う。今回のフォーラムを通じて、日本は外国語教育が遅れていることを感じた。日本は小学校で第一外国語である英語を教わることがあるが、それはあまり本格的ではなく、きちんと始まるのは中学生になってからである。そして第二外国語においてはほとんどが大学生になってからで、学びはするものの実際に使いこなせるようになる学生はほんの一握りである。それに比べてフォーラムに参加した学生は小学生の頃から本格的に第一外国語を学び始め、中学生には第二外国語を学ぶようになる。日本もこのように、今よりも早い段階で外国語を学ぶべきであるのではないか、と考えた。また、お茶大では、中国語については多くの授業が開講されているが、韓国語についてはあまり多くの授業が開講されていない。同じ東アジアであるのならば、もっと多くの授業を開講するべきなのではないかと考えた。このように、第一外国語は今世界の共通語になりつつある英語を学ぶことはある意味やむを得ないことであるが、第二外国語を今よりも促進し、かつその中でも東アジアの言語を充実化することによって東アジアの言語を学び、話すことのできる日本人を増やすことで、中国や韓国など東アジアに住む人々とコミュニケーションを取りやすくなり、東アジアは共に生きやすくなるのではないかと考えた。

6.その他

今回のフォーラムでは、最初のお迎えの時に同徳女子大学の学生が全員で来たことにより、バディだけでなく、海外の学生とたくさんコミュニケーションを取ることができ、非常に充実したものとなった。しかし、何か自分にとって都合悪いことや、私の性分に合わないことがあると自然に「この人は韓国人だから」と思ってしまうことにも気づいた。今回の国際学生フォーラムでは東アジアが共に生きるためにというのがテーマであったために自分に合わないこと理由を全て国籍のせいにすることが誤りであることに気付くことができたのかもしれないが、それでもその考えに至ってしまうことはよくないことであるので、このような思考回路になってしまったときはそれが本当に国籍のせいであるのかよく吟味し、自分の性分に合わないからと言って無理して合わせる必要はないかもしれないが、国の問題でなく、私とその人個人の問題であると自然と考えられるように努力していきたいと考えた。

国際学生フォーラムで考えさせられたこと

1.国際的交流的側面

一度の機会に様々な国の人と、不自由なく日本語で会話できるのは素晴らしい機会だった。当初は外国人１人に対して日本人２人がバディに付くことは手厚くサポートできる分、一対一で関わることができないので悲しいと考えていたが、パートナー以外の人とも仲良くなるために合理的な仕組みだったと思う。実際、パートナー以外との交流も多くできた。連絡先も交換し、これからも続く関係を築くことができた。

ただし、私は雪が降るほどの寒さのため体調を崩してしまい、最後の閉会式まで参加することができなかった。国際交流を行うために、もっとタフな人間になろうと努力する決意をした。

2.言語使用・学習の側面

フォーラムにおける発表・質疑応答は英語だったので、英語の使用機会を得ることができた。それ以外では外国人参加者の日本語能力が非常に高かったので、英語より日本語の方が得意な人も多く、基本的に日本語を用いた。相手国の言語使用能力を高めたいと思う意識が高まった。

学習の側面としては、普段社会学専攻の人間として、国際関係論についての洞察を得られたことに価値があった。社会学でもグローバル側面を扱うことは少なくはないし、自分の学問の学びにおける相乗効果が期待できそうなので、来年度、グロ文の科目も履修してみたいと思った。

3.学問的学び

いくつかの講演の中で、山口大学の山本准教授のレクチャーが最も印象に残っている。絶対的な正しさは世の中にないことや、みんな正直でないからこそ本音と建前を見極めることの重要性、わかりやすい意見に飛びつくことの危険性に、改めて気づかされた。また、複数設けられたグループでの話し合いの時間が非常に有意義で、導入に従いながら話しづらい内容に踏み込んでいけた。

フォーラムでは、発表に関してはポーランドの三度の分割を経て悟りを開いたような態度を鮮明に記憶している。また、愛国心についての話も、ナショナリズムと地球主義の兼ね合いについて考えさせられた。最も印象に残った議論については５章で後述する。

4.イベントとしてのフォーラムについて

良かった点としては、たった一週間という限られた時間の中で、お互いについて名前と簡単な性格を把握できるほど仲良くなれたことが挙げられる。充実していたプログラムに加えて、空き時間にお茶大図書館で話したり、東京近郊に出かけたりした人が多かったことがその要因の一つだといえる。短い時間を「ともに生きる」ことができた。

良くなかった点としては、ボランティアだからこそホスト側としておもてなししなければならないのに、「自分が楽しんでやろう」という意識を持っている自分勝手なお茶大生が多すぎたことだ。個人的に、心の甘えによる図々しい行為をたくさん見受けられて悲しくなった。自分が担当するその時間帯は、責任を持って仕事をやり通すのが筋なのに、先頭を切らず皆に無駄な時間を過ごさせる人や全員の状況確認をしない人などがいた。

私は「ボランティアならば徹底的に尽くせ」と言いたいわけではない。ただし、節度を持って、皆が気持ちよく過ごせるように団体行動に協力する心構えが大事だと思う。自分勝手な人はどこにでもいるので、その自覚を持って我慢する力を持ってほしい。また、面倒なことを避けて別の人にやらせようとするのではなく、自分が悪者になってもはっきり物は言って行動できるお茶大生が増えてほしいと思った。ただ楽しいという経験で終わってしまうのではなく、互いを高め合えるように努力することを目指してほしいと言いたい。何事も経験であるから、統率力がないなど、個人の能力についてとやかく言いたいのではない。フォーラムを成功させるために、皆がそれぞれ周りに目を配るようにしてほしい。

5.「真の謝罪」について

フォーラムにおける話し合いで、「真の謝罪」について討論したことが印象的だった。私は同徳女子大学の学生の発表で、日本に「真の謝罪と賠償金」を求めることについての発言が引っかかった。そこで、近くにいた韓国人に聞いてみると、その子の個人的な考えとして「慰安婦のおばあさんに賠償金が支払われなかったのは韓国政府にも責任がある。だから私は謝罪の方だけ必要だと思う。その謝罪は政府同士の謝罪対応ではなく、あくまで慰安婦のおばあさんに対しての謝罪のことを指す。また、日本政府は行動と言葉が伴っておらず、心がこもっていない」と述べた。私は、大学生訪韓団として渡韓した経験があり、日本の外務省

見解と韓国の外交部見解をたたき込まれていたので、国民の１人としての個人的な考えを伺えたのは新鮮な経験だった。私個人的には、歴代の何人かの首相が今までの談話やスピーチで「痛切な反省と心からのお詫び」を述べていたので、韓国側はその事実を無視していつまでももめごとを持続しようとするのか不思議に思っていたけれども、その謝罪は政府同士のもので慰安婦のおばあさんに対してではないだろうという新たな見解を得られた。また、韓国国民の多くがその文書の存在を知らないことが問題だと問うたら、日本国民の間でもあまり広まっていないならその文書は存在していないも同然だ、と言われ、論点のすり替えに呆れながらも少し納得してしまった。また、私の頭はかたいとも感じたので、共生の道を一緒に探るために、国としての考えから離れ、学生だからこそ何のしがらみもなく心から話すことの重要性に気付いた。

正直、参加者みんなと仲良くしたいからこそ、対立が起こりそうな面倒な話題には触れたくなかったが、フォーラムの存在意義と自分の関心に対して誠実に生きることが大切だと思い、今回遠慮せずタブーに切り込んだ。そもそも、難しい問題を腫物のように扱ってしまうことに問題を感じる。そのような問題に詳しいと、変な人や怖い人だと思われ、近づきたくないという意識が働くことも珍しくない。過去の私は、そのように感じてしまう１人だった。私自身が変わり日韓関係に関心を持ったのは、先述の訪韓団に参加したからで、そのきっかけがなければ詳しく学ぶことはなかったと思う。今回のフォーラムが参加者にとって変化を生じる機会となり、私がその働きかけをできたのであれば嬉しい。

6. 東アジア・世界がともに生きることについて

東アジア、そして世界がともに生きるために求められることは、大きく二つある。

まず一つ目は、相手の国の立場を相手の言葉で知ることができるようにできる限り努力することだ。翻訳には限界があり、また他国の言語を学ぶことは他国の文化を知ることもできる。そしてメディアの情報操作に従わないためにも複数の言語を身につけることは重要だ。今回のフォーラムでは、相手に合わせてもらって日本語で議論したので、我々が改善しなければならない課題の一つだ。ただし、使用言語が日本語だとしても、一緒に話し合える機会自体が貴重であり、存続してほしいと思う。

二つ目は、若いうちから知識を身につけて、それを基に話し合いに参加することだ。インプットとアウトプットのどちらかが欠けると、もたらされる効果は半減以上になる。知識を身につけるためには、教科書や学校の授業だけでは不十分で、自分で情報をつかみに行くことが大事だ。特に難しい外交問題については、教科書に載せても、授業で教えても、それが問題化してしまうので、その情報の入手については個人に委ねるしかないのがつまるところだ。また、話し合いの時、政府見解を聞きたいわけではないのはわかっているが、前提知識として知っておくことは重要だ。たとえば、韓国側が「日本政府は謝罪をしていない」と述べるのに対し、そのまま鵜呑みしてしまうのは無知であり、「日本政府としては謝罪をしていることになっている。しかし、果たしてそれは本当に韓国が求めていた謝罪なのか、一緒に考えよう。」と言えるまでになる能力が求められる。

フォーラムでの学び

1. 国際的交流的側面

学生交流は２つの点でとても良いと感じた。第一に相手の国を知る上で優れている。なぜなら、友達として接しながら、ラフにいろんなことを聞くことができるからである。例えば、電車に乗りながら、同徳からのヒジンさんに北朝鮮と韓国の関係について聞いた。韓国の人は北朝鮮に対してあまりいいイメージを持っていないと語っていた。統合したい人としたくない人は半々くらいで、したくない人は「いまさら統合する必要はない」という意見だそうだ。これは普段の交流、例えば観光客との交流では話せないことである。フォーラムの目的が世界の共生であったからこそ、お互いがそのような繊細な話題について、興味を持ち、そして冷静に話し合うことができたのではないだろうか。

第二に、学生交流は自分の国を見直す機会にもなる。一番興味深かったのが、バディの学生さんが日本の電車の「痴漢は犯罪です」を「当たり前のこと」と面白がっていたことだ。韓国では、罰金などについて記されている場合が多いということだ。私は日本にいて、そのセリフについて考えたことは一度もなかったが、言われて考えてみると確かに当たり前のことだと思った。罰金について書いたほうが、痴漢を撲滅させる効果はありそうだ。このように、学生交流は、自分の国をクリティカルに見直し、その国をさらに良くしていく機会にもつながるのではないだろうか。留学に行くと、日本を外から見られるようになるという。私は留学に行ったことがないので、わからないが、海外の学生に率直な意見をもらうことの方が外から見るという点においては優れていると思う。なぜなら、留学に行っても、その人のベースは母国ででき、当たり前になっていることが多いからだ。ただ、母国について意見を聞く海外の人がその国が大好きで全く批判しなかったり、本音を言えない相手であったりしては意味がない。そのためにも、今回のフォーラムのように一つの目標を掲げて、本音で話すという暗黙のルールのようなものがあることはとても有効であると思う。

2. 言語使用・学習の側面

言語については、留学生の日本語がとても上手で、驚いた。人によって、レベルに差はあるにしても、全員が日常生活のやり取りについては問題がなかった。私は、彼らのレベルで英語を話せるかというと、そうではないということに気づいた。高校では英語部に所属していたため、ある程度は話せるが、シンポジウム中も通訳しても通じないことがあり、とてももどかしかった。このシンポジウムを機にさらに英語、特にスピーキング、リスニングに力を入れようと思った。また、今回は日本語が通じたので、交流や難しい話もスムーズに、そして奥深くできたと思う。まずは、日本語というこんなマイナー言語を学んでくれている彼らに感謝の気持ちでいっぱいだ。そして、今度は私が英語だけでなく、彼らの言語を学ぼうと思う。私はバディが同徳女子大学の学生であったこともあり、特に韓国の子たちと仲良くなった。バディの学生さんとフリーの日に吉祥寺に行った。そして、カフェで彼女がペーパーに日本語を書き始め私に聞いていたので、私は韓国語を教えてもらった。幼い頃からハングルは記号にしか見えていなかったが、思ったよりは簡単で、覚えるのが楽しそうだと思った。図書館で韓国語の本を借りたので、早速ハングルを覚えていきた。

3. 学問的学び

シンポジウムで学んだことは３つある。

第一に、日本と韓国で大きく歴史問題について認識が違うことだ。特に衝撃的だったのが、釜山外国語大学の発表だ。韓国の 20 代 115 人に日本の好感度を調査したところ、５が一番いい中で 2.58 だった。また、日本で思い浮かぶ人物で伊藤博文、豊臣秀吉があがった。それに私は驚きだった。なぜならどちらも、朝鮮に侵攻した人だからだ。私は韓国に悪影響を与えた日本人と言われても、今までは、ぱっと思い浮かばなかったかもしれない。やはり、これは教育で形作られたものなのであろうか。確かに、中学校で習ったとき、侵攻した事実だけは習ったが、朝鮮でのひどい状況などは習わなかった。加害国である日本はその歴史を繰り返さないために、被害国のそのときの状況について、義務教育を通して次世代に伝えていかなくてはいけないのではないだろうか。また、慰安婦問題についても学びが多かった。同徳女子大学の発表のときに、私は「韓国人は日本の謝罪が足りないというが、どういう点が至らないのか」と聞いた。すると、チョウソネさんから、「日本人は韓国政府に対して謝罪はしても、元慰安婦に謝罪していない。また、政治の観点からではなく、人権の点から考える必要がある」と回答をもらった。リアルな韓国人学生の意見が聞けて、考えさせられた。なぜなら、私はニュースを見るだけでは、もう謝罪は済んだのではないかと思っており、祖父を始め、私の家族もそういう意見だからだ。また、慰安婦像についても別の人が質問していた。そして、「慰安婦像は慰安婦問題を忘れないための大事な象徴」と韓国の学生が言っていた。全然視点が違って驚いた。私は「なんであんな像を作るの。見せびらかし？」と怪訝にまで思っていたのだ。慰安婦問題についてとても興味を持ったので、本田歩さんと５月に韓国に行き、ナヌムの家を訪れることにした。これからまた

勉強してからそちらを訪れ、そこで現地の人の話をもっと聞いてみたいと思う。その上で日本の主張と韓国の主張をクリティカルに見つめたい。

第二に、多文化主義には、努力が必要であるということ。カンタベリー大学の発表はとても刺激的だった。ニュージーランドの全人口の２５％は海外で出生ということであった。ニュージーランドでは共生が当たり前になっているそうで、様々な取り組みが行われている。日本は、これから、人口減少のため、外国人労働者をたくさん雇う。しかし、既に技能実習生の受け入れで、相互理解が上手くいかなかったり、受け入れ態勢が整っていなかったりなど問題はたくさんある。また、今回のフォーラムの目標である、東アジアの共生を考える上でも、相互理解が大前提だ。しかし、お互いがバイアスのかかった情報に左右され、互いを拒んでいるのが現状だ。そんな日本、東アジアがニュージーランドから学べる取り組みを３つ紹介したい。１つ目に、文化を理解するためのイベントだ。クライストチャーチでは、日本文化を体験できる Japanese Day や、中国のランタン祭りなどがあるそうで、楽しいイベントだそう。ニュージーランドの人は移民のおかげで、国内にいながら他の文化にも接しられるというふうにポジティブにとらえているそうだ。また、移民にとっては祖国を思い出すきっかけになるそう。２人は、「平和に暮らすためには互いの文化、信念の理解が必要」と語っていた。その国の文化に移民に合わせてもらうのではなく、移民にはそのままでいてもらい、それを相互に理解し、違いを楽しむという姿勢が見られ、素晴らしいと思うと同時に、そんな世界はとても楽しそうだと思った。２つ目に、学校での教育だ。ニュージーランドでは、中学生から第二言語を学ぶそうだ。例えば、マオリ語、日本語、フランス語、スペイン語、中国語があるそうだ。言語の授業の中で、その国の文化についても学ぶそうだ。中学生では、歴史の授業で海外の国との歴史を学ぶ。先ほど挙げた、豊臣秀吉や伊藤博文についても学ぶ。そのような時期に外国語教育や異文化教育があれば、日本と歴史的に関係のある国に対しても、偏見を持つことが少なくなるのではないだろうか。３つ目に、行政の受け入れ態勢である。ニュージーランドでは移民へのサポートが充実している。例えば、移民が暮らすうえでのハードルを下げるために英語教育や求人情報を多言語で出すなどをしている。日本では外国人労働者の受け入れが急速に進み、自治体が言語教育に関して問題を抱えている。その問題は小学校でも起こり、移民の子どもたちが孤独を感じることさえある。確かに、日本で生きていくためには日本語は必須だが、英語や相手の言語を学ぼうとせず、日本語を押し付けるのはおかしいと私は感じる。なぜなら、日本人は人口減少という問題を外国人労働者に助けてもらっているのだ。また、どこで生まれても「地球市民」であるから、どの国でも生活できるということは全員が持つ権利なのではないかと思う。国境など、単なる区切りでしかないのだ。この閉鎖的な日本とニュージーランドを比べたときに、いかにニュージーランドが寛容であるか。私はカンタベリー大学の２人の話で、ニュージーランドの多文化主義の素晴らしさを感じた。是非、現地に行って、多文化主義をこの目で見て、それを日本に広めたい。

第三に、シンポジウム司会として多くの国の意見をまとめるということを学んだ。特に最後のディスカッションの司会は難しかった。A と B グループで意見を出し合ったものの、それを一つに結論づけるのは難しいと感じた。それについてひとつ反省点があるが、議論を収束させる場所として、この「フォーラムのつながり」を生かして、自分たちは何ができるかを考えるべきだったと思う。例えば、大連理工大学がプレゼンテーションで出してくれたプランのように。そして、何かアクションを起こすまでを課題とすべきであった。そうすることで、もっと現実味を帯びた議論になり、より議論が活発化したかもしれない。また、これからのつながりを強くし、この機会がより良いものとなっただろう。

4. イベントとしてのフォーラムについて

まず、良かった点は、政治的なセンシティブな話にも、カジュアルに踏み込め、深い話ができたことである。これは、このフォーラムが「東アジア、世界の共生」をゴールとしていて、それに興味を持った学生が参加したことが原因であると思う。そのような話を冷静にでき、かつ意見の違いに興味を持って、相手の話を聞くことができる点は素晴らしいと感じた。これは文化交流だけを目的とした学生交流より、優れておりとても評価できる点である。政治的な問題を取り上げるのは、お互いが慎重にならなくてはいけないが、このような取り組みがもっと広まれば、草の根から世界はよくなるのではないだろうか。市民が変われば、政治は変わるのだ。是非、お茶大のその他の交流プログラム（サマープログラムなど）でも、相互理解のために政治的な問題が取り上げられたら、交流の質が上がるのではないだろうか。このような交流をすることは、「大学人」としのミッションなのではないか。

良くなかった点は、２点ある。第一に、一緒にいる時間がとても限られたことだ。留学生は、普段の生活から抜け、日本に来たが、私たちは普段の生活があり、アルバイトなどにも時間を費やさなければならず、放課後一緒に時間を使うことができなかったこともある。また、衣食住を共にすればさらにお互いの文化を知れただろう。第二に、言語の壁だ。フォーラム中、留学生側は英語を話せる、ヴァッサー、カンタベリーワルシャワ側と韓国、中国でわかれてしまう傾向があった。特にシンポジウムの質疑応答の時間は顕著だった。もっと司会として、通訳をしてもらうなどアプローチができたはずだった。また、これからは自分が英

語を勉強して、今度このような機会があったときは、通訳をして両者をつなげられるようにしたい。

5.東アジア・世界がともに生きることについて

東アジア、世界が共生するためには市民同士の交流が欠かせないと思った。上記のように、相手の国のバイアスのかかっていない意見を直接的に聞くのに、一番優れているからである。

私は、そのために２つの提案がある。

第一に、留学生とお茶大生が各国で、多国間の政治的問題についてクリティカルに考える、ワークショップを催すことだ。例えば、日本であれば、慰安婦問題について、日本人と韓国からの留学生や移民を呼び、お互いの意見を言い合う。しかし、ここで気を付けなければいけないのは、ターゲットだ。大きく公表すると政治的団体なども絡んでくるので慎重になることが必要だ。でも、この企画であれば、フォーラム参加者が各国内での実践が可能で、市民の相互理解を深めることができる。これから外国人労働者が増える日本。出身国は、中国、韓国、フィリピンを始めとした東南アジアと、日本が歴史的に戦争で関係してきた国ばかりだ。このような取り組みは、お互いの偏見をなくし、気持ちよく過ごすために必要なことだと考える。是非、私もこの企画を実践してみたいと思う。またこの実践結果をフォーラムのラインで報告し合ったら、学びが広がるかもしれない。

第二に、留学生を講師とした多言語教育を大学外に広げていくことである。相互理解を深めるためには、相手の言語に興味を持つことが大切だ。それには２つの理由がある。１つ目は、言語を学ぶことで相手と話したいという気持ちが強くなるからである。私は英語が話せないときは、外国人を避けていたが、話せるようになってからは、話すのが楽しくなり、アルバイトなどでも積極的に声をかけるようになった。話したいと思えることが、対話の第一歩なのだ。２つ目の理由は、言語を学ぶことで相手の文化を理解しやすくなるからである。イングリッシュネイティブはジェスチャーが多いが、それには自由な国民性が表れていると感じる。高校の ALT もジェスチャーが多く、感情表現が豊かだった。しかし、それを理解していないと「おおげさだ」という誤解が生じるのだろう。また、言語を習得することで、アニメ、映画などの文化やニューズなどのメディアの情報を相手の言語で受け取れるようになり、バイアスのかかっていない情報を習得しやすくなり、さらなる相手の国の理解につながる。ここで、言語教育を大学外に広めることには意義がある。第二言語をフォーマル教育では学ばない、中高生、また社会人は他の言語に触れること自体が少ない。しかし、これからは日本にいても外国人と遭遇することが多くなる。その時に、例えば以前の私みたいに「ハングルは記号みたいで難しそう。変だなあ。」と思っていては、相手を理解する前に障壁が大きい。そのため、私が今回感じることのできた、「ハングルって面白い」ということを多くの人が感じられたら、その人たちが日常生活で韓国人と出会ったときに、ポジティブに接することができるだろう。「大学人」として、自分たちが受けた教育を受けていない人に広めていくこともミッションである。この企画は留学生と知り合いであれば、簡単にできるはずだ。私も実戦していきたいと思う。

国際学生フォーラムを経験して

1.国際的交流的側面

今回私は同徳女子大学の学生のバディを務めたが、日本と韓国という歴史的に対立しあってきた両国の関係性について深く考えさせられるフォーラムとなった。バディの彼女は日本に生まれてから小学校低学年まで日本に住み、その後韓国に移り住んだ方なのだが、彼女が体験した経験などが非常に興味深かった。例えば彼女がシンポジウムで発表した事柄の中に差別用語があった。私は日本ではそこまで差別用語が使われていないと感じたためなぜそのテーマを選んだのか聞いたところ、日本では韓国人、韓国では日本人だと揶揄されることがあったという。差別用語は何か劣った対象を言葉にして人を貶めるものであるが、劣ったものとされた対象にとっても、それを言われた本人にとっても気分が良いものではない。日本では韓国人であること、韓国では日本人であることが劣っている、よくないものであるという認識が少なからずあることに改めて衝撃をうけた。実際私の身の回りではそういう認識は薄く、ヘイトスピーチなどがあることは知っていたが、そういう経験をした人が周りにいなかったため驚きであった。近いが遠い国、韓国といった言葉の意味を垣間見た気がする。

また、韓国と日本との政治的問題について語る時、緊張した雰囲気が感じられたのが興味深かった。それぞれわたしたちは日本、あるいは韓国の文脈の中で生きていて、それぞれの立場からのメディアのニュースを見聞きしており、また、自分のアイデンティティに日本人であること、韓国人であることは深く根付いている。であるから日本が間違っている、こういうところが足りないなど指摘されると自分の中でないと思っていたはずのいらだちや怒りに近い感情が湧き上がってくるのに驚いた。日本を否定されると自分が否定されているような気持ちになるのはやはり自分は日本人であるという感覚が根強くあるからであろう。講演でも述べられていたが、メディアの情報を鵜呑みにしないためになるべく違う意見、ほかの国のメディアの情報をその国の言葉で知ることが必要であると思う。そして日本側の主張を当たり前のものとして受け止めるのではなく、他国の視点を意識し情報を多角的にとらえていくことがこれからの時代必須であると感じた。

またこのフォーラム中での会話で国を意識する会話や発言が多々あった。例えば日本人はこう考えている、ニュージーランドではこういう習慣、文化があるということだ。今回は国際フォーラムという場であり、国の違いを意識して発表したり討論したためこの意識が強くなったが、何回も国の違いについて話しているうちに逆に同じ人間としての一体感が感じられたのが逆説的で興味深かった。国の違いを話していくとそれは文化や環境の違いだけであり、私たちが根底で抱えている感情などは共通であり同じ人間なのだという感覚が強まった。国際関係について語る際、国ごとの差異について必ず話す場面があるが、その中で必ず分かり合うことができるという確信が自分の中で生まれたように思う。

2.言語使用・学習の側面

今回わたしのバディは日本語がかなり上手いほうだったのでコミュニケーションに関する障がいはとても少なかった。しかし簡単な表現に言い換えたり難しい単語は使わないようにするなど配慮していたせいか、日本人に比べ１００％言いたいことをいうことができたかというとそうではなかった。簡単なことや単語だけで表現できることは難易度が高くないが、専門的な話だったり微妙なニュアンスが必要な話だったりすると自分の伝えたいことを上手く伝えられない、または伝えてもわかってもらえるかわからないためニュアンスを切り捨てて伝えるということがあり、もどかしく感じた。

また、英語圏の留学生についてバディと話していたことだが、母国語である英語で話す時と、外国語である日本語で話す時とは留学生がする話の深さが違うということを感じていた。先ほど述べたニュアンスの伝わり方が違うのと、スムーズに自分が本当にしゃべりたいようにしゃべることができるためだ。言語はあくまでツールだとは言われるが、ツールだけだと割り切ることができるものではなく、言語の特性やその言語を有する文化の違いなどで話の内容、しゃべり方などが異なるものにもなると感じた。もちろんツールとしての完成度を高めることも大事で、自分がほんとうに言いたいことを相手に伝えるためには文脈も含めた言語の学びが必要になると実感した。

3.学問的学び

山本先生の講演では二元的な立場にとらわれず、境界にとどまり世界を見るという視点を知った。特に日本は島国であり、アメリカなどといったあらゆるルーツを持つ人々がいることが当たり前という環境にはない。どうしても肌の色や顔つき、言語や文化が平均的な日本人と違うと、同質化の圧力が働くことは私も自分の体験として持っている。このことをタブーとしてではなく身近な問題として周りの人にシェアできる環境を作っていくこと、そしてその環境を作っていくためにはまず自分の中に偏見はあることを認めること、

そしてクリティカルに自分の考え、その考えを持つに至った経緯などを考察することが大事であると感じた。

また、小松先生の授業では相互理解のための言語教育という観点での考え方の枠組みを学んだ。日本では外国語は英語が中心でほかに身近である外国語の韓国語や中国語を学ぶ機会は少ない。言語を学ぶということは単に読み書きや話すといったコミュニケーションの手段を学ぶことだけではなく、その言語を有する文化的、歴史的背景を学ぶことでもある。自らがその意義を意識して外国語を学ぶと同時に、義務教育や高校でも英語以外の他言語の教育を日本でも実施すべきだと強く感じた。

4.イベントとしてのフォーラムについて

フォーラムを開催する大きな意義としては、対話により相互に文化、歴史的背景、主張を理解し、仲間意識が育てられることであると思う。普段留学生とそこまで一緒に過ごすことはないので文化的背景、ものの感じ方、考え方などに触れられる機会となり自分の視野が広がった。また、勉強の面だけでなく文化的交流や他国の文化について同世代から体験を直接聞くことができるよい機会であったと思う。東京観光をしたりご飯を一緒に食べることで、実際に会って過ごさないとわからないものの見方や感じ方というものを学んだように思う。また、運営としてフォーラムに携わることでどうやったらスムーズに物事を進行できるか、どうやったらより活発な討論を促すことができるのかというノウハウを体験し学ぶことができたと思う。

今回シンポジウム係を担当し、最後の全体討論では司会を担当した。そこで感じたフォーラムの改善点はフォーラム全体の方向性が曖昧なのではないかということだ。本フォーラムは天災や人災などの大災害発生時、世界の若者は何をできるかということ、そして共に生きるにはどうすればよいか話し合うものであったはずだが、ともにいきることに焦点が当てられ、災害についてはあまり触れなかったことに対して疑問が残った。また、各大学の発表の内容も方向性が一つではなくいろんなベクトルを含むものであり、最終的な結論、方向性がうまく確認できていないように感じた。いろんなベクトルというのは例えば災害に関する対応、多文化社会、慰安婦問題などの政治的・歴史的背景と対話、ごみなどの環境問題などである。東日本大震災を契機に本フォーラムは企画されたものであるから、災害というテーマをはっきりと打ち出すか、災害から発展させたテーマ（例えば今回はともに生きるなど）を主軸にすることをもっとはっきりと示したほうが良いかと考える。また、ともに生きるというテーマに関しても、サブテーマを設けたほうが良いのではないかと考える。ともに生きるというテーマだと漠然としすぎてどう考えればよいかわからなくなってしまうからだ。例えば日本であるいは海外で災害が起こった際大学生として我々は何ができるか、人災に対して何ができるか、大学生としてどのように取り組めるかなどである。また、最終的にアクションを何か起こすことをゴールにしてもよいのではないかと考える。留学生の方を含め、自分たちが今できることはこのフォーラムで話し合ったことについて友人や家族と話し合うことだと述べる人が少なくなかった。そのこともちろん大変大事だが、そこでとどまるのではなく、なにか災害が起こった際や政治的なトラブルが参加国で起こった場合、我々は実際問題として何ができるのか、今から何ができるのかというアクションを起こすことを目的としてもよいのではないかと考えた。

5.東アジア・世界がともに生きることについて

まず東アジア、世界がともに生きるためには他者の立場にたって物事を考えるという姿勢が重要であるように思う。特に私たちはなにか外国のことや政治、歴史を知る際に自国の目線から見ており、しかもそうしているという意識が希薄になりがちだ。日本にとっては大きな問題ではないと感じられること（例えば慰安婦問題など）も韓国にとっては忘れることができない屈辱的な問題であり、ところ変われば感じていること、意見も異なる。そういった事柄に対し、学生である私たちは他者、他国の視点から考え、ともに解決方法を模索する必要がある。また、それはある意味二元的な立場にとらわれている見方だということもでき、国を超えた一人の人間として柔軟に発想を転換させるという姿勢も求められると考える。

また、国や地域に対する深い理解をしていくことが不可欠だと考える。ある国際的な問題等について何も知らないということはその問題を自分の中でないものにしていると等しく、他者と理解しあうには根底から基礎が足りなくなってしまうからだ。そのためには先ほど挙げたような言語からの理解、そして世界の国の歴史、文化的背景、経済的側面について諸外国に行ったり人々と交流することで理解を深めることが欠かせないと感じた。

私も一大学生として、このような留学生との交流の機会を持つこと、そして他者の視点にたち物事を考察することを日々の学びの中で実践していきたい。

第 8 回国際学生フォーラムについての感想レポート

1. 国際的交流的側面

6 カ国からの 35 名の学生が今回の国際フォーラムを機に、日本で会うことになった。わたしたちは一度も出逢えると思わない人と出逢い、そして、同じ教室に集まり、同じ所へ遊びに行って、同じものを食べて、同じ課題について討論した。私たちが話し合いながら、徐々に相手から現れた独特の視点や振る舞い、話し方に注意を向けるようになった。東アジアが共に生きるためなのだが、「傍目八目」が意味するように、傍観する人がより正確に物事を判断できるかもしれない。森山先生も東アジア共同体を実現させるために、世界のリーダーとしてのアメリカの視点、2 回の世界大戦の主戦場となったヨーロッパの共生のための努力、多文化主義で異なる文化に寛容するニュージーランドの歩みなどを挙げながら、それらの各国から学べる点があると述べた。それゆえ、当事者の努力はともかく、傍観者の視点やアドバイスも参考するべきだという。

とにかく、不思議に国が異なる私たちが縁を結ばれた。そう、私たちが前に一度も考えたことのないことは確かに起こっていたのだ。同じ目標のために、皆の知恵と力を合わせるという協力感が感じられた。短い十日しかなかったが、今回のフォーラムに参加することで、東アジアの現状と未来についての考えを深めた。非常にいい経験だったと思う。

2. 言語使用・学習の側面

2 日間のシンポジウムで、各国の素晴らしい発表を聞いた。そして、たくさんの深く思わせる質問をした学生にも感心した。しかし、やはり言葉は限界があることを感じた。参加者の皆はバイリンガルであり、確かに感受性がモノリンガルより高くて、たとえ相手が完全に言い出さなくても分かるかもしれないが、十分に納得できるとは限らないだろう。日韓中の学生たちが発表した後の質疑応答の時には英語圏の学生がほとんど発言しなかった。また、英語圏の学生たちが発表した時に聞かれた質問を日本語で自分の言いたいことを伝えるのも難しかったし、英語で答えたら、英語にそんなに自信のない学生達にも 100%分かるのも難しかったのも事実ではないかと思う。さらに、ディスカッションの時も、英語圏の学生たちがあまり積極的に発言しなかったと感じた。東アジアの歴史や状況などにそんなに詳しくないとは分かっているが、言葉の問題もあるのではないかとも考えられる。だから、やはり言葉の壁を潰す必要がある。私にっとて英語の勉強、日本語の勉強、韓国語の勉強をしっかりやらなければならないと切実に感じられた。

3. 学問的学び

各国の発表を聞いて、いろいろと勉強になった。

まず、ヴァッサー大学のウィルさんは政府を変えられないけど、我々自身が国際関係を学び、外国語を勉強することを通して自分の考えを見つめ直すことができると述べた。「自分を変えれば、世界も変えられる」にすごく共感をした。

そして、ニュージーランドの多文化主義も印象深かった。お互いの文化を理解し尊重し合うことで、共同体意識が形成できる。自文化中心じゃなくて、もっと中立な態度や姿勢が必要だと示した。

また、ポーランドの学生たちは前向きな姿勢と積極的な態度を私たちに示した。もちろん、歴史を忘れるべからず。過去の経験と教訓がこれからの未来を造るための礎石である。しかし、過去と現在を切り離して考える必要もある。共に生きるため、仲直りして、一緒に将来を作り上げるという積極的な姿勢が重要なことだとわかった。

中国の学生たちは経済面と文化教育面について細かく提案をした。深いところまでよく考えたのに先生方々も驚かれた。この日中韓大学生連合国際事業グループの構想は一刻も早く実現されればと思う。確かに、我々個人の力では政府のことを左右できないのだが、我々学生達みんなの努力でこの東アジア共同体の案はただ青写真のままだけでなく、いつか必ず実現できると信じられる。

韓国の学生達は東アジアの葛藤を解消し、連帯を構築するために各国の人々の間に、対話と開かれた心が望ましいと述べた。ただの会話ではなく、率直的に話し合い、お互いに相手の立場に立って考えることが大事だと述べられた。偏見や差別などを捨て、自分の認識を改めて考え、共同意識を持つようになれば、東アジア共生のための重要な第一歩だと私も同感している。

最後、日本側の発表は教育とメディアという二つの面から東アジアが対立する原因を分析した。各国の歴史教科書の内容の違いや教科書に含まれた政治的主観的感情が勉強する学生達にも影響を与えている。また、自国のメディアも自国だけに有利な情報しか流さないので、国民は正しいと言える情報がなかなか得られないという状況も言及された。そのため、「シティズンシップ教育」の重要性が挙げられた。もしも、東アジアも EU のように統一した教育政策を実施し、復言語教育を行えば、国家を超えたアイデンティティを養成できる

のではないかという案が出た。共に生きるため、まず多様性を尊重して認めよう。

4.イベントとしてのフォーラムについて

今回のフォーラムを通して、各国の学生たちがこの場で集まり、東アジア共生のために考えていろいろな提案が出てきた。対立や葛藤の生じる原因を分析し、そして私たちが一体何ができるのかについて深く考えることができた。非常に緊張していたが、皆が自分の考え方や要求などを果敢に言い出せるのと相手の発言によく理解できようという姿勢にも感心した。それこそが問題解決に繋がると思う。普段の私たちがこのようにタブーな話題について深いところまで対話できる機会や場所はほとんどない。大学生は皆様々な文化と言語を勉強してきて、異なる文化や考え方に寛容性があるので、このような対話を大学生から始めるのが最も賢明な決定だ思う。

一方、今回のフォーラムを考えてみると参加者はこのような対立を解決したい、友好な関係を結びたいという気持ちを持ちながら参加したのだと思い、ずっと日本、中国あるいは韓国に意見を持っている人々にはどうやって対話の場や機会を作ってあげたらいいのだろうか。そんなに簡単なことではないが、もしこのような人々にも落ち着いて対話させることができればいいなと私が思っている。

5.他の感想や反省など

各国の発表以外に、最も印象深いのは山本冴里先生の講演である。私はシンポジウム原稿を編集する担当の一人なので、前もって読んでみて非常に興味深いと感じた。確かに私たちは常に「二元法」で物事を向こう側とこちら側に境界線を引いて認識しがちだ。私たちと同じな人間は仲間で、異なるのは敵とは言えなくても異類だと捉えることも少なくないだろう。また、境界の向こう側とこちら側に関する 5 つの質問も私にとって急所を突く質問だと思う。二つだけもう一度振り返ろう。

「あなたの国の人たちが、悪いイメージを持っている国は、どこだと思いますか？」

正直に言えば、残念ながら、好きではない国は私にはある。それは反省しなければならないことだと自覚している。自分の国に悪いイメージや偏見を持っている国はもちろんあるが、日本に来てからもある国の人が食文化の違いなどがあるためアパートを借りるときの難しさが何度も耳にした。非常に恥ずかしかったのは、振り返ってみるとあの時の自分がその国の人の立場を深く考えたことがないことだ。つまり、私の潜在意識の中にも、その国のことを異だと思ったのだ。

「あなたの意見は、どんな環境（メディア・家族・学校・友達・職場など）に影響されて作られたのでしょうか？」

私たちは常に身近な人々や物事に影響されていると思う。友達や家族との関係が近いので、いつもかれらを信じ切っている。それにとどまらず、自分が受けた教育、使った教科書などもずっと疑いなく正しいと信じてしまった。もし自分が大学の日本人先生に出会えなかったら、ずっと日本人のイメージを私の勝手に思った日本人だと思うほかなかった。自分が日本人先生はいかに私たち学生に優しくしてくれたのかを友達や家族にシェアして、皆が「日本人は皆中国人が嫌で、冷たい人ばかりではないね、本当にいい先生だね」と言った。私の親友の一人でも、前はすごく日本に意見を持っていたが、私が日本語を勉強しはじめ、日本に留学してから、今の彼女もいつか日本へ旅行に来ようと考えるようになった。だから人から人へとの影響は我々が想像したよりすごい力があるのだ。

また、講演の日に、「緻密で洞察力のある創造的な誤解」という文が出てきた。一瞬はこの言葉はなんか違和感が感じた。共に生きるために、誤解を解消すべきではないかと思った。しかし、よく吟味すると、なんか素晴らしい文だと不思議に思った。ちょうどこの前受験準備の時に、人の「認知」について勉強したものが頭に浮かんできた。我々人間は、物事を認知するときに、いつも自分の経験に基づいて、感情や想像といったものを加えて認識するのだ。人間はあくまでも主観的感情的な生物だと考えられている。それこそが、私たちの誤解を生み出す源泉ではないかと思い、なんか分かるような感じがした。確かに我々は完全に客観的になれない。皆は誤解のままで生きている。しかし、私たちは人や物事を認識する際に、まず、ステレオタイプや偏見を捨てて表象の異同だけを見るのにとどまらず、その異同が生じる歴史、文化や背景を深く考えて、その原因を分かるのが重要だと思う。

私たち皆はもともと同じ人間だ。いろいろな事情があって、異になるのだから。

6.東アジア・世界が共に生きることについて

この題目は非常に大きな課題である。歴史や政治などいろいろな面と絡んでいて複雑だ。自分の限られた力で一応自分ができることから考えようと思う。

共に生きるために、まず人間同士の心と心のつながりを作ろう。人が自分の国の人やことしか関連しないのは不可能である。あなたはＡ国やＢ国が好きではなかったかもしれないが、Ａ国Ｂ国のおいしい食べ物を食べはじめ、その国の人と接触しながら友達になるにつれて、きっと相手国のものや人のいいところが見えてく

る。人が完璧なものではない。広い心でお互いに異なるところを認めて理解できてこそ、心の繋がりができたのだと思う。

その繋がりを私たち大学生から作ろう。まず自分の考えを反省して見つめ直そう。自己中心自文化中心など狭いところから抜き出して、もっと広い心で相手の気持ちや考えを理解しよう。対話が順調に進むため、皆が本音を言いだせるのは大事なことだ。だから心を開いて、穏やかな雰囲気を作るべきである。対話するときにも、たとえ意見が違ってもひどいことを絶対言わない。差別単語も絶対に言わない。

それから、自分自身から周りに影響を広げよう。人は近い関係を持つ人に影響されやすいので、まず、自分の態度や考えを積極的に身の周りの人に示して、他国のいいところや自分の見聞を伝えて、かれらもきっと少しずつ変わっていくのだろうと思う。さらに、かれらもかれらたちの身近な人に影響を与えて、徐々に波紋のように広がっていく。

私は東アジア、この世界が平和で人間同士が仲よく存続していくことを痛切に願望している。自分の力がいかに微小なのかは知っているが、この世界にささやかな変わりでももたらしたい。そして、われわれ一人一人協同に努力すれば、きっとバタフライ効果になり、大きな変化をもたらすのを信じている。各国の人々の関係が親しくなり、心の繋がりが結ばれれば、共同体という名前がなくても、実際に私たちは共同体だと自然に思うのではないだろうか。長い道だが、せめてまずは東アジアにおいて、どこからのひとでも、言葉や国籍の境界線が感じられず、皆は自分と同じな人間だと思えるような日が 1 日も早くきて欲しい。

国際学生フォーラムを通して学んだこと

1.国際的交流的側面

国際学生フォーラムではバディ制度があるため、特にバディとは話す機会も多く、より仲を深めることができてよかったです。私は、フォーラムが始まる前の期間は“WeChat”を用いてバディと交流しました。中国ではLINEはもちろん、FacebookやInstagramといったSNSの使用が禁じられており、日本でアカウントを作ることもできず、驚きました。実際に中国の学生と話すと、このようなインターネットの規制がある現状に対して強い問題意識がありました。中国の若者はSNSを使いたいと思っていおり、さらに私のバディは、せっかく容易に世界各国の人と繋がることができるツールがあるにも関わらず規制することは勿体無いと言っていました。インターネットの規制が厳しい中国の現状は聞いていたため、私は中国に閉鎖的なイメージを持っていましたが、同世代の中国人は日本人と同じ様な考え方であることを知り、身近な存在に感じました。実際に会う前は緊張と不安がありましたが、初対面から笑顔で話しかけてくれ、日本に来られたことをとても喜んでくれたことが印象的でした。フォーラムで関わっていく中で、食に対してのこだわりの強さ、観光スポットで写真を撮る時の妥協しないところ、といった私とは違った感性を持っている一面にも気づきました。さらに、着物を着る体験を一緒にした時には、着物の色や柄を選ぶこと１つでも好みが異なり、文化や感性の違いに触れてとても面白い経験でした。一緒に様々な場所を観光することができて、とても楽しかったです。

歓迎会では、お互いの名前を覚え合うゲームや世界各国の事情を取り上げるクイズが、特にお互いを知るきっかけとなり面白い企画だったと感じます。

海外の学生と話した時に感じたことは、日本では当たり前の日常生活の小さなことが、他の国では当たり前ではないということでした。例えば年齢の数え方が違ったり、大学生活の過ごし方が違ったりしました。特に、受験や就職の話は私にとっても身近な話題であり興味深かったです。日本の大学受験はかなり厳しいものだと考えていましたが、韓国や中国はさらに厳しい学歴社会であることを知りました。また、韓国では大学生が１年間休学をしてワーキングホリデーや旅行、アルバイトに時間を費やすことも多いと初めて知りました。就職活動は大学を卒業してから始めることも多く、日本の就職活動とは状況が異なり、大学生の生活スタイルの違いに驚きました。さらに、韓国の学生の中には日本の企業に就職することも考えている人がいて、グローバル化を感じました。

今回の国際学生フォーラムは、私にとって海外の学生をおもてなしする初めての経験でもありました。どんなことに興味があるのか模索しましたが、日本の家庭で一般的に食べるような和食のリーズナブルなお店に行った時に、多くの海外の学生が気に入ってくれて嬉しかったです。海外の学生が、地元の人にお店に連れて行ってもらえると自分たちでは探せないお店に行けてとても良いと言ってくれたのを聞き、日本を知ってもらうために特別なことをするよりも、自分たちの日常に入り込んでもらうことが大切だと感じました。

2.言語使用・学習の側面

現代では世界共通の言語として英語を使う場面が多く、英語を読んだり書いたり聞いたり話したりというスキルは必須であると感じます。しかし、日本語は世界的に見ればマイナーな言語であり、ひらがな・カタカナ・漢字を使いこさなければならない上に文法も複雑な言語であると私は考えています。しかし、今回のフォーラムで出会った海外の学生さんは、意欲的に日本語を学ぼうと思ってくれており驚きました。さらに、日本語で会話することはもちろん、日本語でスライドを作り、自分の意見を正確に述べることができるという海外の学生さんのレベルの高さに感動しました。私たち日本人も英語学習は中学校の時から6〜9年間は続けていますが、海外の学生さんの中には大学に入学してから日本語を学び始めてここまで上達したという人もいたため、この上達の差は学習の方法に違いがあるのではないかと考えました。また、一緒に歓迎会を企画した韓国の留学生は、言語の壁を超えて素晴らしいコミュニケーション力を発揮し、日本語の司会で場を盛り上げていました。企画の時にも、様々な経験を通した私にはない発想で海外の学生さんを歓迎する方法を提案していました。そのことから、私も彼女たちの母国語である韓国語が話せたら、さらに面白い意見を出し合えるのかもしれないと感じました。海外の学生さんの中には日本に住んでいた経験や長期留学をした経験がある人もいました。やはり、その国の言葉を使って生活をした経験のある人は、言語スキルも高く流暢に話していると感じました。

3.学問的学び

私はシンポジウムの１日目のみしか参加することができなかったため、残念ながらディスカッションには参加できませんでした。しかし、各国の学生さんの発表を聞いて学んだことが多くありました。

まず、私が今まであまり知らなかった国の歴史的背景や文化を学ぶことができました。

ニュージーランドはヨーロッパからの入植者の存在により、国ができた時から多文化共生の問題に直面していたことを初めて知りました。このような起源を持つニュージーランドでは移民へのサポートも手厚く、移民の存在によって多文化共同の意識が芽生えるという考え方を持っており素晴らしいと感じました。日本も同じ島国であり、北海道にはアイヌの人や沖縄には琉球の人もいる中で、多文化共同の意識が薄いのではないかと考えます。ニュージーランドでは、ラテンアメリカの人による問題に目を向けるだけではなく、ラテンアメリカのお祭りや食べ物、踊りといった文化を尊敬し認めようとする姿勢がありました。このような姿勢は、日本が東アジアの国々と共生していく中で必要であると感じます。

ポーランドは、第一次世界大戦時には国が分裂し、第二次世界大戦には最初から参加していたという歴史を持つ国です。その中で、沢山の苦しみを味わったことを知りました。しかし、そのような歴史を乗り越えて、地理的・文化的に近い国であるチェコ・スロバキア・ハンガリーとヴィシェグラード・グループを設立したり、EU に参加したりしている現状があり、他国との協力体制を築いています。発表の中では、自国の方が他国よりも優れていると評価するような国粋主義ではなく愛国心を持つことの大切さ、さらに過去の戦争は現在の国際情勢に影響を与えるべきではないという考え方を話していました。このような考え方こそ、今の日本や東アジア各国が持つべき考え方ではないかと考えます。

次に、世界のリーダー的存在として知られているアメリカについてです。アメリカは良くも悪くも第二次世界大戦を経て日本に大きな影響を与えた国であると考えます。しかし、今のアメリカの状況はあまり良くないとニュースを見ていると感じていました。発表の中で、今のアメリカについて、国の問題を解決することが他国に示すことであると話しており、その通りであると感じました。

最後に、中国と韓国の学生の意見から学んだことです。中国の学生も韓国の学生も今の東アジアの情勢を政治的な面から解決することは難しいと感じていることがわかり、このことは日本の学生と同じであると感じました。中国の学生は学生が東アジアの共生のために組織を作るとしたらどのようなものができるだろうかということについて発表していました。まずは、その詳細な組織設計と考えに驚きました。発表の中で災害時の支援についての話があり、中国の馬雲さんが熊本県・大分県の大地震の時に多額の義援金を支援してくださったことを初めて知りました。政治のしがらみをなくすことで、お互いの優しさを感じ、日中間の関係も改善できるのではないかと感じました。また、寄付金を集めて災害時の支援をするという組織を構築する考えは、自国の利益追求ではなく世界の状況を考えた行動であり、実現すべきだと感じました。韓国の学生の発表では、韓国人の日本や中国に対する好感度調査の結果を見て驚かされました。今までの私の正直な考えでは、日本の帝国主義だった時代のことや慰安婦問題、強制徴用について、なぜここまで引き伸ばされた問題なのかと疑問に思うことがありました。しかし、20 代の韓国人の日本に対するマイナスな感情や日本人の中でも歴史的な人物が印象に残っていることから、いかに歴史が与えた影響が大きかったのかを感じさせられました。

日中韓の関係を良くしていくためには、互いの国を尊敬しあうための姿勢とその姿勢を育てる教育が必要であると感じました。

4. イベントとしてのフォーラムについて

今回の国際学生フォーラムを通して感じたフォーラムの意義は大きく 2 つあります。

1 つは、フォーラムの事前準備の段階から他の国に対する関心が高まり、積極的に活動できたことです。私の担当は歓送迎会だったため、韓国からお茶大に長期留学している留学生と一緒に歓送迎会を企画しました。私には、留学生と共に 1 つの企画を立案しそれを実行するという経験が、今までにありませんでした。そのため、最初は意見がまとまらず、また言語的な問題もあったと感じます。私は韓国語を話したり聞いたりすることができなかったため、留学生同士で韓国語の会話が始まった時には少し怖気付いてしまったこともありました。また、留学生の方にも日本語を使うことが難しい場面もあったと感じました。そのため、なかなか話が進みませんでしたが、お互いに自分の意見を主張したいところは時間をかけて伝え合って聞き合い、それぞれの経験を踏まえた考え方を尊重し合ったことで、最終的にとてもよい歓送迎会となりました。そして何より、お互いの絆が深まりました。国際フォーラムの良い点は、学生主体の企画が多いため、学生が主体的にフォーラムに参加することができることだと感じています。

2 つは、国際学生フォーラムを通して世界各国の友達ができたことです。今までの私は、世界共通語と言われている英語学習でさえも難しいと感じ、苦手意識を持っていました。しかし、学ぶことが難しいと言われている外国語の日本語を学び、コミュニケーションのツールとして日本語を使いこなす海外の学生を見て、尊敬すると共に、私も何か言語を学んでみたいと思えるようになりました。大学で学んでいる専門とは関係なく世界各国のことを知ることは大切であり、刺激をくれた海外の学生の存在は大きいです。忙しい中でもフォーラムに参加した甲斐があったと強く感じました。また、私は昨年にアメリカの大学で行われた短期研修に参加し、実際に外国に行かなければ感じられないことがあると知りました。そのため、海外の学生が母国で日本語を学ぶだけではなく、実際に日本に来ることによって初めて分かることも多いと考えます。

そのような意味でも、フォーラムを開催する意味があると感じました。
次に、国際学生フォーラムさらに良くするための改善点について提案します。
昨年度までの反省を活かし歓送迎会ではバディ以外の多くの学生と交流ができるようにグループを工夫しました。しかし、やはりバディ以外の学生と話す機会は少なく、全体に対する日本人の学生の割合が多かったので日本人同士で会話してしまう場面も多かったように感じます。さらに多くの海外の学生と話したかったです。また、10 日間という期間はとても短く、お互いのことを知るためにもう少し長い期間のフォーラムを開催できれば良いなと感じました。10 日間の中で様々な日程や体験を組み込もうとした結果、ハードスケジュールとなり海外の学生さんの体力的にも疲れが見られたと感じます。また、国際学生フォーラムは準備する過程でも学べることが多くあるため、日本以外の国でもフォーラムが行われ、さらに日本の学生が海外に行く機会も増えれば良いなと感じました。

5.東アジア・世界がともに生きることについて

シンポジウムを通して、なぜ東アジアにおいて日本・中国・韓国の 3 ヶ国の仲が深まらないのかということを深く考えさせられました。
特に強く感じたことは、歴史的な問題を引きずって今の状況をよりよくできないことは、どの国にとっても無意味であるということ、しかし、歴史的に日本が他国に対して行ってしまったマイナスな行動は日本人が思っている以上に他国の人にとって影響があったということでした。
ポーランドの学生の発表で、世界大戦下で国が分割してしまった苦い経験がありながら、それらを克服して今のポーランドをよくするために、他国との協力体制を築いているという話がありました。私自身の勉強不足で歴史的な知識は乏しいですが、世界大戦において誰が悪くて誰が正しかったかということを考えても、結局は自国の利益を主張しあうだけになると考えます。もちろん、間違った行動はしっかりと謝罪し考えを改めるべきです。その上で、互いに悪い面だけを押しつけ合うのではなく、互いの文化や考え方を尊重し合い、お互いの主張を出し合った上で一番良い方向に落とし込んでいく必要があると感じました。
他の国では第二外国語を小さな頃から学んだことによって新しい文化に触れるきっかけとなっていることを知りました。また、留学の促進によって学生が他国についての知識を深めて東アジア一帯としての共同意識を育むべきではないかとの意見がありました。私もこの考えに賛同したいと感じ、今までは英語圏以外の国に留学に行く意義を感じられないと考えていましたが、このフォーラムをきっかけに他国の言語を学ぶことには大きな意義があると考え方が変化しました。教育は国の政策の影響を直接的に受ける側面であり、その教育を受けた子供たちが作る未来に大きな影響を及ぼします。そのため、東アジアが共生していくためには今の教育制度を見直し、互いの国を尊敬し合えるような歴史の教育、考え方の育成を行うべきだと感じました。

6.まとめ

今回の国際フォーラムに参加したことで、私自身の考え方が大きく変わりました。海外の学生との交流は、視野を広げ自分の考えを改める良いきっかけとなります。特に、専門が理系分野であまり国際情勢や言語学習に興味がなかった私のような学生は、日本にいながらも海外の文化や考え方に触れる良い機会でした。これからもこのフォーラムで関わった海外の学生と繋がり、意見を交換し合えたら良いと感じます。また、さらに国際学生フォーラムが発展して、多くの後輩がこの企画に参加してくれることを願っています。

国家主義を超えて—多言語獲得の重要性

1. 国際的交流的側面

大学生同士の交流を通じて同じ年齢代の学生の考えを知ることができました。国境を越えて皆が共有し、共感できる点があることに驚きました。例えば、慰安婦や歴史問題のような敏感な部分において、「韓国人」や「日本人」としてではなく、同年輩の「大学生」として話し合うことができました。その経験を通じて、「共感」の大事さを感じました。現在の諸問題に対して、国家主義的観点ではなく、人間対人間として接する必要があると思いました。

2. 言語使用・学習の側面

フォーラム中は英語や日本語が使われましたが、英語学習に対するモチベーションを育てることができました。多くの部分において日本語で行われたため言語使用に不便はなかったが、日本人だけでなく他国の学生たちともより深い交流のためには第 3 言語の学習が不可欠だと感じました。また、英語やポーランド語など様々な言語を学習し、文化を知り、接することで見聞を広げたいと思いました。

3. 学問的学び

日本人学生の発表を通じて、「シチズンシップ」というキーワードについて学ぶことができました。国際化時代が到来した今、「韓国人」「日本人」「中国人」ではなく、「世界人」として私たちがどのような観点を持つべきか、知ることができました。日韓中の国家的対立は絶えず、対立している問題においても国家主義的な観点を捉えやすいと思われます。それは、私たちが「韓国人」としてのアイデンティティが確立しているため、自国中心的に考えやすくなってしまうからではないかと思います。それは、国の義務教育として定められている歴史教育なども関係していると思います。したがって、自国中心主義を捨てて視点を拡張するためには、多言語の習得が必要だと思います。私も日本語を勉強してから、日本人の立場からの歴史、社会、文化などを知り、今まで「韓国人」としてだけ世界を認識した私自身の視点を広げることができました。一言語だけできるということはその言語によってのみ情報を習得することができるということなので、世界人としての市民性を養うためには、多言語必須教育がこれからの課題ではないかと思います。

4. イベントとしてのフォーラムについて

私は今回のフォーラムで、歓送別会担当として参加しました。最初は、このような企画がはじめてだったためとても苦労しましたが、チームリーダーと他のメンバーとの協業で歓送別会を成立させることができました。今回のスタッフとしての経験は、協力心と企画力など様々な方面で成長できる機会でした。反省点は、送別会の準備が不十分だったためイベントの流れがきれいではなかった点です。また、送別会を開く挨拶の言葉の準備が足りなかった点です。しかし、他のメンバーと国際教育センターの方々、先生のおかげで、送別会を無事に終わらせることができました。

5. 東アジア・世界がともに生きることについて

このフォーラムが終わって、二つの点に気付きました。一つは、東アジアと世界の諸問題を解決するには、現在の国家主義から脱しなければならないという点です。「韓国人」「日本人」の観点を捨てることで現在の問題を私たち個人の、身近な問題と認識できるからです。2 つ目は外国語教育の重要性です。なぜなら、言語はすなわち文化であり、それは個人のアイデンティティにつながるからです。韓国語だけを話せられたら「韓国人」になりやすいですが、様々な言語ができれば国家主義的な「韓国人」よりは国家主義を越えた市民性を育てられる可能性が生じると思います。外国語を勉強することで、単に色んな言語を使うだけでなく、一ヶ国語では見られない世界を見ることができるということを改めて感じました。

第８回国際学生フォーラムを終えて

1.国際的交流的側面

フォーラムが始まってみるとバディと一緒に過ごす時間が思っていた以上に長く、私のバディは男性だったこともあって正直少し不安があった。しかし、これまで行ったことのない場所に行ったりバディを通じて他の海外学生とも仲良くなれたりと、バディシステムのおかげでより深い交流ができた。
海外学生と一緒に様々な場所に出かけたが、ただ外国から日本にやってきたお客さんとして彼らを案内して回るというよりも一緒にいろんなものを見聞きしながら楽しむことができた。
江戸東京博物館では、どういうこと？と質問されるのに対して説明するために普段より熱心に展示を見ることができた。他にも、より多くのものに触れてほしくて、いつもと変わらない街中を歩いているだけでもなんとなく何か面白そうなものはないかと周囲を注意して見ている自分がいた。国際交流は自国・自文化を知ることだと言われるのをよく聞くが、こういうこともあるのだなと思った。

行く先々でこれは何か、とか日本語でどう言うか、といった話をしながら、同じように他の国や言語の話もできた。お台場を訪れた際に「自由の女神像」を日本語・英語・中国語・韓国語でなんと言うか教え合って何度も繰り返し言い合ったことが印象に残っている。

今フォーラムでたくさんの人と出会って気づいたことは、趣味や好きなものを持つことが人との関係を築く上で強みになるということだ。私はこれといった趣味がなく、ものすごく好きなものとかハマっていることもないのが悩みの一つだ。新しく出会う人同士であまりお互いを知らない中、どんなものが好きかということは会話のきっかけとしてよく使われる話題だ。なんでもないようなことだが、それは国を超えても変わらないのだなと改めて感じた。

ドラマ、キャラクター、学問分野など、好きなものについて話しているのを聞くのは楽しいしそれを通じてその人のことを知ることができる。私もバディと親しくなるのに彼の好きなキャラクターを知ったことがとても役立ったと思う。彼のためにそのキャラクターを探していたら私までそのキャラクターが好きになったような気がしてくるから不思議だった。

フォーラムが終わった今も、彼らが好きだと言っていたものを見つけるとその人やエピソードを思い出して少し嬉しくなる。別れた後にまで新しい思い出を作れるようで、なかなか会えない距離での友人だからこそ好きなものの伝染はすごく素敵な贈り物だと感じている。

2.言語使用・学習の側面

私がこのフォーラムに参加した理由の一つに、海外学生との交流において彼らが学んでいる日本語だけでなく、自分が勉強している英語や中国語を使う機会が得られるのではないかと思ったことがある。しかし、フォーラム期間中に日本語以外の言語で完全な会話をすることはなかった。それだけ海外学生の日本語能力が高かったからだ。

初めてバディの学生とメールやラインで話した時から、その日本語力の高さに驚いた。後から聞くと日本の大学に数ヶ月間留学していたことがあるという人もいた。彼らと日本語で会話やテキストメッセージのやり取りをする中で、「日本語学習者」と一言に言ってもそれぞれその人らしい日本語の話し方の特徴があるということに気づき、面白く感じた。私がたくさん英語で話すのをネイティブが聞いたら、同じように私に特徴的な話し方や言い回しに気づくのだろうかと思った。

また、そんな日本語上級者の海外学生の中でもやはり他の人の日本語レベルが気になるらしく、英語圏の学生から「韓国人の日本語は特別だ」というような話を聞くこともあった。聞くと、韓国語と日本語は言語的に近いから韓国人の方がスムーズに自然な日本語を話せるということだった。よく英語は日本語とかけ離れた言語だからこそ日本人には習得が難しいのだと言うように、日本語を学ぶ英語話者も同じことを思うのだなと少し親近感を覚えた。

私の英語に対する苦手意識と海外学生の日本語力の高さによって、私が英語を話すことはほとんどなかった。英語で話されるのに対して相槌を打ったり、日本語で返したりということは多くあり、そんな時英語で返そうと思ってもなかなか思い切れなかった。やはり外国語で発信するのは能力としても気持ちでも難しいと感じた。

英語に関しては、些細なことだが、「遺伝」と言う言葉を見たバディに意味を尋ねられ、咄嗟に高校時代に使っていた英単語帳に載っていた言葉を思い出して”heredity”と答えたらそんな言葉は知らないと言われたことが印象に残っている。間違えたかなと調べてみてもやはり合っていて、私がネイティブに知らない英単語を教えたということでお互い驚いた。高校時代の英語の教員に会ったら、あの単語は普通使わないらしいですよ、と教えたいような楽しい気分になった。

3. 学問的学び

山本先生の「誤解」のお話がとても印象に残った。国際交流・異文化交流だけでなく、どの場面のどんな人間関係についても当てはまる重要な示唆だと感じた。
私は我が強くて頑固なところがあり、自分と反する意見を持つ相手に冷静に接するのが苦手だ。素直に他人の意見を受け入れることもなかなかできない。私は他人と接する時、自分との違いにこだわらないようにするためによく「所詮他人なのだから、完全に分かり合うということは不可能だ。私と相手は違うと認識した上で、相手を知ろうということに留めよう。」と自分に言い聞かせる。

そんな私にとって、あの言葉は力強いヒントに思えた。「完全には分かり合えないだろう」と自覚している点では似ているかもしれないが、大きく異なる考え方だった。「知る」という私の考え方は向こうからこちらに向く一本の矢印なのに対して、山本先生の「誤解」は向こうとこちら、互いに向く二本の矢印で表されるものだった。

また、自分の認識をあくまでも「誤解」と捉えるという謙虚さも私に足りないことなのかもしれないと気付かされた。私は相手の考え方を理解しようとする・理解できると思うことは傲慢で、「知る」に留めるべきだと考えてきたが、それは単に受動的で無責任な逃げの姿勢でもあったかもしれないと考えるようになった。

ただ自分から見えた部分だけを受け取るのではなく、注意深く想像力を働かせて、自分なりの認識を持つことを意識したいと思った。そのような意識を持つことが他者との関係をより深めるために有効かつ実践しやすいことだが、やはり反省や訓練が必要なのだということも改めて感じた。

小松先生のご講演を受け、日本で多言語主義を実践するならどの言語を取り入れるのだろうかということをぼんやり考えた。今の日本では、例えば街中の言語表記をとってみると一番に英語、次いで中国語と韓国語、という感じだが、日本が共に生きている市民と考えるとそれでいいのだろうか。これから結びつきの強まる国があればその言語が浸透することもあるのだろうか。やはり、地理的・言語的な近さからも中国語と韓国語だろうか。言語教育なども実現すれば国家間の関係や国民のイメージなども変わるのではないか。などと想像した。しかし、外国語を取り入れようとしたらこんな反発があるだろう、というイメージもまた想像された。そこまできて、まだまだ日本は多文化共生を実現していくためには社会的に未成熟な部分が大きいのだろうと思った。

小松先生が挙げられていたベルギーとカナダの事例から、社会が変わっていくためには市民の意識が必要不可欠だと学んだ。こうした学びの機会を得た私たちが、その意識を持つ市民になっていかなくてはいけないと思う。

4. イベントとしてのフォーラムについて

フォーラムが始まってからシンポジウムまでの数日間で参加学生と予想以上に打ち解けられたし、たくさんのことを話せた。一方で私の中には、親しくなった分シンポジウムでデリケートな話題を扱うのに率直に発言しにくくなるのではないかという心配も生まれた。しかし、実際にはそれまでの交流があったからこそスムーズに議論を進められたし、友人だからこそ歩み寄りたいと思えて、互いの発言をより尊重し合う姿勢が持てたと感じる。また、それまで笑っておしゃべりしてきた友人たちの真剣で知的な一面を見られたことも新鮮だった。

短期間のうちに複数の国から集まった者同士が、楽しく親しめる友人と、国家間の問題について議論する相手を両立する関係を築けるというのは、このように丁寧に準備された環境ならではだろう。

今フォーラム中、様々な場面で海外学生/日本人学生とか「〇〇人」というように、その国籍や属性で括られることが多かった。私はその点になんとなく違和感を覚えた。

今フォーラムで私が得た一番の成果は、偏った先入観で判断せず、まずは一個人同士で関わりあってみることで他人との壁が低くなると学べたことだと思っている。また、私はシンポジウムを通して、同じ国の人だからといって共通した認識を持っているとは限らないということを実感した。

だからこそ、交流や議論の際にむやみに「〇〇人」と分けたり選んだりすることは、その人個人と向き合うためにはあまり意味がないか、むしろ逆効果になりうることなのではないかと感じた。
国によってそれぞれ異なる常識や教育の中で育ってきた学生が議論するという点を要とするならば国籍・属性にこだわることは避けられないと思うが、国を超えた友情を結ぶことで連帯感を生むためには、やはり個人としての交流が一番であると考えるため、もう少し配慮できるのではないかと感じた。

5. ツアー担当として

私はホスト校の学生として、ツアーの企画・運営に関わった。学びが得られてかつ日本人学生も海外学生も楽しめるだろうという内容を考えるのは意外に難しかった。行ってみるまで参加者の反応が分からず不安で、みんなが退屈してバラバラになってしまうという想像も何度もした。しかし行ってみると友人同士で楽

しく過ごせているようで、大きなトラブルもなく無事に終わって安心した。
日本体験ツアーで私が引率したお台場コースでは昼食にたこ焼きを選んだ。もう一方のコースの昼食に比べて地味な食事ではないかという不安もあったが、当日、私のバディがいちばん好きな日本食はたこ焼きだと言ってワクワクした様子でたこ焼きを選んでいるのを見てとても嬉しい気持ちになった。
自分が企画して、行き先もすることも全て前もって把握していたけれど、実際にみんなで行ってみるとその場で生まれる会話や手助けのおかげで予想していたよりも充実したツアーになった。
自分自身もとても楽しめて、参加した人たちからも楽しかったと感謝の言葉をもらえて、ミスも多かったが、ツアーというフォーラムの大きな一部に携われてよかったと思った。

6.東アジア・世界がともに生きることについて

シンポジウムでは自然と日韓関係の問題が話題の中心となったが、国家間の認識の違いが最も大きな障壁なのだと感じた。それについて話していく中で、利害関係が絡む政治での考え方と市民としての認識を一致させなくてもいいのかもしれないと考えるようになった。

そういった話題に関して認識を形成する大きな要因は教育と報道だろう。私たちは一つの可能性として、歴史教科書において国家間で意見が対立する問題については両者の考え方を併記すること、当事者の証言を載せることを提案した。そうすれば、学び手は立場によって様々な見方をしているということを合わせて知ることができ、その上で自分がどう捉えるか、必ずしも自国の立場によらないその人なりの意見をより多くの人に持たせることができると思うからだ。私は数ヶ月前にジェンダー系の授業で慰安婦問題について教わるまで、日本は正式に謝罪し、日韓の間で解決したものだと思っていた。中学生の時、社会科教員に「日本は謝ってお金もたくさん支払ったのに、韓国はお金欲しさにいつまでも騒いでいる」と聞き、様々な報道で日本の政治家が韓国の慰安婦像などに対し苦言を呈する姿を見ていて、それが事実なのだと信じてきた。一方の考え方にしか触れられなければ、対立を深めることにつながるだろう。異なる見解を持つにしても、それに対する他の見解について触れることは必要だと思う。

また、歴史において加害した側面は隠されて被害者意識ばかりが強調されやすいのではないかという意見もあった。シンポジウム中にドイツの例への言及も度々あった。ドイツにおける負の歴史を風化させないための工夫が様々な施設や町中の風景に当たり前のように取り入れられていると聞いたことがある。日本は国家として非を認めないというだけでなく、国民の自覚も足りないと改めて感じた。日本人の多くは、先の大戦での自国の振る舞いについて現在の自分たちとは切り離して、愚かであったと冷めた目線を向けているように思う。注意深く見守っていなければ同じ過ちを繰り返す可能性を自分たちも内包しているのだという自覚を日本の中に根付かせなくてはいけないと強い危機感を持った。

今フォーラムには東アジアの外、アメリカ・ニュージーランド・ポーランドからの参加者もいた。彼らにとって東アジアの問題は遠いことだっただろう。しかし、彼らはシンポジウムにも積極的に参加し、自らの経験をもとにたくさんの可能性を示してくれた。例えば私が EU の抱える問題について日本の経験をもとにヨーロッパ人の前で発表しなさいと言われても到底できる自信がない。それだけのことをできる彼らの確立したアイデンティティや国際市民としての自覚などは見習うべきものがある。また、日本に興味をもって日本語を学んでいる彼らが日本の抱える国際問題についても真剣に考えてくれたということを嬉しくも感じた。このことから、世界で起こるあらゆる出来事を人ごとだと無視せず、少しでも自分に近づけて受け止めることが共生に必要だと実感した。

東アジアでの連帯感を築く

1. 国際的交流側面

私は長期の留学経験があまりなく、今回の 10 日間のフォーラムは、短い時間ではあったが多くの留学生と初めて密に関われた機会だと終わってみて感じた。特にツアーや自由研修では、1 人の友達として相手をよく知る機会になった。母語ではない日本語を話す留学生と、自分たちの国の言葉を話す日本人では、どうしてもツール的な不利・有利や心理的なギャップがお互いに生じているはずなのに、仲良くなればなるほど冗談や少し真面目な議論などもよくするようになって、個人的には必死で言いたいことを伝えてくれようとしている留学生に対して、申し訳ないという気持ちを感じてしまった。私が学んだことはもちろん数多くあるが、やはり立場的にはホストの側面が強かったのかもしれないと感じてしまった。それはもちろん一括りにお茶大生側といっても人それぞれで、英語に抵抗のないひとは積極的に使ってコミュニケーションをとっているものもいたし、やはりお互いの母語ではない言語で対話をすることは正確性には欠けるかもしれないが、心理的なギャップはやはり少なくなると感じた。だが、シンポジウム中などは特に顕著にみられたが、学生同士でまた得意な人が通訳や、わかりやすく言い換えていて、多少の言語能力差を対話することに重点を置いてカバーしようと協力しあっていたのは、本当に学生のフォーラムゆえの醍醐味ではないかと感じた。言語的な側面においての国を超えた学生交流では日本人学生として少し反省点はあったものの、行動や対話から学べることはとても多かった。もちろん各国のほんの一部の参加者でしかないので、それによってこの国はこうだと決めつけることはできず、個人の性格的な影響も多く個と個の関係として捉えるのが正しいが、韓国人は日本に慣れているからか、また友達が多いからかわからないがとても、人と人との距離が近く、フレンドリーで親しみやすくユーモアが溢れる方が多いのが印象的であった。その要因として若者文化や社会構成が似ていたりと、日本人の仲良い友達と接する感覚と似ていて、日本語も上手であったので普段の会話ではあまり外国人だと意識することは少なかった。時々お互いの国の違いなどを議論する場面があり、とても興味深く面白かったのだが韓国では、日本以上の学歴社会・スペック重視の就活、小中高の部活動に対する考え方、習い事の意義など似ているようでやはり違う部分も多くて、異文化の人とだからこそ、一つのテーマについて話した時にとてもさまざまな視点や知識が得られて新鮮ですごく面白かった。またワルシャワ大学や大連理工大学の中国の学生は同じ学校の子同士で移動時間などは話すことが多くて、個人的にお話しする機会としては韓国の学生と接する機会が多かったのだが、東京観光ツアーや自由研修の時に、各国共通の話題で意見交換ができてとても面白かった。韓国人と違って友達との親しみ方に違いを少し個人的に感じたので、一緒に盛り上がるという接し方ではないが、ポーランドの文化や最近の中国に関する情報などを丁寧に話してくれて、お互いにとってとても有意義な時間になったと感じた。

2. 言語使用・学習の側面

言語使用に関しては、私は基本的に日本語を使用していたので特段苦労することはなかったものの、だからこそ留学生の学びに比べれば得られるものは少なかったとは感じる。しかし、日本語能力が全員ものすごく高く、自分が英語も韓国語もまた中国語やポーランド語が達者でないにもかかわらず、こんなに多くの人とプライベートな話、学問的な話において意見交換できたのは、私にとってはものすごくいい機会となった。とても仲のいい他国の友達ができたことがあまりなかったので、10 日間をともにすることで過ごしている環境は違うけど、同じ人間としてお互いのためになるようなことができたらいいなという風な感情をすごく持つようになったことが 1 番の変化であった。

3. 学問的学び

国家の中で言葉の壁や、民族的な対立がもともとある中、それを教育や政策の中で乗り越えようとしてきたという話をはじめ、先生方や非アジアの国の学生達に発表してもらい、改めて、日中間には物理的距離はもちろん無意識のうちに「私たちはあなたたちとは違う」という排他思考が働いていることを改めて感じた。国内の外国人が増えているといっても、多文化政策や移民政策をとっているわけではなく、当然ではあるが基本的に 1 国家 1 民族のナショナリズム的な考え方があり、それに基づいて幼いころからアイデンティティが形成されるので、簡単にアジア国家の連帯意識を国家を超えて育むことはできず、とても難しいと感じた。それに加え、歴史的な出来事に基づく嫌悪感を抱いている人は、アンケート調査に基づくグラフにもあったように国民全体で見ればものすごく多く、国家間としてはやはり民意が政治に反映されるのでこのような共同体意識を育むためには、上からの政策にも支持が得られず限界を感じる可能性が高いことも改めて感じた。そのようなことを踏まえて、韓国・中国・日本の学生は草の根的なアプローチや学生主体となったアプローチで、解決しようとする案をとても具体的に、実現可能性に近い段階まで緻密に練って発表していたので、私たちも、これは「仕方のない問題」と片付けることなしに、とても希望と期待に満ちた有意義な

議論ができたのではないかと感じた。

6.イベントとしてのフォーラムについて

良かった点はまず最初と最後の歓迎会や送別会がとても良かったと思う。歓迎会においては、グループ分けをして、ゲームを数多く取り入れていた点です。司会の方が積極的に学生や留学生の方にマイクを回すことで、お互いの緊張が解け、みんなが笑いに包まれていたので、それを機に話しやすくなった子もたくさんいて、また直接話せなくてもクイズについて話している様子から、全体として仲が深まった感覚があった。また送別会ではお互いの思い出を中心に書き出すというテーマで、みんながこんな所に行っていたのだと知ると同時に、バディに直接感謝の気持ちを伝えたりだとか、思い思いの楽しみ方ができる企画でとても良かった。フォーラムの改善点としては、シンポジウムを三日にしてもいいと感じた。二日間を発表に当て、それを踏まえて軽く事前に課題を出してから三日目を丸１日議論に当てることで、さらにじっくり、深く、具体的に議論できたのではないかなと感じた。そこに当たって、本格的に午前は教室を分けて、議論し、午後に大部屋に集まって全体で発表して互いに意見し合うという、かなりがっつりした議論を行ってもいいのではないかと少し感じた。

6.東アジア・世界がともに生きることについて

私はやはり若者や学生が中心になって行動していくことが最も有効な解決策かなと感じた。歴史認識を踏まえ、忘れるべき問題ではないが、これからのことに対して連帯していく必要性を若い人の方が感じることができるという点と、今後の政治や民意を作っていく主体となっている世代であるからだ。私たちが日常的にできることは数多くあり、大学でこのような勉強をしている学生だからこそ比較的異文化に寛容で、自国中心主義であることは少なく、意識している人も周りに多いように感じる。しかし私たちの行動が大人や国家としての意見に影響力を与えることは滅多になく、一つの組織を作ることの意義はとても感じた。最初は経済や法的な権限がなくとも、もっと大規模な形で、日中間の学生たちが具体的な歴史問題や教科書について取り上げることで、次第に協力してくれる人たちも出てくると思うからだ。

共生するための第一歩となった国際フォーラム

1. 国際的交流的側面

個人的なことではあるが、やはり韓国の学生とはすぐに打ち解けることができると改めて実感した。もちろん他の国との学生ともすぐに仲良くなるが、なぜか初対面でも盛り上がるのは必ず韓国の学生だ。自分でもまだ理由はわかっていない。しかし、韓国の学生にいつも私みたいな優しい日本人はいないよと言ってくれるのは本当に嬉しい。個人的な例ではあるが、このような心のこもった交流を韓国、中国、日本人の間で行えば東アジアで抱える問題もすぐに解決しそうである。今回の海外のフォーラム参加者は日本での留学経験がある学生が多くいた。関西で留学していた学生に関西特有の訛りがあることも驚きだった。また、全員が必ずしも日本語を学びたいと思って学習をはじめたのでなく第二希望ではじめた学生もいた。しかし、こうして主に日本語を中心にして行われるフォーラムに参加してくれるのは日本側としても嬉しかった。私は、ツアー担当だったが企画を立てたことは今後海外の学生を案内する時の良い経験になると思った。やはり定番とされる場所は必ず海外の学生も訪れている可能性が高い。限られた予算の中、おもてなしも心で場所を探すのは大変だった。しかし、ツアーの最中、学生が至る所で写真を撮って感動していた様子を見ることでやはりやりがいを感じた。今回のフォーラムで感じたことは、私たち日本側としてはホスト国として常に 100 パーセントのおもてなしをしなければならないということだ。このおもてなしが、相手国に対する信頼につながり、理解を深めることになる。これは、今後私が海外の人と接する時一番大切にしたい考え方となった。

2. 言語使用・学習の側面

海外の学生の日本語レベルの高さに驚いた。そして、日本人も第二言語、第三言語をより流暢に話す能力が今後の国際社会の中で問われていると感じた。やはり多くの言語を話すことができれば、その分自分の世界は広がっていくと思った。他言語が分かれば、その国の母国に関するニュースを母国語以外で読むことができより客観的に考えることにつながると思う。まだまだ勉強中であるが、私自身英語、韓国語はもちろんフランス語や中国語にも今のうちに勉強を始めたいと思った。学習面からは、海外の学生の母国に対する関心の強さが感じとれた。特に韓国の学生が慰安婦問題や徴用工問題を現代に生きる私たちが解決すべき課題だと挙げていたのは衝撃だった。日本人の学生は正直、政府や国に対しての関心が薄い。しかし、海外の学生は母国の歴史や政治に強い関心があり勉強している。これは日本が見習わないといけない点だと思った。私自身、大学生になりニュースや新聞をみる機会が減ってしまった。正しいニュースを知らなければ、このような海外の学生が集まる場で日本人の立場としての発言がしにくくなると思った。日本人が国際社会でより対等な立場でいるためにも、私たち自身が国内に高い関心を持ち続ける必要を感じた。

3. 学問的学び

3.1 講演について

私が大学生になる前は、韓国の音楽やドラマは好きでしたが韓国人に対して良い印象が全くなかった。今になって考えてみると、これは全てメディアや家族など私の周りの環境によって影響されたものであった。当時の私は、周りの意見が絶対的に正しいと思っており疑う余地すらなかった。つまり、この意見は私自身の目で見て考えたことではなかった。講演では「あなたの意見は、どんな環境に影響されて作られたものでしょうか？」という問いが提示されていたが、私の場合は上で述べているように 100%、メディアと環境によるものだった。やはり改めて、メディアの影響力の強さを感じた。きっと私の家族もメディアに影響されていたと思うからだ。ここで思ったのは、先生も仰っていたが分かりやすい意見に飛びついてはいけないということだ。やはり、頼れることは自分の目しかないと考える。私は大学生になり、たくさんの韓国人と友達ができた。日本人の友達以上に仲の良い存在ができて、やっと韓国人全てが悪い人ではないと実感することができた。私は遅かれ早かれ大学生になって気付いてよかったと思っている。また、先生のお話の中でグローバル化について仰っている部分があった。私の周りにもたくさんの海外の人が生活しており、日々グローバル化を実感している。しかし、先生曰くこれは「ローカル化が同時進行している」と述べていたのは印象的だった。グローバル化により海外旅行や海外の人と接する機会が増えていると思う。私自身、今までにタイ、ベトナム、カンボジア、韓国などの国に訪れたことがある。また、お茶大に入り数えきれない海外の学生と接してきた。その時に、必ずいつも感じてしまうことはやはり日本は素晴らしい国だということだ。つまり私自身がグローバル化とローカル化が同時進行していると感じていたことだ。しかし、私はこの日本に対する思いが「ナショナリズム」ではなく「パトリオティズム」にならないといけないと思っている。確かに強い愛国心は排他的な考えを持つことになるが、国際人とはやはり母国のことを想っている人ではないとならないと思う。母国を大切に考えることのできない人は相手国も尊敬することができないと考える。私は

この日本を大切に思う気持ちをパトリオティズムに捉え直し今まで以上に相手国を尊敬できる国際人になりたいと思った。

3.2 シンポジウムについて

全体を通して私が一番強く感じたのは、教育の重要性だ。個人をつくる核となるのは、やはり受けてきた教育の質だと思った。教育のあり方で私たちは世界中簡単に一つにまとまることができるし、簡単に相手国を憎むこともできる。だからこそ、歴史を正しく学ぼうとすることが私たちに必要だと思った。幼い頃から受ける教育だからこそ、国としてもより公正に教科書を作成してほしいと強く思う。反日感情も嫌韓感情も全て歴史の教科書で学んできたことをクリティカルに考えたことがなかった人が抱いているものだと思うからだ。歴史について正しく教育されてきたから、成功している例がドイツとポーランドだと思った。ポーランドの学生は繰り返し「昔のドイツと今のドイツは別である」と教えてくれた。また、祖母をアウシュヴィッツで亡くされたポーランドの学生アリシアさんも今のドイツもドイツ人も憎んでいないと言っていたのはとても印象的だった。東アジアに住む私たちも真の歴史を学び、互いのことを許し合う姿勢を持つことがともに生きるための第一歩だと考える。確かに悲しい歴史は忘れてはいけないことであり記憶し続けなければならない義務が現代人にはある。しかし、あるタイミングで過去と現在を切り分けて考えることがグローバルな中で生きる私たちに必要な能力だ。文化的共通部分をたくさん持つ東アジアの私たちだからこそ、結束した時の力は強いと思う。私たちは母国の歴史をクリティカルに見つめ、メディアを信じすぎないことが共生するための第一歩だと思った。

4. イベントとしてのフォーラムについて

4.1 良かった点

まず一つ目は、タブーであった歴史問題について中国、韓国、日本の学生が各自思っていることを発言できたことだ。中国の学生から出た意見の中で、「中国、韓国、日本、三ヶ国違う意識でもよい」と述べていた場面があった。これは、私の中で新鮮だった。今まで私は、歴史認識にしても各国統一すべきだと考えていた部分もあった。しかし中国の学生は私たちの歴史認識が統一されることは不可能だと述べながら、共生するためには違う意識のままでも可能であると意見していた。また、韓国の学生は慰安婦問題を人権問題として捉え日韓問題の改善を訴えていた。母国と日本の関係改善をこんなにも強く願う学生がいたことは、日本人の私も嬉しかった。二日間という中で、こんなにも東アジアの関係について濃く学ぶ経験は私の中で間違いなく一生の財産となった。

二つ目は、アジア以外の国が東アジアで生きる私たちにヒントを与えてくれたことだ。ニュージーランドの多文化主義の考え方、アメリカの自国第一主義の考え方は間違っていること、ポーランドのドイツに対する考え方についてだ。私の中で、一番参考になると思ったのが上でも述べたがポーランドの考え方だ。私たち東アジアにも互いを許そうと思う歩み寄りが必要でありそれが大きな解決策となる。また、ニュージーランドの学生が移民は国の心臓であると発言していたことも印象的だった。それほど他者を理解しようと思う気持ちが異文化交流に大切だと感じた。

三つ目は、約一週間という限られた期間だからこそ内容のつまった交流ができたことだ。毎日日本側と海外側の参加者は授業以外の部分で交流をしていた。私も終わりが見えている交流だからこそ瞬間瞬間で楽しんでもらいたいと思うことができたし、海外の学生もそれを感じ取ってくれていた。私にとってたいしたことではなかったが、韓国の学生に池袋を案内したときにすごく感謝されたことを覚えている。次は私が韓国に行った時に案内してね、おうちに泊めてねというと韓国の学生はもちろんと答えてくれた。サマープログラムでも同じような経験をしたが、この国際フォーラムの方が少人数でより質の高い交流ができたと感じた。来年もぜひ参加したいと思える、充実した学習と交流のバランスがとれたよい会であった。

4.2 改善点

一つ目は、ポーランドの「昔のドイツと今のドイツは別」という考え方が東アジアに当てはまらないと感じたことだ。この考え方は共生のために確かに大切だ。しかし、私が思う以上に東アジア、特に中国、韓国の人々が抱える日本に対する歴史問題の意識は根が深く、昔の日本と今の日本を区別して考えることは不可能なのが現状だ。実際、韓国の学生がこの話を聞いていたときにとても驚いており、韓国でそれは難しいかもしれないと言っていた。ニュージーランドの移民政策や、ポーランドの歴史認識は確かにすばらしいと思った。しかしここで感じたのは、やはりヨーロッパの考え方とアジアの考え方は相容れないのかもしれないということだ。悲しい考え方になるのかもしれないが、アジア人同士の問題はアジアの例を参考にしなければならないのかもしれない。

二つ目は、解決策の一つとして言語教育を充実させるといった意見が出ていたがやはり現実性がかなり低いということだ。韓国やニュージーランドでは第二外国語を学ぶ機会が小・中学校であると話していた。し

かし、日本ではこの制度がない。また言語を通して考え方や文化を学ぶことが必要と今回のフォーラムでも話し合われていた。しかし、私たち日本人は小・中学校で英語を学ぶ機会があるが現実問題として英語圏の考え方や文化を学ぶことができただろうか。最終的には、その言語に興味のある学生が個人的に勉強を進めるしかなく興味のない学生は勉強することすら途中で諦めてしまうのだ。教育者の立場としては、興味を抱かせる言語教育を行うことが大切になると思うのだがこれもかなり個人差があると考える。結局のところ言語教育はやはり大切なのだが個人差がかなり大きいことが危惧されると思う。

三つ目は、東アジアの共生のために政府以外の道で探す方法をとるという意見に対してだ。例を出してみると、韓国の政治家は選挙公約などで日本に対する歴史問題の話を出す人が多い。つまり、歴史問題を利用することで国民の意見を掴もうとしている。日本側としては、絶対に首相が歴史問題を謝ることなどはしない。この問題は戦後 70 年以上も平行線をたどっているままだ。このような流れを知っていれば、私たちは政府以外で探すしかないと考えるのは当然のことだ。しかし、政府が決めることはその国の方向性を決めていることであり、私たちは常にその意見に対して従う必要があるのだ。また、メディアも政府が決めたことを大きく報道するのだ。日本人の意見を代表する政治家が個人の利益を考えず、共生の心、許し合う心を持たなければ国同士の問題は解決することはできないのだ。そのためには、私たちのような東アジアの共生について深く学習した学生が将来政治家になることが大切なのかもしれないと考える。

四つ目は、今回のフォーラムに台湾の学生がいなかったということである。台湾も戦時中日本の統治下でありながら、現在は親日国としての印象が強い。彼らに話を聞くことで私たちが参考にできる部分が必ずあると思う。また、中国・台湾間の現在の話も聞くことで日本側としても客観的に考えるようになるんではないかと思った。来年からはぜひ台湾の学生も招待してともに考えを深めたいと思った。

5. 東アジア・世界がともに生きることについて

フォーラムを終えた今一番感じていることは、やはり教育の重要性だ。子供は、単純であり教科書や周りの環境の意見を信じやすい。一回植えつけられた考え方というものは、よほどのことがないと変わることがない。だからこそ、幼い時から受ける教育の中に国を憎む内容ではなくともに生きるための内容が含まれていないと世界中の人々が共生することはできないのである。また、学校で教科書を読むだけではなくこのようなフォーラムのように実際に東アジアの学生がもっと交流する機会を増やすことが大切だと考える。相手国を憎んでいる人は、その国の人と実際に交流したことがない人が多いのだ。私たちのように会って、話し合うことで印象が大きく変わるのだ。私は大学になってこのような機会があったが、小学生のころから言語を通じなかったとしても対面する機会があってもよいと思う。何よりも互いの顔を見て、触れ合うことが和解するための大きな一歩になると感じた。

6. その他

私は、たまに東アジアの歴史問題が解決しないことに対してどこか他人事のように感じてしまうことがあった。戦後 70 年以上も経ってどうしてこんなにも争っているのか疑問に感じていた。しかし、韓国の学生と交流していて分かったことがあった。私の最も仲の良い韓国人の祖母の例になるが、彼女は戦時中に日本人に強制的に北海道に移住させられたそうだ。また、その祖母は韓国に戻ることができず北海道で最後を終えたという悲しい話を聞かせてくれた。私はこの話を聞き、ひどく衝撃を受けた。戦後 70 年以上経ち、もう関係ないことではないかと思っていたことが私の大切な友達には大きく関係していたのだ。この時に、歴史が自分に関係ないということはなく必ずどこかでつながっているのだと感じた。だからこそ、私たちは特に東アジアの歴史について深く学習する必要があるのだ。また、森山先生が仰っていた「大切な人がその国にいたら、必ず互いの国が良い関係になってほしいと思うものだ」という言葉に深く共感した。中国、韓国の友達がいなかった小・中学生のころの私は、それぞれの国と関係が悪化しても何も感じなかった。しかし、大切な関係ができた今は、それぞれの国の関係がよくなって欲しいと強く日々思っている。また、大切な友達ができたからこそ、その国の言語を少しでも習得したいと思えるモチベーションになっている。私はこのフォーラムでアジア以外にもまた新しい絆が生まれたことに感謝している。世界中で友が日々日本との共生について考えてくれているので、私も各国に思いを馳せて学習しようと思えることができるのだ。

共感の力―文化的交流の可能性

1.国際的交流的側面

私にとって、講義や発表を聞くだけでなく、様々な国の学生と討論し、意見を交換し合う時間が設けられていたことは非常に有意義であったと感じている。私は普段から新聞には一通り目を通しており、従軍慰安婦問題や領土問題など東アジアが現在抱えている問題に関する記事を目にすることも多い。しかしマスメディアが報道しているニュースを理解するだけでは、それぞれの国の政府がどういう意見を持っていてどう対応しているのかということは分かっても、実際にその国の国民がその問題についてどう思っているのかということはあまり分からない。これに対しこのフォーラムでは、韓国の日本大使館前に慰安婦像が設置されたことや、太平洋戦争中の侵略的行為に対する日本政府の謝罪は十分であるかという問題などに関して、海外の学生の率直な意見を聞くことができた。他国の同世代の国民が何を感じているのかということを直接聞くことができたのは、非常に刺激になった。

また、留学生との会話を通して、日本と他国との違いや海外における日本文化の受容について知ることができたことも大きな収穫だった。例えば、私はポーランドから来た二人と会話をすることが多かったが、彼女たちと話したことで、ラーメンや寿司といった日本料理がポーランドでは人気であるということ、バレンタインデーなどのイベントの形式は国によって微妙な違いがあるということなどを知ることができた。私は将来、日本文学や日本文化について研究したいと思っているので、今回のフォーラムで日本を客観的に見る視点を得たことは、今後学習を進めていく上でも役に立つのではないかと考えている。

2. 言語使用・学習の側面

私は10月頃から学内で開かれていたポーランド語講座に参加していたこともあり、ポーランドの留学生のバディになった。その講座では、挨拶や自己紹介など初歩的なことを学んだにすぎなかったため、実際にバディの学生とポーランド語で会話をすることはほとんどできなかった。しかしほんの少しであれ相手の言語を学んでいたことで会話のきっかけを作ることができ、相手に親近感を抱くこともできたと感じている。バディの学生はフォーラムの最後の日に、もしこれからもポーランド語を勉強するなら、気軽に質問をしてほしいと言ってくれたので、これからも学習を続け、いつか彼女とポーランド語で話してみたいと思うようになった。そして、相手の言語を学ぶということが、相手と良好な関係を築くために重要なのだと実感できた。

また、このフォーラムでは基本的に日本語が用いられていたが、時には英語が使用されることもあった。私は英語サークルに所属しており、その活動の一環でディスカッションの練習をすることもあるので英語での会話にはある程度慣れているつもりだったが、国際関係などという社会的な問題について話したことはあまりなかったので、いくつかの単語を聞き取るのがやっとだった。自分の語学力の無さを痛感すると同時に、留学生たちが日本語で社会問題について話しているのは刺激になり、言語能力を向上させたいという意識を高めることができた。

3.学問的学び

初日の午前中に行われた基調講演では、東アジアの対立の原因が日本の過去に対する反省の不十分さ、自国第一という風潮、世界のグローバル化に伴う「国から個人へ」という視点の変化などであることを確認した。そして物事をクリティカルに見つめることの重要性についても言及された。

同日の午後は二つの招待講演があった。一つ目は「共生のための言語教育―ベルギーとカナダの例をもとに」である。この講義では、ベルギーとカナダという二つの多言語国家が扱われた。まずベルギーでは、フランス語圏とオランダ語圏との間に根強い対立がある。EUには、新たなコミュニケーション能力の創造のために「すべてのEU市民が母語のほかに2つのEU言語を習得する」という言語教育の目標が存在するが、オランダ語圏ではフランス語を必修として勉強するのに対し、フランス語圏ではオランダ語の習得は必修ではないなど、言語教育の不均衡が指摘されている。そしてカナダでは、制度的二言語主義が採られており、行政サービスは英仏二言語で提供されている。植民地戦争を経て少数派となったフランス系の住民が主権運動を行った時期もあったが、現在はフランス語圏の言語や文化を理解するために「フレンチ・イマジネーション」というシステムが整えられつつあり、相互理解のための努力がなされている。この講義からは、相手を理解するために相手の言語や文化を知るということの重要性を学ぶことができた。

二つ目は「『向こう側』と『こちら側』のあいだで」という講義だった。この講義では、現在の日本は、出身国や文化などのルーツを隠した方がうまく生きられる場合もある社会だということを確認したあと、世界を「向こう側」と「こちら側」に分け、「こちら側」を絶対的な正義とみなすことの危険性について学んだ。また、ナショナリズムとパトリオティズムの違いについても教わり、後者に見られる「自己を律する、

倫理的な態度」が必要ではないかという指摘があった。私たちは、「こちら側」からだけでなく「向こう側」からも影響を受けているのだから、境界にとどまることで「ともに生きる」ことができるのではないかというのがこの講義の結論である。

二日間にわたって開かれたシンポジウムは、アジア以外の地域における共生のための取り組みが発表された部分と、東アジアの学生が共生のための提案をした部分に大きく分けられていた。前半では、東アジアにはあまり根付いていないと思われる多くの発想を学ぶことができた。例えば、多民族国家ニュージーランドの「移民がいることで、自国の文化を客観的に見ることができ、移民の母国の良いところを取り入れることもできる」という考え方、世界のリーダーであるアメリカの「他の国の模範」を目指す姿勢、複数の国から度々侵略を受けてきたポーランドの「相手をも尊重する」愛国心や「歴史を学ぶことは重要だが、過去ではなく現在、未来を見るべきだ」という思想などである。

後半では、かなり具体的で刺激的な提案が多く見られた。大連理工大学は、「日中韓大学生連合国際事業グループ」という団体を設立するという案を発表してくれたが、どのような事業を行うことが可能かということが細かく考えられており、一見無謀にも見える「学生主導で三国が共同事業を行う」ということが実現できてしまうのではないかと思うほどだった。釜山外国語大学の発表では、紹介されたアンケートの結果から、日本にいてはわからない韓国人の日本に対する印象を知ることができた。また、交換留学、共通教育、SNS によるキャンペーンなどが欧米の事例を踏まえつつ提案されていて、多角的な視点を持つことの大切さを学ぶことができた。同徳女子大学校の発表は、差別用語を知って使わないようにする、大学生主導で中高生に各国への正しい認識を教える、三国に共通する問題について共に考える、国際問題を政治的に見ずに人権問題として捉える、という四つの提案から成っていた。国際問題と聞くと、解決には国家レベルの事業が必要だと思いがちだが、これらの提案は日常に組み込めるようなことであったため、すぐにでも実践できることがあるのだと知った。そして日本の発表は、「シティズンシップ」をテーマとしており、会議や教育機関・情報機関の設立などを通して東アジア人としてのシティズンシップを育むことで、問題を解決しようという共通意識を持てるようになろうという提言がなされていた。現状では、歴史教育や報道の有り様がお互いの国に対する悪い印象を形成しているということを知ると同時に、東アジアの共生のためにこの二つを見直していくことが重要であるということを学ぶことができた。

全体として、相手の国の言語や文化を学んで相手に対する理解を深めることが重要だということ、時事問題や歴史を様々な視点から見る必要があること、自分や周囲の人たちの意識を変えようと努力すれば、私たち大学生も東アジアの共生に貢献できるのだということを実感できた 3 日間だった。

4. イベントとしてのフォーラムについて

良かったと思うのは、お互いを否定しない形で討論を進めることができたということだ。フォーラムが始まる前、私は、歴史認識などのデリケートな問題を話題にすれば、「そっちの国がこんなことをしたのが悪いのだ」「いやそっちの国も、……」といったように、排他的な発言の応酬になってしまうのではないかと危惧していた。普段から SNS などで、相手の国を徹底的に批判するような投稿を目にしていたからであったと思う。しかし実際に討論をしてみると、会場全体に「この国の人たちはこういう風に考えているのか」と、相手を理解しようとする雰囲気があるのが感じられた。振り返ってみると、招待講演で話があった「二分法ではなく、境界にとどまる」ということができていたのではないかと思う。

しかし一方で、課題もいくつかある。第一に、欧米を批判的に捉える視点が不足していたと思う。シンポジウムにおいては、EU が抱える人材流出などの問題やアメリカのポピュリズムについての質問が出されたが、その後の討論では、「エラスムス」などに代表される EU の諸制度が理想的であるとされ、「ヨーロッパは上手くいっているのに、アジアはこういうところができていない」というような発言が目立った。EU のような地域の共同体は、二度の世界大戦を乗り越えて共生のために設立されたという意味では東アジアの共生にヒントを与えてくれるが、上手くいっていることばかりではなく、現に欧州では反 EU を掲げる右派政党が台頭している。この点を踏まえ、「東アジアはヨーロッパからこのようなことを学べるが、ヨーロッパのこの部分はもっとこういう風にして応用した方がいい」というような考え方をした方が、より議論が深まったのではないかと思う。

また第二に、討論の議題が日韓関係に偏っていたということも挙げられる。折しも日韓関係が非常に悪化していた時期に行ったので仕方がない部分もあるが、例えば欧米の学生の中には南京事件を専門にしている人もいたので日中関係について話しても議論は深いものになっただろうし、米中の学生が参加していたのだから、両国間の貿易摩擦の問題から自国第一主義について話し合うこともできただろう。日程を工夫し、討論の時間をもう少し長く設けることができれば、これらも議題にすることができたのではないかと思う。

5. その他（ツアーの企画・運営について）

私はこのフォーラムで、期間中に行われた「スタディツアー」と「日本体験ツアー」の企画や運営を担当

した。ここではこれらのイベントの良かった点と課題について述べる。

良かったのは、特に日本体験ツアーにおいて、日本の伝統文化とポップカルチャーをバランスよく配置したコースを設定することができたと思うことだ。このツアーでは銀座とお台場の二つのコースを考えたが、前者では歌舞伎や和食といった日本の伝統に触れると同時に、博品館で日本のおもちゃを見ることにより、今日本で流行しているものを知る機会を設けることができたと考えている。また後者では、お台場のフジテレビで文化の最前線を、浜離宮で伝統文化を感じることができたのではないかと思う。

当日の状況に臨機応変に対応できたのも良かった。私が担当した日本体験ツアーの銀座コースでは、募集をかけた後から参加を希望した人がいたため、人数が予定より一人多くなってしまった。しかし予約した店に問い合わせたり、追加で参加した人には迅速に指示を出したりといったことができたため、予定通りにツアーを進めていくことができた。スタディツアーでは、当日の天候が悪かったため、それに合わせて行動することができたと思う。

一方で課題としては、第一に、コースを決める段階で時間がかかりすぎてしまったことが挙げられる。前年のコースが見学より体験を重視するようなものだったこともあり、初めはどのコースにも体験学習を入れようとしていた。その結果、予算が足りなくなりなかなかコースが纏まらなくなってしまった。最終的には体験をごく簡単なものにすることで予算を抑えることができたが、コースの最終決定が予定より遅れてしまったため、早い段階から前年にとらわれずに考えるべきだったと思った。

第二に、スタディツアーに対する目的意識が高かったとは言えないことも課題であると思う。悪天候のため仕方がない部分もあったが、スタディツアーで最後に訪れた横網町公園は施設をざっと見るだけで終わってしまった。敷地内には、関東大震災後の混乱の最中に虐殺された朝鮮や中国の人々を慰霊する施設もあったのに、特に説明もせずただ見るだけになってしまい勿体なかったと思っている。私たちが事前にもう少しこの公園について調べておき、天気が悪かったとしても昼食を食べたレストランで説明をするなどといった工夫をすれば、あの公園に日本と韓国や中国の学生が一緒に行くことの意味を皆が理解してくれたのではないかと思う。

6.東アジア・世界がともに生きることについて

フォーラムの締めくくりとして行った全体討論では、東アジア・世界の共生のために私たちができることとして、外国の言語や文化、歴史を学んで理解すること、フォーラムで得た経験を身近な人に広めていくこと、外国語で自国の文化を発信できるようになること、国内でも国際問題について話し合いをすること、などが挙げられた。私は将来文学を専門にしたいと思っていることもあり、文化、特に文学を通した相互理解というものに関心を抱いた。そのためここでは、この点についてもう少し具体的に掘り下げてみようと思う。

調べてみると、文化人たちによる文学を通した東アジアの交流事業は、既に存在していた。「東アジア文学フォーラム」が、その一例である。これは日中韓の文学者たちが集い、作品を読み合うことで交流するイベントで、2008 年に始まった。日中関係が悪化した時期に中断を挟みながらも 10 年続いており、前回の会合は昨年の 10 月にソウルで開かれた。この事業を特集した昨年 10 月 24 日の朝日新聞の記事によると、日本作家団の代表を務めた平野啓一郎さんはこのイベントについて、「物語は国民ではなく、一個人から始まる。韓国や中国に生きるひとりの登場人物に読者は共感する。（中略）観光で行くのとも違い、深い内面から理解しあえる。文学でつながる意味はすごくあると思う」と発言している。

無論、私たち大学生に、お互いの作品を読み合うといったようなことはできない。しかし私はこの発言を読み、文学作品に触れることを通して海外に生きる登場人物に共感することは、共生を実現していくためのきっかけになり得るのではないかと思った。私がこのフォーラムに参加して学んだのは、立場の異なる相手の考えを理解しようとする姿勢の重要性や、自分と相手との違いをことさらに強調することの危険性である。平野さんの発言にもあるように、本を読んで「中国や韓国に生きるひとりの登場人物に共感する」ことで、登場人物たち、ひいてはその国に住まう人々の置かれている状況やものの見方を理解しようと思うようになり、また住む国が違っても、人々は同じような喜びや悲しみを持っているのだということに気づくことができると私は考える。文学というのはいわゆる虚構であるが、だからこそ現実の政治的問題を抜きにして共感や理解を深めていくことができるのだ。そして、例えば私がある韓国人作家の小説を読んでその登場人物に深く共感したとしたら、私はその本を周囲に薦めることで、共感の輪を広めていくことができる。このような方法は誰にでも実行することが可能であり、容易である。

今回のフォーラムをいい形で終えることができたのは、政治とは無関係の大学生が、政治とは違うところで交流し、話し合うことができたからだ。同じように文化を通した交流は、それが政治とは離れた場所にあるからこそ可能性を持つ。まずはこうした形での交流を持ってお互いに共感を深めていくことが、東アジア・世界の共生につながるのではないかと私は考える。

＜参考文献＞

朝日新聞　2018 年 10 月 24 日朝刊 12 版 32 面「文学でつながる日中韓　東アジア文学フォーラム、ソウルで開催」

【参加学生レポート：海外学生】

今回のフォーラムで感じたこと

1.国際的交流的側面

今回のフォーラムでは韓国、日本だけでなくいろんな国の大学生も参加して色んな国の多様な視覚が分かっただけでなくいろんな文化にも接することができて良かった。

私は以前にもお茶の水女子大学とのセミナーに参加したことがあったが、その時はいろんな話を交わすことはできたけど日程が短くてとても惜しかったけど今度は日程も長いし多様なプログラムも用意されて色んな国の学生達と交流をすることがもっと円滑だった。

最も良かったのは、日本の学生たちと宿舎が同じで、プログラムが終わった後も色々な話を交わすことができたということだ。単純にお互いの国に来たことがあるかから深い話まで交わすことができた。友達の寮に遊びに行って、一緒にネットフリックスを見たり、好きな芸能人に関した話をしたり、お互いの文化差について話したりした。国は違うけど、やはり同じ世代だから興味を持っているところも一緒だし、好みもかなりかぶっていて交流するのがもっと楽しかった。そのなかで初めて会った時は日本人の友達だったら、ある瞬間からはただの友達になっていた。フォーラムが終わる頃には10日ぐらいの期間があっという間に過ぎたように感じられ、最後にお茶の水学生たちが映像の手紙が流れた時には感動した。韓国へ帰る日、宿所のドアに手紙がかかっていた時は残念だったし、もう帰ることが実感できず、涙が出るところだった。10日という短い期間の中でたくさんの思い出と深い友情ができて嬉しいし、これからもこの縁を続けていきたい。 また会う日を待ちながら。そして、このような民間交流がますます増えて、東アジア全体に平和と連帯が一日も早くできることを期待する。

2.言語使用・学習の側面

このフォーラムに参加する前から日本語で発表を準備しながら学習的にはとても役立ったと思う。どうすればもっと意味がよく伝えられるかといろんな単語を調べたり、辞書を引いて見ながら初めて知った語彙もあったからだ。 また、普段は日常生活でよく使う語彙だけを使うが、今回のフォーラムでは丁寧な敬語体の使用や、普段あまり話さないことに対して扱っているため語彙の使い方がもっと幅広くなったようだ。また、発表を準備しながらお茶の水大学の学生たちがこの言葉はこの文脈には似合わない、この単語がもっと意味伝達に良さそうだ、などの単純に辞書や本には受け取れないフィードバックをしてくれてもっと良い日本語学習になったと思う。

そして日本語会話の勉強にも役立った。韓国では日本語専攻とはいえ、日本語が使える環境が極めて限定的に、私の場合には日本語会話授業がなければ日本語を使う時間はほとんどなかった。しかし、今回のフォーラムではほとんどずっと日本語だけを使って最初は言おうとした言葉が日本語にすぐ出てこなかったりしたが、だんだん日本語を使うのが自然になって日本人学生を含め、他の国の学生たちとも活発に疏通することができた。

みんな国籍は多様だったが、日本語で疎通するというのが何か面白い経験だった。また、日本人だけでなく、他の国籍の学生たちもいたからこそ、その国の言語に接するのも楽しかった。私は2年前に中国に留学した経験があるので、その時の記憶を生かして中国人学生と中国語で話したり、ポーランド人の学生とは生まれて初めてポーランド語を習ったりしながらもっと親しくなることができてよかったと思う。言語学習が互いの文化を学ぶことで自然に繋がったのだ。

3.学問的学び

私も発表を一生懸命に準備したが、他の学生たちの発表を聞きながら、みんな本当に一生懸命準備したなと思った。特に釜山外国語大学の学生たちが発表した提案の中で、一緒に行動して連帯することがあったが、私たちが発表した内容にも似ている部分があり、やはり共にすることの重要性を認識しているのだという気がした。

発表が終わった後の質疑応答時間も非常に興味深かった。私に印象深かったのは、中国人学生の発表時間に日本人学生が中国人の日本人に対するイメージを聞いてみたことだった。中国人学生は、実は中国の若者は日本に憧れており、日本に否定的なイメージを持っているのは中高年層ということだ。そう言いながら、自分の母は自分が日本に行くと言った時、日本で殺されるかもしれないと言った話を聞いて、私は非常に驚いた。でも実は韓国と日本もあまり違わない気がした。韓国でも若者の中で日本文化、日本食を好む人が多く、日本でも韓国ドラマ、韓国料理、韓国ファッションなどにとても関心を持っている若者が多いからだ。特に、今回のフォーラムで会ったお茶の水大学生の多くがハングルを学んだことがあり、ある学生は韓国人

の私よりも韓国のドラマやアイドルについて良く知っているので驚いた。しかし、このような雰囲気の中でも、政治的、歴史的には非常に互いに否定的なイメージを持っており、特に年齢層が高くなるほど、その否定的な傾向は強くなる。この状況が私には悲しく感じられた。お互いに好感は持っているが、政治的、歴史的な理由で互いを憎まなければならない状況と、特に東アジアの若者は、この二つの側面がますます激しくなり、どちらを選ぶべきか葛藤する状況が悲しく感じられた。一例として、ある日本人生徒は、自分はＢＴＳが好きだが、以前は ＢＴＳのメンバーの一人が原爆写真のＴシャツを着た事件が起こった時は、依然としてＢＴＳが好きだが、韓国アイドルが好きとは言えない雰囲気だったという。そのため、今後、私たちの世代が大事だと考えるようになった。 過去には様々な理由でお互いに対して否定的なイメージを持ち、それが当然だと教育を受けたが、これからは単純にお互いを嫌悪し、否定的に考えるのではなく、積極的に交流して様々な問題を円満に解決できるように能動的な姿勢を取らなければならないと考えるようになった。

他にも台湾についてどう思うかなど正直気になったが、聞きづらい質問に対しても聞けて新鮮で良い席だったと思う。また、今後の討論でも東アジアの未来のために、多くの国が膝を突き合わせて一生懸命考えることも良かった。発表の時より活発にお互いの意見を自分の国の目線で色々と分けることができて良かった。 最も記憶に残るのは、提案の一つで国際結婚が出たことだ。その発想がとても新鮮で面白くてまだ記憶に残る。

4.イベントとしてのフォーラムについて

今回のフォーラムでよかった点は、いろんなプログラムが用意されていて、他の参加学生たちと仲良くなれやすかったし、東京のいろんなところを観光できてよかったということだ。特に江戸博物館と銀座ツアーで歌舞伎博物館は初めてだったけど、日本の文化と歴史に関していろんなことを学ぶことができて良かった。そして日本人学生と一緒にペアーになって観光したので、観光しながら、気になることがあったらすぐ聞くとすぐ答えてくれたので、疑問を解消することができた。そして、一緒にいる時間が多くて交流できる時間も多くて良かったし、単純に文化だけ交流する事ではないお互いに敏感に感じられる直説的な質問もできる席がめったにないので、このような場が大事に感じられた。

ただ、残念だった点は宿所と学校の距離があって行き来するのに疲れており、プログラム時間も予定より遅く終わることが多くて、その日のプログラムが終われば行ったり、私のような場合には体力が弱くて、別々にもっとどこに遊びに行ったり、交流するのが大変だった。そして思ったより別に時間を持たなければバーディと交流する時間がなくて初めて会った時、よそよそしい感じがして親しくなるのに時間がかかって残念だった。フォーラム前にバーディと親しくなるプログラムがあれば、より多くの交流ができるのでよかったと思う。

5.東アジア・世界がともに生きることについて

私はフォーラムに参加する前にはこういう考えを持っていた。東アジアが共に平和的に生きることは本当に実現できるのか、できるはずがない。とても否定的な考え方だった。テレビを見ると、中国とは環境汚染問題、日本とは数え切れないほどたくさんの否定的な内容が流れた。特に最近は、その傾向がさらに深刻になっている。PM2.5が深刻な空を見ながら、周辺の人々と自然に中国を非難したり、慰安婦や強制徴用に関する記事を読むと、日本に対する否定的なイメージは周りの人はもちろん、私も知らずにますます強まっていった。 東アジアはそれこそ近いが、遠い国だった。

そのため、今回のフォーラムの発表を準備し、半信半疑の気持ちになった。果して私たちの力でできることがあるだろうか。政治家でもなく世界的に影響を及ぼす人でもない、各自の国の大学生が東アジアの平和のためにできることが何だろうか。発表を準備しながら考え出した提案は大したものではない。事実上、政治家でもない大学生が東アジアでできることは多くないためだ。私たちが今回のフォーラムで提案したのは4つで、一つ目は、差別単語を使わないこと、二つ目は、中高生に東アジアへの正しい認識を持たせるための努力をすること、三つ目は、韓国と中国、日本が共通に抱えている社会問題を共に解決していくこと、四つ目は、慰安婦問題や徴用工問題などを政治的観点で見るのではなく、人権問題の観点で見つめることである。

この四つの提案はたいしたものではないが、遠くから見ると東アジア関係に種を植えたと思う。 単純にこの提案だけを見ると、これだけで東アジア関係が急激に好転したり、お互いの国が持っている問題が解決されるわけでもないが、そのように進む道の一歩になると考える。このような小さな動きから始まり、いつか花を咲かせる日がくると私は信じている。また、この発表を準備しながら、東アジア関係について深く考えることができたが、韓国、中国、日本の3国は、歴史的にも経済的にも政治的にも、様々な側面から見てもお互いにはがせない仲であることを改めて認識し、今後の東アジア関係の重要性を知るきっかけとなった。

フォーラムに参加する前の私は東アジア関係についてかなり懐疑的だったと考える。しかしフォーラムが終わった後、今の私は肯定的に変わったばかりでなく、今私たちが何をすべきか探るようになり、今私たち

世代に対する責任感と民間交流に対する必要性と重要性を認識するようになったという大きな変化が起きたと思う。

我々は共に生きている

1.国際的交流的側面

今回のフォーラムを通して色々な国から集まった学生たちと会い話を交わしながらとても多くのものを学ぶ事ができた。皆生まれた国が違う、育つ中で学んだことが違う、生きていく中で身についた文化が違う、だから互い知らないものや誤解していたものが多かった。気になるものやわからないものを聞き合って話し合いながら自分がとても無知であったこととまだまだ知らないものがたくさんあるだろうということに気が付いた。そしてこのような機会を得ることができてとても良かったと思った。自分が今回のフォーラムに参加していなかったら今よりももっと無知でいただろうし自分の中で誤解を納得したまま他の国のことを見て語っていただろうと思うと、交流をする事がどれほど大事かを実感することができた。

知らなかったものを知っていく、知識が増えていくというのもとても勉強になったが、自分が住んでいる韓国のことを他の国の人たちはどう思っているのか、韓国のことで何が気になっているのかを聞くことができて国際関係などについて韓国のこれからへ繋がる手がかりを摑むことができた気がする。

韓国や世界で話題になっている問題について今まで私は同じ国に住んでいる人としか語ったことがなかったと思う。そのせいか似たような考え方を持っている人が多かったし少し異なるとしても韓国人としての視点から離れなかったものの、全く違う国で生きてきた、韓国人とは程遠い考え方や視線を持つ人たちと話してみると自分の視点からは見ることができなかったことを自覚されて思考が広がるように感じた。

語る必要はあると思うが、「友達との仲が悪くなるかも知れない」、「いきなりこのような話を申し出たら喧嘩を売っているように見えるのではないか」なとかの不安から日本や他の国友達との話の中で歴史的問題、社会的問題に対してはあえて触れないようにしてきたと思う。そのゆえ、私は今回のフォーラムで初めて色々な国の人たちと敏感な国際的問題に対して真剣に話し合ってみた。元々そのような話をするため世界や国際観関係などに興味を持っている人たちが集まった場だからというこものが大きく影響したと思うが、話し合ってみると思っていたより皆が問題となっている状況について確かに理解していて、互いの国の間で問題や騒ぎを起こすような発言・行動などがそれぞれの国でどのように受け入られているかを確かめることができた。とある行動や発言の問題になるのはお互いの文化や考え方の違いによるものもあって、その行動や発言を受け入れ方が違うということ、そしてその違いをお互いが理解できていないという事を改めて知った。問題の解決法について色々な意見を持つ人たちと話し合ったり考えたりすることができてとても有意義であったし、問題に対する態度や理解度をより深めることができたと思う。

今回のフォーラムを通って交流の重要さ示され、話し合いの力を知ることができたと思う。

2.言語使用・学習の側面

韓国で住みながら韓国語以外の言語を日常生活で使うことはあまり多くないと思う。日本語の勉強をする時、日本語を使う何かの活動をする時、日本の人と話す時くらいだろう。できれば多くの機会を作ろうとしているが色々な活動をして、勉強をしても韓国ではわからない、日本でしか学べないものがたくさんある。だからこそ日本に来て日本語を母国語として使っている人と話すと学ぶことがとても多い。

韓国語と日本語は同じく漢字の影響を受けた言葉として書き方や読み方は違うが似たものも多いと思う。漢字語を使うとして意味が伝わらない訳ではないが、それよりもっと日本で多く使われている日本語の表現があったりする。そのような点とか間違った日本語を使ったとき、それを誰かに直してもらうことでもっと使い方が上手になっていくと思うが、今回フォーラムにてはその効果が倍加されたと思う。

自分は自分がいつも使う単語や表現を無意識的に使ってしまうし思い出してしまう。だが今回のフォーラムでは自分以外でも日本語を勉強している人がたくさん側にいて皆がそれぞれ使う単語・表現などが違う。そのため色々な場合での日本語を経験できたし、皆の使う日本語と自分が使う日本語を比べ見ることができて言葉の使用・学習において一人では決してできなかった勉強ができたと思う。

3. 学問的学び

先生方からのご講演一つ一つとても重要で大事なものを学ぶことができて共に生きることとは何なのかを考える機会となった。

森山先生からはより良い世界のため、共に生きるため、自分を社会をクリティカルに見つめ多様な価値観を認める視点を持つことを、小松先生からはベルギーとカナダの例を挙げ言葉の教育がナショナリズムを超えたお互い理解やインターカルチュラルなシチズンシップの形成、そして共生のために果たす役割と重要性を、山本先生からはグローバール化とローカル化が同時進行していく中で、その構成人たちの間で感じる同質性と多様性に対して二元法で考えるのではなく自分自身に対し緻密で洞察力のある創造的な理解の下で共に生きることとは相手がいなければできなかった形で何かを達成する事だということを、王先生からはメディアを通してだけ世界を見るのではなく、直接自分で確かめること、そしてそのため色々な人たちと連携・協力関係を築くのが重要だということを教わった。

シンポジウムでは皆の発表を聞きその内容に基づいて共に生きるに私達はどうするべきかを話し合うことができた。とても多様な意見を聞くことができたしそれを共有することができて一二の人や国の集まりではできない発表とディスカッションだったと思う。

共生のために私たちはどうすればいいのかに対して、アメリカのダッフィさんは国際問題に関心を持ち、他の人の意見も聞き入れ自分の考えを深めることと国際関係や言葉を学ぶことを、ニュージーランドのフィリンさんとチューナーさんは仕事、教育、文化の３つの分野を中心に他の国のことを受け入れる準備を行い、共同体意識を育てることを、中国の劉さんと周さんは経済の一体化、共同体意識を育てるための教育、日中韓大学生連合国際事業グループを作ることを、プサンのベクさんとソンさんは交換留学の活性化、共通した教育を行い共同意識を育てることと SNS を利用しキャンペーンを行うことを、日本の酒井さん、榎本さん、大山さんは多様性を認めながら、同じ市民として平等を求めるシティズンシップが共生の鍵であると東アジア共生かいぎの開催、教育機関の設立、正しい情報機関の設立の提案を、そしてポーランドのアリシアさんとマルチナさんは過去の戦争や争いが現在の国際情勢に影響を及ぼしてはならないと過去ばかり目を向けるのでなく将来のことを一緒に考え築いていく必要があり経済協力と個々でなく全体を見て共同意識を持つことを提案してくれた。

その内容を持って行ったディスカッションでは皆と色々な歴史的、社会的問題に対して意見を交わした。戦争の下で行われた犯罪に対して真の謝罪とは何なのか、現状を皆どう思っているか、問題とされている理由は何だと思うか、これから共生するために私たちはどうすればいいのか、様々な話題で真面目に話すことができた。

私は個人的にポーランドの意見がとても印象に残っている。自国の事例を例え、似たような状況下でも東アジアとは違う方向へ進んだケースがあることを知った。これからのために、戦争下で起きたことに関して、謝り許しあって、東アジアの国々より先に一歩進んだと思う。前までは心のどこかで本当に韓国と日本が分かり合える日が来るのかと疑っていたが、ポーランドの発表を聞き、皆と話し合っていく中でいつか両方が本心で謝罪をし、それを受け入れる日が来るだろうと強く思うようになった。今はどちらも自尊心を先立てて言うべき言葉を言わず取るべき行動を取らず顔色をうかがいあっているがいつかはきっとポーランドとドイツのように、ヨーロッパの国々のように仲良くなれるだろうと思う。今はそのための道を作っていくべきではないかと思った。今回のフォーラムのおかげでそのような考えを持つことが可能になって嬉しく思う。

4. イベントとしてのフォーラムについて

今度のフォーラムでよかった点・達成できた点といえば、自分だけでなく色々な環境で生きてきた人たちと話し合って、彼らの視線での意見も聞くことができて前よりもっと多様な視点でものを観れるようになった。様々な分野にわたって自分の国のこと・他の国のことを知り合う時間が十分にあって知らなかったことをたくさん知ることができたし、誤解していたものや疑問に思っていたものを確かめることができた。色々な国の言葉で簡単な表現を知ることができたし、日本語に対しても一人ではできなかった勉強ができた。共

に生きることは何かをここまで真剣に考えたことはなかったと思うが皆と話し合い、前よりもっと「世界」に、「共に生きる」というものに興味を持つことができた。そしてこれからもその様なものを一緒に話しあえる良い仲間ができたと思う。フォーラムの限界・改善点といえば、シンポジウム進行において Q&A などで目立った言葉の違いによる会話が不便だった点が少し残念に思える。

5.東アジア・世界がともに生きることについて

環境も文化も言葉も歴史も全然違う我々だが、同じ地球という惑星に住んでいて、同じ世界の構成人である。私は東アジアの人たちも、世界の人たちもすでに共に生きていると思う。ただ、地球という大きい世界は、それぞれ違う特徴を持つ国々に小さく割れていて、自分が育ち住んでいるその地域的範囲だけを思い個々の利益のため意思や思想のため他何かの理由で喧嘩をしたり、それによって誤解が発生したりして、皆が共に生きているということを忘れていると思う。だから皆が大きい意味で世界を考え、同じ世界で生きていることを自覚すれば、東アジアが、世界が共に生きていけるのではないかと思う。そしてそのためにお互いのことを知っていくこと、交流することが大事だと思う。小さき世界ではなく大きい世界を見るためには、他の国々のことを確かにわかって、経験し学んでいくことが必要だと思う。他の国のことを理解し、受け入れていくなら自分と違うところが多くあるとしても、同じ世界を共に生きていく感覚を持てると思う。そしてそのような感覚を持ち、お互いのことを見ることができれば今各国が抱えている過去・現在の問題に対して良い解決法が見つかるのではないかと思う。

私は人が生きていく中で環境というものがとても大事だと思うしそれを変えられる力を持っているのは教育だと思っている。そのような考えから、私は人たちが世界の皆は共に生きていることに気付かずに生きてきたとしても、教育活動を行ったり国際的な交流の場を持つようにしたりしていきれば良いのではないかと思う。

私は今回のフォーラムで色々な国から集まった学生たちと会い話し合っていく中で皆と共に生きていると感じた。全員が別々のところに住んでいて、違う言葉を使って、違う環境で育って、今までの生きてきた文化の中で同じ点が一つもないとしても私は彼らと同じ世界に存在している、彼らと共に生きていると感じた。そしてまたこれから皆が違う生き方をしていくとしてもそれは変わらないと思った。

国際学生フォーラムが持ってくる未来の変化について

1. 国際的交流的側面

まず、国際学生フォーラムという名前に似合って、世界各国の大学生たちとであって、議論して話し合う良い機会でした。普段、出会うことがなかったニュージーランドやポーランド、アメリカ、中国、日本の大学生の考え方や意見を聞くこともできたし、彼らを理解し、お互いが持っていた誤解を解消することができました。

未来の国際的交流は若者である大学生に掛かっています。彼らにであって、議論ができる今度のフォーラムは国際的交流的側面で肯定的な結果を持ってくると思います。

2. 言語使用・学習の側面

今回の国際学生フォーラムはシンポジウムや講演などすべてのプログラムが日本語や英語で行われました。そのおかげで聞き取りの能力はもちろん、自分の伝言したいことを分かりやすい日本語で伝えることができるようになりました。

また、お茶の水女子大学の学生と外国からの学生との１：１バディプログラムも日常生活でよく使われる会話の能力の向上にも良かったです。学校の会話の授業とは違って、24 時間続けて日本語でコミュニケーションをしたおかげで、全体的な日本語の能力が目に見えるほど上達するようになりました。

3. 学問的学び

一番勉強になったのはやはり世界各国の皆さんの発表を聞いて、議論を行ったことです。理論を学ぶことでとどまらず、実際に議論をしながら異なる文化を持っている人を理解し、受け入れることができるようになりました。

カンタベリー大学の発表で、異なる文化を持っている民族を理解して、受け入れる方法を学びました。ワルシャワ大学の発表では加害国家を許して、もっと良い未来のため、お互い協力することが重要だと教えてもらいました。韓日の関係もポーランドとドイツのようにお互い協力して、東アジアの明るい未来を作ってみたら良いと思いました。ヴァッサー大学の発表は世界で生まれている様々な問題をリーダー国家として解決することを学びました。大連理工大学の発表を通じて、東アジアの未来のために、若者の大学生たちがお互い協力することができる具体的な方案について考えてみるようになりました。釜山外国語大学の発表を聞いて、東アジアが現在側面している問題とその解決のため国家間の妥協と譲歩が必要だと考えるようになりました。

先生方の講演は自分の考え方を改める有益な講演でした。ベルギーという一つの国の中で使われている様々な言語とそれによる葛藤の発生が一番印象深かった。また、一家庭の中で生まれる言語使用の混乱や言語が一人のアイデンティティの確立に影響を及ぼすことが印像的でした。

4. イベントとしてのフォーラムについて

今回のフォーラムで一番良かったのは学生たちが大部のプログラムの運営を主導したことです。一から細かいことまで学生さんの意見が反映していて、真の学生フォーラムだと感じました。そして、この影響を受けて自分も世界学生の交流に積極的に参加したいと思うようになりました。

また、両国や銀座、お台場にスタディーツアーに行って直接的な勉強ができたのも良かったです。特に両国の江戸東京博物館に行って、昔の東京と現在の東京を比べてみることは本当に記憶に残ります。

ただ、フォーラムのシンポジウムの期間が少し短くて、議論する時間が足りなかったです。三日に増やして、もっと長い時間議論したいと思いました。

また、EU の参加国がもっとあって様々な意見を聞きたいとおもいました。特に日韓関係と似ているドイツ・フランスの学生さんの意見も知りたくなりました。

5. 未来のための歴史問題の解決

韓国と日本の間にある過去史イッシュが引き続きてきた根本的な理由は 1965 年に締結された韓日条約が過

去史の処理を徹底に扱っていないまま、便利注意的政治妥結を目的としたことである。日韓の間の過去問題に関する対立の悪循環を繰り返すことから切り抜けるため、基本条約体制の考え直すことが必要だと思います。

しかし、条約の改正は一つの国家の一方的な主張と要求によって行われることは不可能です。従って、日韓が続いて交流しながらお互い納得できる妥協点を探さなければならないと思います。今回の国際学生フォーラムのように若者たちも相対国とのコミュニケーションをしながら自分たちができるものを探して、積極的に行おうとする能力が必要だと思います。

6.東アジア、世界がともに生きることについて

長い間、仲が良くなかったドイツとフランスだったが、半世紀前からパートナー関係を志向してきた事例を見習わなければならないと思います。東アジアのように隣接の国の国民が真の和解のためには、長い歴史で形成されたお互いに対する偏見や固定観念を解決しなければなりません。 そのため、まず偏向した歴史のバランスを探す能力が必要です。隣の国の国民たちが相対国と自分の国が文化のコニュニティーであることを気づき、同じ東アジア人として帰属感を持つことからお互いの和解と理解が始まる。

私たちの大学生も自分の国を優先するナショナリズムの考え方よりもお互いを理解しようとする和解と理解が必要です。

＜参考文献＞

유병용（2005）「한일협정과 한일관계의 개선방향」『한일역사 공동연구보고서』6 号 38-40
주경철（2007）「숙적에서 동반자로」『독일과 프랑스의 역사적 화해』5-8

国際学生フォーラムで得たもの

1.国際的交流的側面

私にとって今回のフォーラムは日本だけではなく、西洋の文化圏の学生たちとも交流する機会があって、とても興味深かった。私はシンポジウムやスタディーツアーのスケジュールが終わってからの時間も、留学生やお茶大の学生たちと時間を過ごし、色々な話をした。お茶大の学生たちとの交流を通して、共感を覚えることができたことが印象的だった。韓国の文化と日本の文化は似たような部分が多くあると言っても、明確な違いが存在する異文化である。また、現在に至るまでも韓国と日本は様々な葛藤問題を抱えている。それにもかかわらず、私は日本の学生たちと話をするとき、まるで同じ韓国人と話しているような、共感を覚えることができた。そして、私は今回のフォーラムで初めての西洋の友だちができ、その友だちとの交流を通して、新しいことを学び、また、今まで当たり前だと考えていたことについて、考察する機会を持つようになった。下記に、それらについてより詳しく述べる。

日本の学生たちとの会話を通して、現在、日本と韓国は文化交流が活発に行われていることを感じた。K-pop や J-pop の話で、共通の関心事を探すことができ、すぐに気まずさを解消することができた。そして、私たちが共感を覚えることができたのは、この大衆文化の話だけではない。社会問題の話をするときもお互いに共感を覚えることができた。社会問題の話題の一つであるフェミニズムの話をしたとき、私たちはお互いの社会でフェミニズムがどういうふうに広がっていっているのかを知りたがった。それで、私たちは自分が読んでみたフェミニズムの本を勧めたり、関連記事を共有したりした。このような過程で、お互いの文化は少し違うが、似たような社会の中で生きていく女性として、韓国人と日本人が共感することができるという事実が印象的だった。

ニュージーランドの学生との交流では、「多文化」ということについて考察する機会を持つようになった。私は今まで「多文化」ということを概念的に理解していた。それについて深く考えたことがなく、実際に多文化社会で住んだこともなかった。そして、ニュージーランドの学生と話し合うとき、こういう話をした。「人間関係を形成するとき、相手の国籍を気にするかどうか」の話であった。その学生は、相手の出身国を気にせず、人間関係を構築すると言っていた。わたしはこの話を聞いて、他国の人を対する自分の態度を振り返ってみた。つまり、文化の違いを認め、包括的態度を持つべきということを学んだのである。

上述の通り、私は様々な国の人と交流することで、文化的背景が違うにもかかわらず、お互い共感を持つことができるとわかり、また普段、私が無意識に感じていたことを深く考えることができた。

2.言語使用･学習の側面

フォーラムの初めに各国の留学生と自己紹介をしたり、会話をしてみたりしたら、皆の日本語が上手で、これからのコミュニケーションに問題はないだろうと思っていた。しかし、その学生たちと政治や歴史などの難しい話をするとき、日本語でコミュニケーションをすることに限界が感じられた。このような言語の障壁を感じたとき、学生たちは日本語と英語を混ぜてコミュニケーションを行った。が、普段、英語の会話に難しさを感じていた私は、英語を使ってコミュニケーションをすることがほとんどできなかった。もちろん、私が英語の会話ができない際に、英語の上手な同期に通訳をしてもらった。しかし、英語圏の学生たちと友だちになったのに、通訳がないと様々な話をすることができないのが惜しいと感じ、これからもっと英語の勉強を頑張ろうと思った。

英語が話せなかった分、ちゃんとした日本語で話せたのかというと、それでもなかった。日本語の会話をするときも、日本語で説明できないことがあってもどかしかった。が、自分がどのような状況で、日本語を使うことに難しさを感じるのかを把握することができた。私は会話の締め切りをすることが苦手で、また言葉をにごしてしまう習慣があるのが分かった。相槌の打ち方も学校で何回か勉強したことがあるのに、実際の会話で使うことが難しかった。

思ったより日本語で話すことが難しくて、自分のことを残念だと思ったが、今回のフォーラムは私にとって、言語能力のどの部分が足りないのかを分かる良い機会になったと思う。また、英語圏の学生たちと友だちになって、それが私にとって英語の勉強のモチベーションになり、これから英語の勉強を頑張りたいと思うようになった。

3.学問的学び

今回のフォーラムの講演で一番印象に残ったキーワードは「ナショナリズム」である。先生たちの講演を通して、ナショナリズムと愛国心の違いを学び、身近なことからナショナリズム的なものを考えてみた。意外と私の周りからナショナリズム的なものを探すことは簡単であった。

例を 1 つあげてみると、韓国人は自国の社会に様々な不満を持っているとしても、他国の人から韓国社会の問題点を指摘されると、腹を立てることが少なくない。また、普段は自国について「Hell 朝鮮」と言ったり、「脱朝鮮したい」という言葉を用いる反面、ワールドカップのサッカー試合があるとき、韓国のチームを応援する人も結構いる。韓国の社会で生きていくのが大変だとしても、幼いころからの愛国心（ナショナリズムの傾向であるが）の教育を受けたため、このような現象が起こるのではないかと思う。もちろん、この例にはナショナリズム以外のものが作用しているかもしれないが、ナショナリズム的なことも影響されていると思う。

シンポジウムではニュージーランドの発表が一番印象に残っている。ニュージーランドの学生たちが発表で提示した提案を、私が準備した発表の内容と加え、新しい提案を考えてみること等、色々な提案を考えてみた。私は東アジアの３国が連帯を構築するために、認識改善に力を注ぐ必要があると思い、その提案として「差別単語を使わないこと」を提示した。差別単語を用いる際、悪意を持っていないとしても、差別単語を用いることだけで、相手の気持ちが悪くなるので、意識して使わないようにするということである。これらを実践するために、ニュージーランドの学生たちが提案した「共同体意識を持つこと」に同感する。日中韓の各国の人々が他人ではなく、共同体という意識を持てば、無意識的な差別単語の使用を減らすことができるのではないかと思う。

私が発表の際、提案した二つ目の提案は「東アジアに対する中高生の正しい認識を形成すること」である。青少年期に東アジアへの偏狭な情報に触れると、偏見が生じやすいと思う。それを改善するため大学生が中学･高校を訪問し、クラブの活動として、色々な活動をすることで、学生たちが東アジアへの肯定的な認識を持つように努力することを提案した。この活動と共にニュージーランドの学生たちが提示した「多文化が体験できる祭り」もよい提案だと思う。私が発表の際に提案した活動は学生のみを対象としているが、多文化の祭りは町で行われる活動なので、もっと幅広い人々を対象として認識改善を実践することができると思う。

上記のように、私は今回のシンポジウムを通して、東アジアの平和のためにできることを、他国の事例と共に考えることができた。

4. イベントとしてのフォーラムについて

今回のフォーラムは本当に時間が足りないくらい楽しかった。楽しくて時間が足りなく感じたのは事実であるが、フォーラムがもっと長い期間にかけて行われたらよかったと思う。費用が少しかかるとしても、東京から離れている地域に、フォーラムに参加した学生たち全員が、一緒にスタディーツアーに行ってもよかったと思う。私が 1 年生のとき参加した日韓交流セミナーでは日本の学生たちと草津に行ったことがあるが、一緒に同じ部屋で泊まったり、観光したりしたのが本当に楽しかったので、今回そのような宿泊活動がなかったのが少し惜しいと思う。が、全体的にフォーラムに参加したことを満足している。

5. 私にとって今回のフォーラムとは

私は大学生になってから、他国の学生たちとの話をすることによって、その文化を間接的に体験する機会を求めていた。しかし、私には今まで日本人以外の外国人と交流する機会がなかった。それで、私にとって今回のフォーラムは本当に貴重な経験であった。私が好きな言語である日本語を用い、様々な国の学生たちと友だちになり、色々な話をすることができたからだ。また、私は普段日韓の関係に興味を持っていて、私が考えたことを日本の友だちに聞かせたり、日本人の友だちの意見も聞いたりしてみたかった。フォーラムが終わった後も、仲良くなったお茶大の学生たちと日韓関係について話すことができた。また、帰国してからもメッセンジャーを使って連絡することができ、本当に嬉しいと思う。10 日間の短い時間だったが、その時間を通して活発な交流をすることができて、非常に良かった。

6. 東アジア･世界がともに生きることについて

東アジアの３国は今まで、自分の考えを固執してきたと思う。それで、これからは東アジアの間に政治的な葛藤が起こった際、自国のマスコミだけでその情報を受け入れるのではなく、相対国のマスコミの情報にも触れてみる必要があると思った。相対国の立場で自国を見つめると、私が考えていた自国とは違う面が見えてくるのではないかと思ったからだ。それで、私はこれから、韓国が中国や日本と政治的に対立し、韓国のマスコミの情報だけで相対国の主張が理解できない場合、相対国のマスコミでは該当の事件をどのように扱っているのかを見るように努力していきたいと思う。そして、東アジアの平和のために日中韓が用いるべき態度は「協力する態度」であると考える。東アジアの間には、現在に至るまで様々な歴史問題や政治的問題等で葛藤が起こっているが、３国がお互いに対立する態度を用いると、国際関係は冷え込むばかりである。３国は隣国であり、現在も多くの影響を与えている。またこれからも３国はもっとお互い影響を与えていくからこそ、協力する態度は重要だと思う。

国際フォーラムを通じた東アジアの連帯

1.国際的交流的側面

今回の国際フォーラムに参加する前から最も期待になった部分があっていた。それは今回のフォーラムは、韓国と日本だけではなく、地理的にかなり距離があって文化的にも多くの違いがある国が参加する国際フォーラムという点で他の一般フォーラムと違いがあっていた。

1年前に関西の語学堂に交換留学をしたが、私にとって、あの時が色々な国から来た友達に会うことができる最初の機会だった。その時は、アメリカ、イギリス、スペイン、フィンランドから来た友達と交流し、初めて他の文化を接して理解してみて違いについて考えて見ることができる機会だった。この過去の交流経験をもとにして、今回のお茶の水大学で行われた国際フォーラムで、出会った様々な国の友達によりオープンなマインドで先に話をかけたり交流したりすることができてよかった。また、前に会えなかったもっと多様な国の同じ年頃の友達と交流しながら、フォーラムのテーマの内容はもとより、文化や日常生活の話しも共有することができる貴重な時間だったと思った。

2.言語使用・学習の側面

私は韓国では日本語を主に本で勉強してきた。会話の授業があったとしても、授業時間の75分のみ使用する機会がまったくないので、いつも惜しかった。

今回のフォーラムを通じて、日本語で日本人の友達と話して親しくなる機会があってとても良かったと思った。何よりも、同じ年頃の日本人の友達がよく使う言葉とか発音とかもっと語学的な面でも学ぶことができて良かった。そして、1年前には関西地方で交流したけど、今回の交流は関東地方でした交流だった。韓国も地方ごとによって、少しずつ言葉の語尾などが少し異なる部分があるが、日本も地域によって、少しずつ違いがあると感じた。日本語を専攻している外国語学習者の立場として、面白くてそんな部分についてもっと研究してみたいと思った。

3.学問的学び

フォーラムのテーマは確かに東アジアの連帯だった。しかし、東アジアが連帯するためにできることについて考えてみると、ただ東アジア三国内で解決策を見つけなければならないかという疑問ができた。

今回のフォーラムでは、東アジア3国の韓国、日本、中国、そして地理的にかなり遠い距離であるポーランド、アメリカ、ニュージーランドから来た色々な国籍の友達と一緒に話を交わすことができる時間を持った。各国ごとに歴史も違って、文化が違うゆえに各国が持っている葛藤も違った。そのような世界的な葛藤の話を聞きながら、そのような葛藤が起きた時、その国はどうやって対処したか、またどのような考えを持っているのか聞きながら比較してみることができた。そして、比較して得られる学ぶ点を各国の状況に合わせて適用できるかどうかについても考えてみるようになった。

4.イベントとしてのフォーラムについて

今回の国際フォーラムは、予想したよりもスムーズによく進行したようですごく満足した。日程も無理しないで余裕のあるように適当に進んでいたと思った。

そして何よりも、討論の以外にも様々な日本文化を体験することができるツアー機会が多かった点が本当によかった。色々な学校が参加するだけに、人数も本当に多かったが、ツアーをお台場、銀座このように2つに分けて、適当な人たちが、そして、本人が行きたい所を選択して柔軟に進められた点が満足できた。

また、フォーラムに参加する前から一番良かったと思った点は、すべての学生たちが日本人のバディがいることだった。フォーラムに参加する前、知らないことが多くて心配をたくさんしたが、お茶の水大学の親切なバディからフォーラム来る前まで連絡ができて、発表準備の関連か始めて日本到着後の全般的な生活情報も聞くことができた。また、日本に到着してからも東京駅までお迎えに来てくれた親切なバディのおかげで、迷わずに寮まで無事に行くことができた。

5.その他

6.東アジア・世界がともに生きることについて

フォーラムを通じて意見を交わしてみた結果、それぞれの国ごとに事情が違っており、イシューになる問題に対する各国の国民の考え方や観点も違ったというのをわかった。東アジアで起きた衝突は、一国には、ある行動が文化的な側面で一つの慣習だったら、他の国には、同じ行動が禁止となっている行動だと考えられているなど問題が起こる原因が異なるという点からスタートになっているようだと気がした。

東アジアの連帯に向けては、表面的な取り組みや解決を進めることがなく、まず各国の文化と立場をまず理解することから始めなければならないと思った。それから誤解が生じる部分に関して、適切な謝罪と配慮、そして理解をしながら彼らの立場で共感をしてくればはるかに合意点を見出すことがさらに容易になると思う。

また、東アジアの連帯に向けたことだとしても、東アジア国内だけで解決策を見出すことではなく、ほかの地域の国の成功した事例を見て解決策を探すことにとって参考したらいい方法を見つけられると思った。

10 日間の国際学生フォーラム

1. 国際交流的側面

4 年間フランス語を専攻し、日本語を第 2 専攻として勉強してきたが、日本での半年間の交換留学を除けばいろんな国の人に会える機会が全くなかった。今回の国際学生フォーラムをきっかけにその理由が何かについて考えることができた。答えは私の「英語の実力」だった。 自ら英語が足りないと思って外國人にあったら避けるようになり、積極的に交流する機会がなかったようだ。しかし、10 日間のフォーラムを通じて英語だけでなく他の言語を積極的に活用できるきっかけを作ることでもっとお互いの言語と文化に関心を持つようになった。 国際交流において言語を活用したコミュニケーションが重要な要素といえるが、それより重要なことは他の言語と文化に対する興味と積極性ということを感じた。

2. 言語使用・学習の側面

国際学生フォーラムが行われた所が日本であったため、ほとんどのコミュニケーションは日本語で行われた。日本語を第 2 専攻とする私にとって 10 日間日本語を使うしかない環境が作られた分、大いに役立った。また、母国語ではない日本語を通じて韓中日の関係と葛藤はもちろんのことアメリカ、ニュージーランド、ポーランドなど多くの国の状況について新たに学ぶことができたのは非常に意味のあることだと考える。

3. 学問的学び

葛藤が繰り返される東アジアを生きていく韓国人として、恥ずかしくも東アジアの関係について真剣に考えたことはなかった。それで私に今回の 10 日間の国際学生フォーラムは大学 4 年の中で一番意味ある時間であり授業だと言える。韓国人が何に基づいて日本と中国に対して否定的に考えざるを得ないか、そして東アジアの真の和合のための道をそれなりに模索しながら、一人の韓国人ではなく一人の東アジア人の視覚で考えることができるようになった。 また、絶えず議論の的となっている日本との慰安婦問題、強制徴用問題についても単純に韓国と日本の歴史問題として見つめるのではなく、帝国主義が生んだ人権問題として見つめるべきことが非常に心に響いた。そして母国の韓国もつらい歴史があるだけ、過去の歴史を忘れてはならないが、未来志向的な態度で東アジアの問題を考える必要があると考えるようになった。

4. イベントとしてのファーラムについて

10 日間スケジュール通り進められた。朝早く起きるのは大変だったが、発表も東京 1 日ツアーもそして開会式、閉会式も楽しかった。日本人学生は内向的で積極的でないことをたくさん耳にしたが、みんな交流に積極的で責任意識が強いということが感じられた。また、フォーラムだからといって重くて固い雰囲気のフォーラムではなく、自由で皆が楽しめる穏やかな雰囲気のフォーラムでとてもよかった。

5. その他

6. 東アジア・世界がともに生きることについて

他の学生たちの発表を聞きながら最も共感したのは差別用語を使わないということだった。 韓国人として韓国に日本人、中国人、そして西洋人を差別して呼ぶ用語が日常生活の中でどれだけ多く使われているかを知っているからだった。そして、そんな差別用語に対して無感覚であった自分を反省するきっかけにもなった。

また、多くの戦争で何度も国を失ったポーランドだが、それにもかかわらず、未来を見ようとするポーランドの態度は感動的だった。母国である韓国もポーランドと同じ立場である。まだ、解決されていない過去の歴史で葛藤が繰り返されている。もちろん、歴史を忘れてはいけない。しかし、過去の歴史に偏って未来を見過ごしてはならない。特に、日本に対して否定的な認識を持っている多くの韓国人が慰安婦問題、強制徴用問題と歴史的問題を問題にした。(中国の場合は微細ホコリ問題)このようにある国の断面的な部分を見て、その国のすべてを判断してその国の人に対して勝手に決めつけることは偏見を生みかねない。真の意味での東アジアの和合のためにはもう少し客観的な思考が必要だということを感じさせられた。

The 8th international forum 2019

On 7-16 February the Ochanomizu University organized the international forum, "災害から連帯へ－グローバルなネットワークの構築にむけて", to discuss how East Asia can work together like EU except for historical and government issues, and on how students from other countries suggest good idea based on their cultures and history. Topic was quite difficult, so it was hard to give an opinion and also draw the basic outline. But when I saw the presentation of the other students, I realized that I didn't have to worry about nothing. Despite the language barriers, every student did their best. And also, we discussed more in deep about sensitive issues. Honestly, I was afraid of talking about history issues. But through this forum, it was a good chance to know Japanese ideas and also the reason.

East Asia has many problems that must be sold, but people these days just try to avoid to talk about it because of the cultural exchanges. It is good to accept the different cultures, but we also have to see the core of the matter not only the outside. We can't solve any issues without this. That's why this kind of activity is necessary to all countries.

This forum was literally interesting and instructive than I thought. We have different cultures and history, but I felt that everyone wishes one thing. Even we have a trouble between the other countries, we realized that we can get through all those things and also can take the lead as students.

I think this forum was first step in a process that has the potential to shape future and ways of making it reality. I have learned and experienced a lot under this program. I'm really thankful to the Ochanomizu University teachers, staffs and students in every point as well as forum.

国際フォーラムのレポート

1.国際的交流的側面

今回のフォーラムで、たくさんの違う国の学生たちと交流できました。私は違う文化圏の人びととの価値観の違い及びその違いを越えて交流することの有り難さを感じました。

以前、私は中国人としての視点だけで世界中の物事を見て考えていました。台湾問題など私たち中国人にとって極く紛れもない事実においてさえ、他の国の学生の見解との間でそんなに大きな差があることは驚きました。また、東アジアの一員として、いつも分離的な視点で東アジアの問題を見ていました。アメリカやヨーロッパの学生と話したら、全く別の開放的な視野で東アジアの現状を考えられるようになりました。たとえ交流の中で意見が噛み合わない場合が多くても、真摯に相手の考え方を聞いた後、自分は大いに勉強になったとつくづく思いました。

私たちは誰もが孤立の個体ではありません。違う価値観の人と交流して、お互いに長所を取り入れ、短所を補い合ってはじめて、我々は前に進めるのです。

2.言語使用・学習の側面

私は日本語専攻です。これまで日本に来たことがないから、自分の言語能力は交流の支障になるのではないかと心配しました。しかし、ここでの体験は私の考えを変えました。交流の意欲さえあれば、言語のレベルはそんなに大きな問題ではないと実感しました。

日本人の学生と話した時、私は一生懸命に自分の表したい内容を言葉で表現しました。時々適切な単語が分からなくても、強烈な交流の意欲に駆られて、私は別の方法で表れられました。

韓国や欧米の人と話した時、英語というツールをよく運用していました。前は自分の英語に自信がなかったですが、やはりいざという時に下手でも英語で自分の考えを表現することができて、よかったと思いました。

3.学問的学び

たくさんの国の学生たちの素晴らしい発表を聞いたら、勉強になりました。

アメリカと国際政治の歴史についての知識を学びました。例えばモンロー主義はアメリカの最初の外交政策で、第一次世界大戦の後アメリカの立場がどういうふうに変わったなどいろいろ知りました。アメリカの民衆たちが大統領の方針に対しての態度なども知りました。

中国と日本の間に戦争についての歴史問題が多いですが、日韓の間の慰安婦問題についてはこれまで深く考えなかったです。政治問題としてではなく、人権問題として考えると、これはかなり世界の注目や当事国の考え直しが必要な問題だと思うようになりました。

日本側の発表で非常に興味深いのは日中韓においての「相手国に対する印象」の調査です。これを見たら「なるほど」って、民間の交流がうまくいかない理由が分かりました。これから私たちの使命がまだまだ重いですが、頑張ります。

4.イベントとしてのフォーラムについて

4.1 良かった点（長所・達成できたこと）

気軽に違う国の学生たちとの交流の機会をたっぷり用意してくれて、とてもありがたいです。発表や討論の場に留まらず、学外の観光ツアーや自由研修でみなさんと仲良くなって、本当に嬉しいです。この体験はいとも貴重で、一生忘れられないと思います。

それに、「バディ」の設定も非常にいいと思います。このように絞って交流すると、もっと効果的で、親しみやすいです。

4.2 良くなかった点（限界・改善点）:

ありません。

5.その他

ありません。

6.東アジア・世界がともに生きることについて

小さい頃の教育を重視すること。例えば言語の学習は大学専門としてではなく、小さい頃から相手国の文化や言語などを学んだほうがいいと思います。そうすると相手国に対しての好感度が増し、将来日中韓の友好関係を築くために有益な準備になります。

欧州連合のような効率的な組織を作ること。東アジア人としてのアイデンティティ意識が低いという現状を改善するために、もっと連合して協力を行わなければなりません。きっと東アジアにも明るい未来があるはずです。

AFTER THE FORUM

1. 国際的交流的側面

This is a very good experience to communicate with other students from different countries. We shared our ideas about the international issue through this forum. I realized that our teenagers have our responsibility to think about development of all humans. We also become good friends no matter where are we from. I cherish the experience of communicating with students in Japan with students from other countries. I am a shy person, and my Japanese level is not high. I seldom speak at the beginning, and I dare not communicate with them. But everybody is very enthusiastic. The Japanese friends who is our buddy always take us sightseeing in Tokyo in those days, which reduces a lot of the risk of our going lost, and they also take pictures for us all the way. Students from other countries are also very enthusiastic, which touches me very much. Slowly, I try to chat with them.

2. 言語使用・学習の側面

Because I have only studied Japanese for one and a half years, my Japanese level is still very low. There are a lot of Japanese vocabulary I can't understand in the process of communication, but I learned a lot of vocabulary when I referred to the PPT. A lot of vocabulary cannot be learned in textbooks, which helps to improve my Japanese level. Where I can't understand it, I'm trying to use English and my English ability has been trained. Because I am in Japan, in an all-Japanese environment, I come across a lot of Japanese information every day, which is a good practice. And even in school, Japanese teachers can speak Chinese, so they can speak Chinese when they really don't understand it. But few people in Japan understand Chinese, if they don't understand it, they should try hard to speak it. This also makes me have to try hard to use the Japanese I have learned.

3. 学問的学び

I have learned a lot, such as how to deal with foreign cultures, how to develop multiculturalism as the New Zealand student said, we should stand on different countries' standpoints to think problems as what the American students said, we should also reduce the use of discriminatory words in life as what the Korean students said and so on. These ideas also broaden my vision. Hearing the proposals from the students of Korea, Japan, the United States, Poland and New Zealand, I feel that they all have a sense of responsibility and put forward their own ideas for the whole community of human destiny. Although the feasibility of some proposals needs further study, as young people, they can think objectively and geographically. This spirit is worth learning. In the future life, we should not only pay attention to the problems within our subjects, but also think more magnificent and beneficial things across the subjects.

4. イベントとしてのフォーラムについて

Advantage:

It provides a platform for students from all over the world to exchange ideas. Listening to students from Europe, America and East Asia can learn a lot of knowledge. Everyone can seek common ground while reserving differences. The atmosphere of discussion is very good. In addition to the two days of speech and discussion, other interesting visits were arranged, and a lot of knowledge was learned during the visit.

Some of the points I think have a little doubt about:

Let us think from geography, there are students from South Korea, Japan and China in East Asia, Poland in Europe, as well as two English-speaking countries --the United States and New Zealand. This enables us to listen to the proposals of students from different regions, which is very good. However, most of the students' majors are not international politics, and the feasibility of the proposals put forward by the students who lack professional knowledge needs further study. What's more, there are only two students in a school. Where are the two students' hometown? Can it represent the whole country?

5. その他

Let's talk about something that has nothing to do with the forum. Let's talk about what I saw and learned in Japan.

Although this is not my first trip to Japan, I traveled to Japan with a tour group in summer. I never used a Japanese tram in a sightseeing car every day. In China, I've heard that trams in Japan are crowded. I've heard that during rush hours in the morning and evening, there are still staff members who try to push passengers into the trams to close the door. I wonder if that's true? It wasn't until this time that I really experienced Tokyo's trams. It's really convenient to take a tram in Tokyo, but the premise is to be familiar with the tram's route and use appropriate software to find the

time of the tram. The first day we went to school together, so we didn't go wrong. But it was the early rush hour when the tram was crowded with people. First, as soon as the door opens, the passengers who get off come out, and then the passengers who wait in line get on in turn. At first, I thought we couldn't squeeze into such a tram, but we got on. There were a lot of people behind, so we went through the service and pushed the rest of the passengers onto the bus. The whole distance of three stations has always been like this. I finally experienced the crowding of trams in Japan. Later, when we returned to our dormitory, we had some trouble. We missed the stop for two days and got out and sat back. We don't know where the problem is. Clearly, we are all in the right direction. Why don't some stations stop? Then we finally understood that we didn't understand the train schedule. We should take the ordinary bus back to our dormitory, but sometimes it's urgent tram to park on the track. We always got there and watched the tram get on, but we didn't see which train it was. After that, we didn't take the wrong train again. Another time we got off the tram at Oyama Station, and we went out with the crowd, but we went out from the wrong exit. So, we took a long time to find the way to our dormitory.

In China, the refrigerators we use now are all fresh-keeping layer on the top and frozen layer on the bottom. We are also used to this way. But the refrigerator in the dormitory is just the opposite. Because there is no plug-in in advance, so the temperature of the two layers is room temperature. It is not clear which is the fresh-keeping layer. So, I misplaced the sandwich for breakfast in the freezer. When I was about to have breakfast in the morning, I took out my sandwich, but it was frozen. Although I don't have breakfast, I've learned the difference. Next time I'll be careful.

I was amazed by the classification of garbage in Japan. The first time I went to throw rubbish, I saw rows of rubbish cans, big and small, which made me feel a little overwhelmed. I was surprised by the way a bottle, cap, bottle and wrapping paper were discarded separately. Also, the waste recycling area in the corridor is neatly arranged with cardboard shells, old magazines and other things, very neat, which made me touched. At the same time, I would rarely see garbage cans in the streets of Japan. Every time there is garbage, I would carry it in my pocket and throw it back into my dormitory.

6. 東アジア・世界がともに生きることについて

Knowing more about the history and culture of other countries will help us better understand other countries. At the same time, we should also learn more foreign languages well. It is better to be able to read books from other countries and compare them with those from our own countries, so as to analyze the similarities and differences among them.

I agree that we should change our position and think from the standpoint of different countries to get all-round answers. When analyzing problems, we should put aside prejudice and communicate sincerely. At the same time, we should recognize each other's actual situation and make good use of each other's advantages in cooperation.

Require common ground while reserving differences. Allow differences between countries. Any cooperation is not the binding of many countries, but the equal cooperation. We should not only consider whether it is in the interests of our own country, but also whether it is in the interests of other countries.

Exchange and cooperation between countries should be based on mutual benefit and trust. International cooperation will not be possible if countries distrust each other.

Make good use of specific international organizations to solve problems. For example, the United Nations Climate Summit, facing climate problems, global warming, sea level rise and so on, is a global human problem. Through the activities carried out by international organizations, proposing proposals has guiding significance for solving problems.

The knowledge I obtained during The 8th International Student Forum

1. 国際的交流的側面

During Forum I had a pleasure to meet students from around the world: Japan, Korea, China, New Zealand and USA. It was a great opportunity to exchange numerous opinions on world problems, which concern all of us. Thanks to our wonderful hosts from Ochanomizu University we were able to get to know each other and make new friends during this week. Apart from academic symposiums we had a chance to spend time together during many cultural events and study tours, common meals and common studying. I find it very important to do this kind of networking and I am very glad we had a chance to get to know each other.

2. 言語使用・学習の側面

During Forum the main language that we used was Japanese. For me, as a Japanese language student, it was a great opportunity to use this language to present a presentation and conduct discussions on very important topic. However, theme of the Forum which concerns serious world problems was sometimes too difficult to understand in Japanese, we were using English to obtain a better understanding. I think I learned a lot, especially I got to know a bank of vocabulary related to international relations, environmental problems, world history, etc.

3. 学問的学び

During Forum I had an opportunity to take part in various lectures and two day's symposium. I had a chance to hear presentations about multiculturalism in New Zealand, America's involvement in East Asia's countries situation, Japan- China- Korea Educational Union, the framework of European Union used in Asia, environmental problems in Asia, citizenship and identity of East Asians and we, ourselves, gave a speech about the role of Poland within the European Union. I am really glad and grateful for getting this opportunity to hear out presentations on various topic, which some of them I haven't known actually. Besides, we did have a vivid discussion related to what can be done for East Asian countries to live together in peace and mutual support. We did think about solutions East Asian countries could undertake in order to provide some kind of union, like apology once for all, burying the hatchet, forgiving, not underestimating small countries, preserving the rule 'one for all, all for one', mutual support, raising awareness, education, respecting other cultures and minorities, preserving basic rights etc. Each idea helped me understand that we live all together and there is no place for meaningless wars and conflicts. Our planet and nature is showing people constantly that we should live together in peace and take care of the common planet we were enriched to live on. So that, one of the most important things for now is sustainable development and generally the United Nations' Sustainable Development Goals, which are the blueprint to achieve a better and more sustainable future for all. They address the global challenges we face, including those related to poverty, inequality, climate, environmental degradation, prosperity, and peace and justice. The Goals interconnect and in order to leave no one behind, it is important that we achieve each Goal and target by 2030. The strategies are presented in the Agenda, which provides a global blueprint for dignity, peace and prosperity for people and the planet, now and in the future. A few years into the Agenda, we see how civil society, private sector, and governments are translating this shared vision into national development plans and strategies.

4. イベントとしてのフォーラムについて

In my opinion the most important thing on plus is that people from around the world were gathered in place discussing about very important problems and it matters a lot. So, basically the main idea is absolutely wonderful. Through presentations we had a chance to think about a topic we would like to share with others, so made our own contribution into this Conference. Lectures and discussions were conducted on very high level. Thanks to many cultural activities we were able to get to know each other better, get to deepen our knowledge about Japan, which was very handy. As something, which didn't satisfy me in 100% was that my Japanese level was sometimes not enough to understand everything, mostly I did my best to catch the general sense. Also, maybe it would be better to fill the time of the Forum more tightly, providing more activities.

5. その他

6. 東アジア・世界がともに生きることについて

In my opinion, the topic of the Forum is related to attempt of establishing some kind of union in East Asia which could be based on European Union framework between countries, which are very important members of international relations. The role of America and other Asia and Pacific countries should be supportive and can by their own attitude encourage East Asian countries to get a try to live together harmoniously.

＜参考文献＞

https://www.un.org/sustainabledevelopment/

国際フォーラムで学んだこと

1.国際的交流的側面

During the cultural exchange, I learned a lot of things. First of all, I feel more confident in the Japanese language. During the conference, I met many wonderful people who turned out to be very helpful and willing to talk. Before leaving Poland, I was very stressed thinking about meeting new people from a different cultural circle. Being already in Japan, I met students who were willing to talk with me and thanks to them I feel more confident now in Japanese. Because this was my first visit to Japan, the trip proved to be very helpful. During the conference, I learned about many things that were not discussed before in college. I was positively surprised by many things. I did not feel uncomfortable in the new environment and the conference was very interesting and informative.

2. 言語使用・学習の側面

Participation in this conference was a big challenge for me. Because it was my first trip to Japan, I was very nervous about the necessity to communicate only in Japanese. Before participating in the conference, I used Japanese only at the university, during classes, or talking to Japanese people living in Poland who usually knew Polish or English. The challenge for me was to open up and speak freely in Japanese. At the beginning I was very stressed, but from day to day I felt more and more confident. Natural conversation is something completely different than talking in Japanese in classes at the university. I was not used to using the colloquial language, because in class in Poland the polite form was always used. At first it was difficult for me. It happened that I did not understand something, but students of Ochanomizu University always quietly explained to me in a different way what they wanted to say, so I did not feel uncomfortable. Participation in the conference and the opportunity to listen to the speeches teaches me a lot, both scientifically and linguistically. During professors' lectures very interesting topics were raised.

3. 学問的学び

While attending the conference, I learned a lot of things. In the first days, the lectures I attended were very interesting and thought-provoking. During one of the lectures, the issue of differences between nationalism and patriotism was raised. It was a very interesting lecture for me, because in my presentation I also spoke about similarities and differences in these two words. Among others, were linguistic conflicts in Belgium or linguistic multiplicity in Canada. Both lectures were very informative, and I listened with interest. During the forum in my opinion all presentations were successful. Before conference, during my own preparation to speech on the forum I learned a lot of new things and I became very interested in the subject of conflicts in East Asia. I have always been interested in history and politics, so these were very interesting topics for me. During the forum, a lot of history was talked about and issues of disputes with both Korea and China were raised. Because people from Japan, China, Korea, America, New Zealand and Poland participated in this event, it was possible to see different opinions on this subject. Each participant presented his views and ways to improve international relations in East Asia. In addition to the substantive part, I also learned how to perform in public. I was very stressed before my presentation, I was afraid that I would not understand a question or that I would not be able to speak out. However, thanks to the nice atmosphere, the presentation turned out to be a very nice experience.

4. イベントとしてのフォーラムについて

As I wrote earlier - participation in the forum gave me many new opportunities. I have learned a lot from using Japanese and talking in this language. Participation in the international forum was a great honor for me. The international forum was very well organized. The first day there was a familiarization event, in which I had the opportunity to meet other participants of the event in a relaxed atmosphere. All games and conversations were very cool, and I had fun. A good idea was also the presentation of University students attended by those attending the event. Forum was very well organized and thought out. We were handed out ID cards as well as folders with all important documents. In the briefcase there was, among others, a book in which summaries of all presentations were provided - it was very helpful. In addition, we received a conference plan on which all events were repeated in a very accurate way. During the conference, scans of all presentations were also handed out, which made them easier to understand. „Living Tips in Japan for International Visitors" was also very helpful for me, and I think that it was a very good idea to give this to the international students. During the forum, a guided tour around the university was also organized which was very helpful.

5.その他

Despite the initial stress associated with the conference, the international forum was a positive experience for me. I

met many new people and also learned a lot. Thanks to participation in the forum I learned a lot of new and interesting things, and also feel more confident in speaking Japanese. All participants were very friendly and I remember this event very nicely.

6. 東アジア・世界がともに生きることについて

Before leaving, during the preparation for the presentation, I learned a lot about the problems in East Asia. Preparing my part of the presentation I drew attention to the numerous disputes between Japan and China and Korea that have had a tendency in the last century. Especially the conflict with China and the very long war influenced their current foreign policy in my opinion. During my speech, I wanted to show how Poland is currently cooperating with the countries with which it was in conflict during the Second World War. War in both Europe and Asia in the twentieth century were very bloody and terrible. However, I think that in order to be able to live together in harmony and coexist with other nations, everyone should focus on the future. War is always a nasty and terrible experience, but you cannot turn back time and erase it. I believe that now everyone should focus on how to live peacefully with other nations. Past wars should not be the subject of disputes, they should be a warning. In my opinion, we are all equal and we should respect each other. Race, nationality, religion or political affiliation should not be the subject of disputes between people. As long as our views or beliefs do not harm anyone, they should not turn into conflict. For me, the basis for international cooperation and understanding between countries is mutual respect for each other. War is a terrible experience and I think that states should focus on the present and not live in the past and past conflicts. In my opinion being cooperative and working together for international peace is also important. Each country should show willingness and commitment for the common good.

Ten Days in Japan

1. 国際的交流的側面

This was not my first time leaving America, nor was it my first time in Japan. However, though the time was short, this trip was truly memorable to me. All of the Ochanomizu students were warm and welcoming. Despite being a foreign man entering a group of Japanese students at an all-women's college, I never once felt like I didn't belong. My buddy Reiko Ajiki was especially helpful in how she was always available to answer whatever questions I had, even before I arrived in Japan. The other foreign students were friendly too. Because the group as a whole was so amicable, I enjoyed my time even when we went to places I had already been to.

2. 言語使用・学習の側面

Speaking with everyone at the conference reminded me of how much I love Japanese. At first it was overwhelming, but I knew that going into it. On the first night when Reiko and Ayumi Honda met me at Ikebukuro station, it was challenging just to get words in Japanese out, let alone hold a conversation with them. Yet, as the days went on, I found my Japanese skills slowly returning to me. Though my ability to convey my own thoughts in Japanese is still not as good as I would like it to be, I was struck by how I was able to have dinner conversations with my new friends in Japanese and follow along, for the most part.

Something I did not anticipate was the value of meeting other foreign students who study Japanese. It was engaging to speak to Chinese or Korean students who did not know much English but did know Japanese. When there was a misunderstanding, we could not simply use an English word like I can when speaking with many of the Ochanomizu students and instead had to push ourselves to convey our thoughts in this second language.

3. 学問的学び

My presentation did not go as well as I would have liked, but it never does. I did not have much of it memorized, and I stumbled over several parts despite my practice. The Ochanomizu students would likely say that my pronunciation was good, but I know it can be improved. When I compare myself to the other foreign students and their presentations, I cannot help but feel like I gave the worst presentation. The Chinese students were able to write better than I could, the Korean students could speak better than I could, and the Polish and New Zealand students were better prepared than I was. I make these comparisons not to engage in self-loathing but instead to take inspiration from them. All of these students knew Japanese as a second, or even third, language, and yet they were able to express their views on complicated topics in Japanese. I hope to emulate their success one day. I know that their level of Japanese is not as different from mine as it seemed when I was listening to them speak.

After my presentation, I was embarrassed by how difficult I found it not only to answer questions in Japanese but also simply understanding the questions being asked. Even when I did understand the question, it was often impossible to express my opinion in Japanese. However, this has motivated me to continue my studying so that I can better express myself in Japanese.

4.イベントとしてのフォーラムについて

Any criticism of the forum itself stems from my own lack of ability in Japanese. To be honest, participating in the discussion part was almost impossible to me simply because I did not understand the Japanese being used. Sometimes Ayumi would translate the Japanese, and for that I am grateful. But the comments immediately after the translation would be lost to me. I do not think this is a fault of the conference and those running it; rather, I was at the lower end of Japanese skill among the participants, and it was my responsibility to sufficiently prepare beforehand. Therefore, I do not blame those running the forum on my lack of understanding.

5.その他

This is not directly related to the subject of the forum, but as it is related to my study of Japanese and relationship with Japan as a whole, I would like to write at some length about how this trip influenced my relationship with Japan.

I studied abroad at Waseda University for five months before coming to Japan this second time, and so I cannot help but compare the two experiences. Although this time was much shorter, in many ways I found it better. When I attended Waseda, I lived with a host family. I chose to live with a Japanese family because I wanted to experience as much of Japanese culture as I could. I knew that it would present challenges, but I also knew that those challenges would be

unexpected. Living with my host family proved to be difficult. To make a long story short, my inability to express myself well in Japanese resulted in an uncomfortable atmosphere in the house for me and made me want to spend as little time there as possible.

This time in Japan I had a nice apartment to myself, and that fact alone did wonders to my general outlook. It's not that I wanted to spend lots of time alone in my room; rather, I had no anxiety about returning home after any activity I was doing. With that source of stress gone, I was able to more fully immerse myself in the things I was doing, and that created a better experience overall for me. An experience so positive that by the time I was in Haneda airport waiting to leave, I knew that this was absolutely not my last time in Japan.

The friends I made during this forum and the improvement I saw in my Japanese inspired me to seriously consider living in Japan for some amount of time in the future. Returning to the hustle and bustle of Tokyo felt nostalgic and familiar. Even something as simple as navigating Tokyo's train system felt refreshing after using the admittedly inferior New York metro system. It's not to say I want to live in Tokyo because I love the trains so much, but I am struggling to put into words the feeling I had walking around Tokyo. As I commuted, explored, ate, and lived in Tokyo for this brief time, I was able to see myself living in Japan, and I owe that to my new friends who made me feel so welcome.

That said, in many ways this forum was a vacation for me, and a vacation that was paid for. I recognize that. I took a break from my school work and fully devoted myself to the forum and getting to know the others attending it. Should I live in Japan, it will not be like this forum. It will likely not even be in Tokyo. But I am thankful to Vassar College, Ochanomizu University, and everyone who enabled me to participate. It was rewarding, and it may have shaped my future.

6.東アジア・世界がともに生きることについて

Attending this forum was very valuable to me because I had the opportunity to hear opinions of different people from around the world firsthand. Before participating in the forum, the solution to Japanese-Korean and Japanese-Chinese tensions felt trivial to me. "Japan should apologize for what it did during World War II" felt like the simple but effective solution. I quickly learned over the course of two days that the solution was not as simple as it seemed.

The first eye-opening moment for me was when Ayumi asked a question to the group that was long the lines of "If Japan should apologize for its actions, why doesn't America have to, too? US soldiers raped women during their island-hopping campaign in World War II". As an American, I am embarrassed to admit I did not know about these specific atrocities committed by the American military during the second world war. I know America is far from perfect, and I know America has done many terrible things, but I always thought America was capable of admitting those atrocities. In high school I learned about many awful things American did to its own people, whether it was the targeted, systematic violence against Native Americans or the enslavement of African Americans. I had to look up both the fact that American soldiers raped Japanese women and that the American government had not admitted or apologized for these heinous actions. Ayumi was right. Japan *and* America should both apologize publicly for past wrongdoing.

The conversation, and my newfound understanding, did not stop there. Even if we could magically make the governments of different nations apologize for past wrongdoing, the minds of those nations' people will not also magically change. The question of how to change those preconceptions was discussed at length, and though I did not fully understand what I was being said, I appreciated the level of depth everyone was willing to go to attempt to solve a complex problem. Everything from tax-funded language schools to community cultural events was discussed. I did my best to voice my opinion, and even though it was expressed simply due to my level of Japanese understanding, everyone made my opinion feel valid. Not only that, but one comment I made about the US officially apologizing for its actions spurred a long back-and-forth conversation about various nations' governments that I could not fully understand.

Ultimately, we did not come to a single conclusion about what can be done to ameliorate international relationships, but the most important takeaway for me was the myriad of options available to both students and individual governments. I still believe that of the best things individuals can do is continuously challenge their own beliefs by discussing them with different people. After the two days of forum had concluded, I met with some older Japanese friends I had made during my time studying at Waseda. I did not directly bring up the topic of the forum with them, but by talking to them about Korean friends I had made, I learned that my Japanese friends had some biases towards Korean people. There was no outright vitriol towards Korean people that I could tell, but they seemed suspicious of my friends simply on the basis that they are Korean. This interaction showed me the importance of attending the forum because, though I knew about the issues at the governmental level, there is plenty of work to do on the individual level.

Ochanomizu University 8th International Forum Report
"Developing cross-cultural bonds"

1.International Exchanges

I was fortunate to have the pleasure of being a participant in the 8th international forum held for ten days at Ochanomizu University in Tokyo, Japan. As I hold a great love not only for Japan, but for the region of East Asia in general, I saw it as a great privilege to be invited to speak and participate in the discussion on the current geo-political climate within East Asia, and to explore resolutions that could dissipate international tensions in the region; specifically with regards to the big three of China, Japan, and Korea. As a New Zealander coming from outside the sphere of East Asia and its affairs, I was hesitant as to how effective my input and perspective would be and how it would be received in the forum. Nevertheless, as the representatives of New Zealand, my presentation partner and I decided to approach the issue from a Multicultural perspective; the history of multiculturalism and New Zealand as well as its current day examples, and how we can utilise these aspects and adapt them into an East Asian context in an attempt to minimise cross-cultural tensions.

2.Language Use and Learning

As the forum was predominantly conducted in Japanese, it was certainly a challenge for my Japanese skill level, but a welcome one. With regards to language support, I would have to say that English language support and translation was quite minimal. As such, there were various moments during the forum in which communication between Western participants and East Asian participants encountered difficulties and inabilities to effectively communicate. However, I believe that in some ways this proved to be a positive aspect. As the theme of the forum was political, historical, and cultural in nature, the language utilised in the forum was quite different from that which is commonly explored in Japanese language classes, and certainly provided me with the motivation to push myself and tackle the linguistic challenges that I was faced with.

3.Academic Learning

As New Zealanders not residing within the East Asian sphere, we were not acquainted with the intricate details of the tensions and difficulties, however, I believe we were still able to bring a fresh and alternative perspective to the forum which ultimately provided useful examples and insight regarding cross-cultural relations. Being born and raised in a multicultural society, I was not aware of how many aspects regarding cross-cultural acceptance and coexistence were ingrained into my viewpoint, in contrast to the general East Asian perspectives. This certainly opened my eyes to the fortune I have in living in a multicultural country such as New Zealand, but it also reaffirmed my confidence that the ideas we had brought to the table would definitely be able to prove useful within an East Asian context. I believe that we achieved our goal in properly conveying our desired message and am thus very satisfied with our performance at the forum.

4.The Forum Event

This forum was also an excellent opportunity to connect with the other participants on a personal level, which is an integral aspect of cultivating understanding, building friendships, and resolving conflicts. As the forum was only scheduled to run for ten days, I was at first apprehensive as to how well the groups of representatives from the various international universities would be able to come together and was concerned that the short time would not facilitate relationship building on any fundamental level, but remain in a state of cursory politeness. I was pleasantly surprised, however, that everyone seemed to quickly mesh together and get along well, and that we very quickly were able to form deep and meaningful friendships with one another.

5.East Asia and Living Together

If any meaningful change is to take place, it is essential to focus not only on the broader picture, but on the individual level as well. Our ability to come together as a group, despite our various backgrounds and perspectives, was facilitated further by participation in study tours organised to both provide opportunities for closer interaction with our peers, and to increase our cultural, historical, and political understanding of Japan, in addition to each other's respective countries. I am deeply thankful for the opportunity to participate in this forum and for the time I spent at Ochanomizu University. The experience was invaluable: not only as an opportunity for growth in my political, historical, and cultural understanding of Japan, as well as of the countries of the other participants, but as an opportunity to create lifelong friendships. This forum was an incredible life experience which I will carry with me far

into the future, and I wish all the best for its future continuation. I am excited for all of my fellow participants' future successes and for the impact they will create in the world.

8th International Student Forum

1. 国際的交流的側面

Before participating in the forum, I was very excited to meet fellow Japanese learners from across the world, as well as Japanese students who were interested in global issues. I was nervous, however I believed that as we all had a common interest, we would be able to get along well, which turned out to be very true. While New Zealand is obviously a multicultural society, I had never had an experience like this to learn and share ideas with people from such a variety of countries. I was introduced to new ideas and perspectives as well as being given to share my own culture and perspective with people who did not know much about New Zealand, and so I believe it was valuable for all of us to be able to talk freely and openly about many topics.

2. 言語使用・学習の側面

Speaking in Japanese with the fellow exchange students was very interesting as we had to communicate with each other in our second languages. It was an effective way of using our language skills in real-life scenarios. This also illustrated the benefits of learning a second language, as we may not have been able to communicate otherwise if we had not studied Japanese. Speaking Japanese with the Japanese students was also very useful as they were understanding and helpful when I made mistakes or did not know how to express my ideas correctly. It was great practice and being able to speak Japanese every day like that is hard to do in New Zealand, so it was a truly valuable opportunity.

The topics we discussed were complex, and sometimes it was quite a challenge trying to share ideas without knowing the correct vocabulary. The topic is complex even in English and so sometimes it was a struggle to fully understand what was being said. However, during the forum I was able to learn a variety of new and useful vocabulary that I may not have been able to learn in class. I do wish my Japanese ability had been higher so that I could grasp more of the concepts that were discussed, however I still managed to learn a lot from what I did understand.

The forum also made me even more interested in learning foreign languages as I was able to see the benefits of being able to speak two or more languages, as you can connect and communicate with many more people. The forum has definitely inspired me to continue working hard at my Japanese and consider looking at learning another language at some point in the future as that will continue to create valuable opportunities.

3. 学問的学び

As mentioned before, I may not have picked up all the ideas that were discussed in the symposium, however I do still feel like I took a lot away from the lectures and symposium. Specifically, learning about each of the participating countries was very interesting and informative. Being able to see how each country looks at certain topics such as immigration, education and foreign policy showed there are both positive and negative aspects to these topics and things to be learned from each country. For example, the EU making second language learning compulsory was something I did not know, but I easily understood the benefits of such a scheme. It would have to implemented differently outside of the EU but I think many other countries could use the EU's system to deepen multicultural understanding.

Learning about East Asian countries' perceptions of each other was also surprising and interesting. I understood that there were negative perceptions between China and Japan, and Japan and Korea etc., however I thought that was a minority view. However, after the presentations and lectures in the symposium I learned that a much larger majority of people in East Asia appear to have negative perceptions of people from other East Asian countries. This also does not necessarily stem from personal interactions but rather from perpetuated stereotypes or things they hear from the media or on the internet. This illustrated the influence of the media and the impact historical attitudes still have on modern society. Also, the idea of an 'East Asian' identity did not seem to resonate with most of the students from Korea, Japan and China, showing that people from these countries see themselves as separate from the other countries in East Asia which does not encourage a connection and understanding between countries. This also illustrated one of the many reasons it is currently difficult for East Asia to live peacefully,

4. イベントとしてのフォーラムについて

I think the most important idea, that came up a number of times was deepening understanding across nations. Seeing specific examples from each of the participating countries showed that the more we stop seeing other countries as an enemy or as different and start to see what we might have in common, it can provide a beginning towards peace. As all the participants of the forum prove, most of us are willing to work together to find peace but economic and political issues make it more difficult to find a solution. Holding events such as this forum can encourage peace and increase understanding amongst this generation, not only in East Asia, but around the world. If we can begin a new generation

without distrust and conflict between countries, we may begin to be able to live in peace soon.

The issue of comfort women (慰安婦) still seemed to an issue which both the Japanese and Korean students had differing opinions on. As someone from New Zealand, I don't think I can say much on this topic, however the fact that both sides were willing to discuss ideas on how this very complex issue could be solved showed that there has been progression from the past. However, this also shows that some historical issues are still causing tension between nations and that all parties involved must come to some sort of agreement before the issue can be resolved. This is difficult to achieve as people have many conflicting ideas, even within countries. This forum showed that being willing to talk and attempt to find a resolution to such a complex issue is an important first step towards peace. This was also proven by the presentation by the students of Warsaw University, whose Polish perspective truly illustrated the importance of focusing on the future, rather than letting the past stop any progress that could be made. Of course we must acknowledge and not forget what has happened in the past, but we should also use the past to strive towards a brighter future.

I think this forum demonstrated all the steps we can already begin to take to work towards peace and the ones we have already achieved. I think it also highlighted some of the issues that will take more work to overcome and that must be truly focused on before we can live in peace.

6. 東アジア・世界がともに生きることについて

Being able to come together and share our own experiences and opinions in this forum is very important in deepening understanding across nations. The things we have learned can be used by us in the near-future to make global change from within our individual countries. From here, we can begin to share what we have learned from other countries and see how their experiences can help encourage change in our own communities. This forum has allowed everybody who participated to think more deeply about the impact we have on global peace and how it takes every one of us to achieve it.

We must continue to have discussions and share ideas, even if it takes some time to agree on the solution. We need to encourage students to be interested in making a change for their future, and realizing their individual contributions are truly valuable. We cannot be put off finding a solution even when it seems nearly impossible, as if we work together using our shared experiences, we can live in peace. I think it is very possible to achieve peace in East Asia, we just have to stay committed to finding a solution and continue to hold events such as the Global Forum. Overall, I think this forum has achieved a lot and put us in the right direction to solve conflict in East Asia and promote global peace.

The 8th International Student Forum

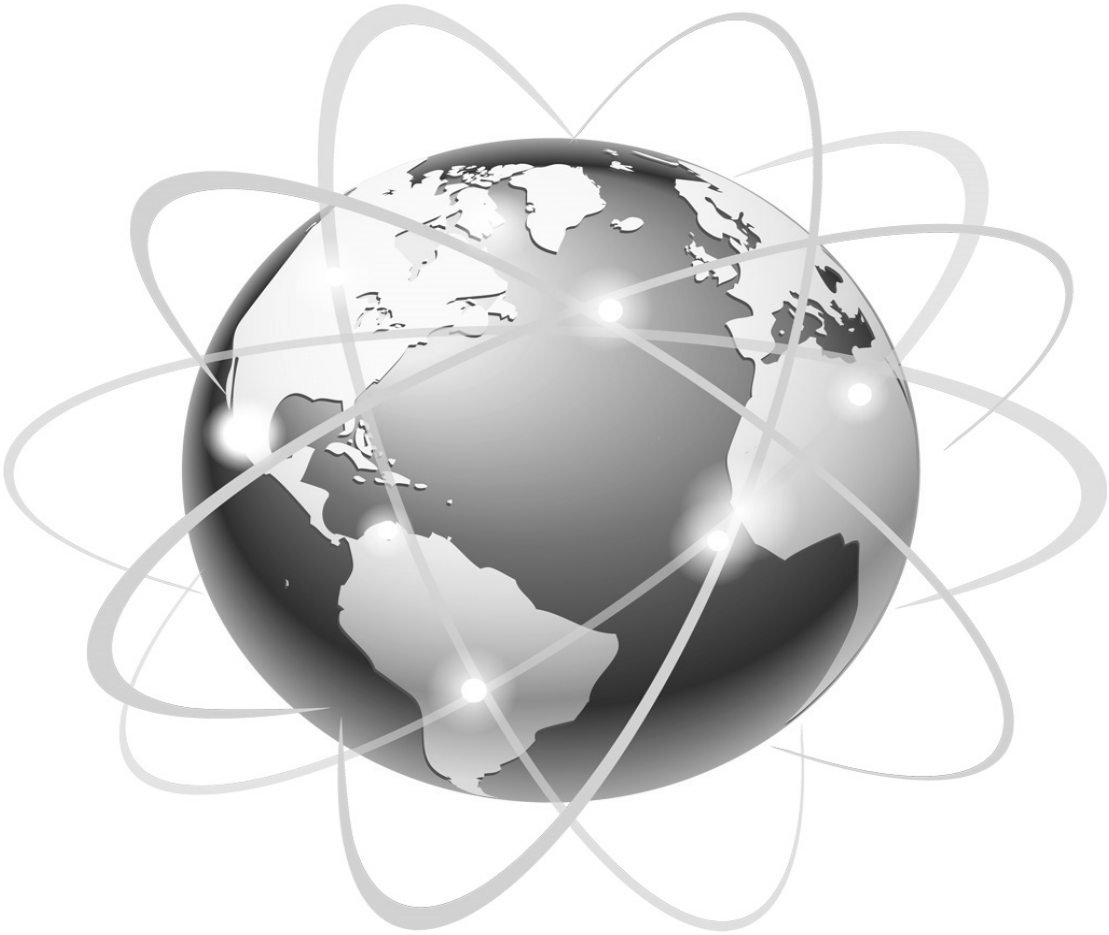
Harmonious Relationships in East Asia

2019.02.07~02.16

Ochanomizu University

Tokyo, Japan

~ Proceedings ~



Center for International Education

Ochanomizu University

TABLE OF CONTENTS

Message from the Founder
Participant Universities
Members
Program
Lecture
Presentations' Summaries

Message from the Founder

We are now living in a globalized era, and the relationship between nations has been getting closer gradually and steadily. However, Japan and its neighboring countries, such as Korea and China, are unable to maintain a positive relationship; rather, things have been getting worse recently. It has been seven decades since the World War II ended; however, even now, a solution to the enduring conflicts is yet to be found. Although everyone in each of these countries is more than willing to live together, it is not likely that the political powers will make this possible. One of the obstacles to solving these conflicts may be the political attitude of each government, which holds the national interest as top priority. Consequently, all the nations' interests are in conflict with each other. In the field of education, however, it is not power, but truth and justice, which control everything. As a person involved with education, I would like to find a solution to this problem by means of the powers of truth and justice; to this end, I started three events:

The Japan-Korean International Student Seminar,
The Multicultural and Multilingual Cyber Consortium, and
The International Student Forum.

The first one was held with Dongduk Women's University and Busan University of Foreign Studies (BUFS), and the second one, with various universities, including BUFS, Dalian University of Technology, and Vassar College. The last one is this forum.

The Forum was initiated in 2012, one year after the Great East Japan Earthquake unexpectedly occurred, and aims for students to discuss and think about world-wide issues from a global perspective beyond their national borders, languages, and cultures. This year we are holding the 8th Forum, or the 10th if we include those held overseas, at Vassar College in 2014, and at Dongduk Women's University, Keimyung University and BUFS in 2015. Fortunately, the Forum was accepted as one of the short-stay programs by Japan Student Services Organization (JASSO) this year, like the previous Forums. Thanks to the financial support of JASSO, we were able to invite 12 students from 6 universities in 5 countries, not only from East Asia, but also from Poland, the United States and New Zealand.

The keywords of the 8th Forum are "Harmonious relationships in East Asia". We would like to learn the wisdom of how to live harmoniously, from the experience of

establishing the European Union in Europe, the use of leadership skills to think about worldwide peace in the US, and the multiculturalism we find in Oceania.

I hope that this Forum works in a good way not just to foster our students as global citizens, but also to provide them a chance to take the initiative in organizing and operating an international event by themselves. I believe that it will become a valuable experience for reflecting on and working together for world peace with students from all over the world.

This Forum has been established mostly by our students, who have voluntarily prepared this forum. I really want to express my gratitude to them.

In the end, I hope all the participants who are going to join the Forum get a new point of view and foster their abilities to work as a multicultural group during the program.

Founder of the International Student Forum
Prof. Shin MORIYAMA

Participant Universities

Busan University of Foreign Studies (Korea)

Dalian University of Technology (China)

Dongduk Women's University (Korea)

Ochanomizu University (Japan)

University of Canterbury (New Zealand)

Uniwersytet Warszawski (Poland)

Vassar College (USA)

(Alphabetical Order)

Members

Partner Universities' Students

Busan University of Foreign Studies (Korea)

- Mira Baek
- Yujin Son

Dalian University of Technology (China)

- Mohan Liu
- Shuhan Zhou

Dongduk Women's University (Korea)

- Doha Kim
- Hee Jin Lim
- Seoha Kim
- Seunga Shin
- Sunhye Cho

University of Canterbury (New Zealand)

- Chris Turner
- Emily Flynn

Uniwersytet Warszawski (Poland)

- Alicja Zawojska
- Martyna Krystyna Gawel

Vassar College (USA)

- William Edward Duffy

(Alphabetical Order)

Ochanomizu University's Students

- Aiko Enomoto
- Ami Takahashi
- Ayumi Honda
- Chae Eunjin
- Chihiro Kuwabara
- Chihiro Tsukada
- Kano Oyama
- Katena Miyama
- Machiko Mizuki
- Mayuko Sakai
- Megumi Furuichi
- Reiko Ajiki
- Rurika Morishita
- Shiho Furuoya
- Sunwoo Jimin
- Tsubura Matsunaka
- Xinying Zhou
- Yan Wang
- Yuki Nakamura
- Yun Haejung
- Yuriko Kamiyama

Program

Thu., Feb 7	CHECK-IN
Fri., Feb 8	Opening Ceremony Keynote Lecture Orientation Campus Tour Invited Lecture Welcome Party
Sat., Feb 9	Study Tour Edo-Tokyo Museum
Sun., Feb 10	Preparation for the Presentations
Mon., Feb 11	International Students Symposium 1
Tue., Feb 12	International Students Symposium 2
Wed., Feb 13	Japanese Culture Experience Tour (Two courses are prepared)
Thu., Feb 14	Free Tour
Fri., Feb 15	Closing Ceremony Farewell Party
Sat., Feb 16	CHECK-OUT

【基調講演】

外国語教育から世界レベルのシティズンシップ教育へ
東アジア，そして世界がともに生きるために

森山新（お茶の水女子大学）

日韓中をはじめとした東アジアの国家間の関係は今日，ますます混迷の度を増している。かつて日本に多大な被害を被った韓国，中国などが次第に力を増す中，これまでは「解決済み」としていた問題に対しても沈黙を破り，それに日本が反発する形とも見受けられる。このような状況は，第二次世界大戦及び戦後の処理が十分なもの，妥当なものであったのかという，深刻かつ根本的な問題をも喚起している。

このような対立を目の前にし，日頃，日本人学生を相手に多文化交流・多文化共生を教え，かつ韓国や中国などの留学生に対し日本語教育を行う我々ができることはないのか。このような考えのもと，2004 年以降，いくつかの教育実践を展開してきた。

その一つが，世界の学生が一堂に会し世界レベルの問題をインターナショナルな視点で討論する，この「国際学生フォーラム」である。学んだ外国語を用い，対話のチャンネルを質量ともに増やしながら，相手の立場や考えを理解し，互いが納得のいく答えを見出そうとするものである。

ヨーロッパでは第二次世界大戦後，国家間の対立による悲劇を二度と繰り返してはならないという深い反省の中で，共に生きるための歩みを始め，欧州連合建設にこぎつけた。そこでは言語教育が重視され，シティズンシップ教育としての外国語教育が模索された。Byram は外国語教育により国家，文化を越えたシティズンシップを育むには，言語，文化教育のみならず，政治教育を扱うべきであると述べている。この Byram の主張は，私自身の教育実践と相通ずるものがある。

今日も解決できず，混迷の度を深めてしまっている東アジアの対立，それにはいくつかの原因があろう。

第一に，東アジアの対立のきっかけを作ってしまったこの日本が，過去を真摯に見つめ，必要かつ十分な反省をしてきたのか，という問題である。日本の側にも様々な言い分があろう。しかし今日，様々なハラスメントが基本的に被害者の視点から問題を見つめ，解決が必要であるのと同様，国家間の紛争もまた，これまでのように強者の立場からではなく，被害者の立場に立ち，問題解決にのぞむことが必要なのではないか。残念ながら今の国際政治は強者の論理が依然優勢であり，こういった論理は今の国際政治に，そして日本にも，通用しにくい。

第二に，現在の国家関係が国益優先，言い換えれば，自国の利益を第一に考えているという点を挙げなければならないだろう。そして学校教育やメディアもまた，自国中心の歴史認識，情勢認識を軸に据えながら，それがあたかも，真実であるかのように語り伝えている。こうした自国優先主義は，国をまとめ，他者を退ける上には有効かもしれないが，国と国と

が日常的に交わり，ともに生きる今日にあっては，もはや時代遅れの感も否めない。

第三に，国対国という構図が崩れつつあるグローバル時代を迎え，かつては国対国の関係の中ですべての問題解決がなされてきた時代は終わろうとしているということである。「徴用工問題」などはまさにその表れであり，視点は国から個人，国益から個人の基本的人権へと転換しようとしていると言えないだろうか。

このような変化の中，我々の視点もまた，国家の枠組みで世界の問題解決を考えるのではなく，個人に焦点を当て，国際関係から人と人との関係に，より多くの関心を向けていく必要がある。

また，我々個々人の考え方は，ナショナリズムを克服し，インターナショナルな視点に立つべきであり，教育，メディアもまたそのようなインターナショナルな視点から再構築すべき時に来ているのではないだろうか。そしてそのような転回（turn）の先頭に立つべきなのが，我々大学人であろう。

大学は高等教育（higher education）を担う機関である。そして大学人とは，既存の物事をクリティカル（critical）に見つめ，より有用な知恵を発掘する使命を持った集団である。さらにグローバル時代を迎える今日，大学人に求められるのは，自己中心の視点をクリティカルに見つめ，多様な価値観を対等かつ公平に見つめる，自己（self）に対するクリティカリティ，そして今の社会の問題点をクリティカルに見つめ，よりよき世界を築いていく，世界に対するクリティカルな行動が必要であるとしている。我々大学人は，このような知識，自己，世界に対するクリティカリティを備えたクリティカルな存在（critical being）となり，この対立多き東アジア，そして世界を，ともに生きる，平和な社会へとつくり変える，先導的役割を担わなければならないと考える。

今回のフォーラムでは，東アジア三か国に加え，ヨーロッパからはポーランドのワルシャワ大学，オセアニアからはニュージーランドのカンタベリー大学，そしてアメリカからはアメリカ合衆国のヴァッサー大学の学生が参加している。欧州が二度の戦争や東西の冷戦を克服し共同体を建設したプロセス，ニュージーランドが多文化主義の観点から共生の道を歩み始めたプロセス，そしてアメリカがこれまで世界のリーダー的存在として歩んできたプロセス，それらのプロセスにはそれぞれに東アジア各国が学べる点があるであろう。しかし同時に，クリティカルに見つめ克服すべき課題も存在している。さらにたとえそれぞれの地域で有効であっても，東アジアにそのまま応用できるかという点も見過ごすことのできない重要な点であろう。

東日本大震災の悲劇により始まったこの国際学生フォーラム，自然災害（天災）に始まったこのフォーラムのトピックは，近年は人災に向けられている。それは天災に比べ人災は，我々の努力次第で解決ができるかもしれないと思うからである。そして人災の最大の悲劇こそ，戦争や紛争などの対立である。

我々は今回，人類が戦争などの対立を回避し，ともに生きるために，それぞれのナショナリズムを克服し，意義のある対話と討論が繰り広げられることを期待したい。

【Keynote Speech】

International citizenship education through foreign language learning
For people in East Asia and the world to live together harmoniously

Shin Moriyama (Ochanomizu University)

The relationship between nations in East Asia has become more and more confusing these days. Korea and China, which were heavily damaged by Japan before and during World War II, are becoming much stronger than they were in the past, and now, they finally broke silence to demand damages for problems that had been said to be "already resolved". Because of these allegations, the government of Japan is also reacting in opposition.

These situations evoke serious and fundamental problems that the war compensations provided by Japan were not sufficient, or appropriate enough, to appease them.
Then, I recently have been thinking a lot what I can do for them as a person who teaches intercultural exchange and multicultural coexistence to Japanese students, and Japanese language and culture to international students, including those from Korea and China.

For these reasons, I have continued several educational practices since 2004, one of which is this “International Student Forum”, where students gather from all over the world to discuss world-wide issues from international perspectives. During this forum, by using foreign languages learned and increasing channels of communication, we must try to have a dialogue and understand the minds and situations others live in in order to reach an answer that is internationally conceived.
If we turn our eyes to Europe, after the second World War, European countries took a firm resolution never to repeat such a terrible conflict between nations, and started taking steps towards living together harmoniously. They finally reached the establishment of a transnational organization, the European Union, in the 1990's. Through the creation process of this establishment, they concluded that learning foreign language is vital as a citizenship education. Byram, one of the researchers specialized in language education policies in Europe, proposed that, in order for foreign language education to develop as an international citizenship, foreign language education must deal not only with language and culture education, but also with political education. His claim coincides with the ideas which exists at the back of my educational practices, including this forum.

What are, then, the reasons for these conflicts in East Asia? And why are nations in this area not able to live together even after more than seven decades have passed since World War II ended?
The first reason is that Japan has not reflected on its past behaviors deeply enough even though it originated those conflicts. Of course, I know that there are also arguments on Japan's side. However, as harassment always demands responsibilities from assailants, seen from the point of view of those who suffered from their hands, so are conflicts between nations, I believe. Unfortunately, international politics mostly still view the relations from the stronger side and try to solve the

problems from their perspective, but I think that the time has come to turn the tides and to reflect on the problems from the weaker side in order to solve them. This logic has not yet passed in international relations. The Japanese government would not agree with it either.

The second reason is that national relations have prioritized the national interests. In other words, all nations have considered their own interests as the top priority rather than thinking about others' interests.

School education and mass media also see the affairs and the history from their own side, in other words, from a national perspective. As a result, they lead the people to think that their own view is the only one that is valid and that other perspectives are baseless. This nationalistic perspective may be useful to exclude others and to unify a nation, however, it might gradually become obsolete in this internationalized era.

Thirdly, in this globalized era, when the structure between nations is gradually eroding, it seems that problems should be solved at the individual level, not at the national level. The so-called wartime "forced labor" problem between Korea and Japan is a typical incident in which this change was displayed.

In such changing times, our viewpoints for solving international problems should also be changed. Instead of trying to solve them from the national structure mentioned above, we should focus on each individual. In other words, not prioritize national interests, but individual human rights. We, as individuals, should also overcome nationalism and have an international posture on the matter. As are the education and the media. And on the top of that, we, those who belong to universities, should lead the way.

As you know, universities are institutes of higher education, and those who belong to them have as a mission to view existing things critically and discover the knowledge which is most useful for all of humanity. Moreover, in this globalized era, we also have to critically reconsider ourselves to overcome our selfishness, as well as critically see and reconstruct the existing society. We should become such critical beings with critical knowledge and perspective for looking at our own self and the world, and should have missions to lead the world, or East Asia, to a more harmonious direction. In this forum, students have gathered not only from East Asian countries, such as Korea and China, but also three other countries in the world, including Poland from Europe, New Zealand from Oceania, and the United States from North America. We would like to learn how European countries have overcome World War I and II, as well as the Cold War; how Oceanic countries have overcome the white supremacy reasoning and have developed their multiculturalism; how the United States of America have led the world. Of course, all of them have limitations and issues to be improved. Furthermore, you must not forget that the successes in these areas are not always applicable to the issues in East Asia.

This forum started in 2012, after the disaster of the Great East Japan Earthquake occurred, the topics of which, at first, mostly dealt with natural disasters. Recently, we also addressed disasters caused by people. This is because it may be difficult, not to say impossible, to avoid natural disasters, but I believe that it could be possible to circumvent disasters caused by people if they would make as much efforts as possible. Among these disasters, the most tragic one must be war.

In this forum, in order for all human beings to avoid wars or any other conflicts, and instead, to live together harmoniously, we would like to hold a significant dialogue and discussion by means of overcoming each one's own nationalism.

【招待講演 1】

Invited Lecture

共生のための言語教育―ベルギーとカナダの例をもとに

"Language education for living together - Based on examples of Belgium and Canada"

小松　祐子

Sachiko Komatsu

お茶の水女子大学文教育学部　准教授

Associate Professor,

Faculty of Letters & Education, Ochanomizu University

私が専門とするフランス語圏から二つの国を取り上げて、国内の民族対立の歴史と対立を乗り越えるための努力を紹介し、言語教育が共生のために果たす役割を考えたい。取り上げるのは、ベルギーとカナダである。欧州連合本部が置かれたベルギー、移民の受入れに積極的なカナダについては、いずれも平和で開かれた国というイメージを持つ者が多いのではないだろうか。しかし現実には、両国ともに、国内に歴史的に根深い言語文化的な葛藤を抱えている。

ベルギーは、中世から続くゲルマンとラテンの言語文化的境界を抱える国である。東西に走る言語境界線により国は二つに分断されている。北のオランダ語圏の住民が全体の 60%、南のフランス語圏が 40%を占め、3 つ目の公用語ドイツ語の話者は 1%未満の少数である（世界でもっとも優遇されている少数語話者という評判がある）。オランダ語系とフランス語系の激しい対立により、中央集権体制ではじまったベルギー王国は 1990 年代には連邦制へと移行し、現在も国の分裂が危惧されている。欧州が統合を進める一方で、各地に民族主義も台頭しているが、ベルギーはその象徴的存在であるとも言えよう。そして、この国のオランダ語圏、フランス語圏それぞれの言語教育から、我々は教訓を得ることができるだろう。いくつかの言語教育のモデルケースが成功例として紹介される一方で、いまだ課題は多く残されている。欧州の掲げる複言語・複文化主義をもっとも必要としているのが、おそらくはベルギーなのである。

カナダは、国として二言語多文化主義を掲げている。英系とフランス系が建国の二民族と見なされ、英仏二言語が公用語として国の基盤に据えられる一方、新たに到来した移民の文化を等しく認める政策をとっている。今日、フランス語を第一公用語とする人口は全体の 25%弱であり、フランス語系住民はケベック州に集住するほか、他州にも散在する。ケベック州でフランス系のナショナリズムが高揚し、主権獲得（つまり独立）の運動が始まった 1960 年代には、「フレンチ・イマ―ジョン」という言語教育メソッドが生まれた。その後、ケベック州独立の気運は去り、一見すると多文化共生を実現しているように思われるかもしれないが、公用語少数派であるフランス語系の不満はくすぶり続けており、それを疎ましく思う英語系との間の葛藤が絶えない。とりわけ近年、各地でポピュリズム政党が躍進し、いくつかの州で政権を握るに至り、多数派（つまり英語系）に迎合する政策がとられ始めている。折しも、1969 年に制定された連邦公用語法がちょうど 50 周年を迎える今年は、カナダの二言語主義に関する節目の年である。

このようにいずれも現在進行形で国内に言語文化的葛藤を抱える国において、言語教育の面で行われている努力とその役割を検討することには意義があるだろう。これらの国は、国内の葛藤

ゆえに、自文化中心主義と向き合う機会を絶えず与えられてきた。ナショナリズムを超えた相互理解やインターカルチュラルなシチズンシップ形成の重要性を、身に染みて知っている国なのである。そのことが、これらの国が欧州統合やグローバル社会でリーダーシップを発揮するための基盤となっている可能性もあるのではないだろうか。

【招待講演 2】

「向こう側」と「こちら側」のあいだで

Between this side and the other side

山本　冴里

Yamamoto　Saeri

山口大学　国際総合科学部　准教授

Associate Professor

Yamaguchi University, Faculty of Global and Science Studies

１．ふたりの男の子の話

ふたりの男の子の話をしたい。ふたりとも血のつながりのある両親の出身は東アジアで、外見的には典型的な＜日本人＞に混じって目立つことはない。

ひとりは５歳で、幼稚園に通っていて、母親の再婚で日本に来た。新しい父親は、「日本人になるのだから」と、子どもが日頃使う名前（通称）として日本名を登録した。子どもも母親も日本語を学んだことがなく、子どもはしばらくのあいだ、幼稚園で名前を呼ばれた時さえも自分のことだとわからなかった。

もうひとりは、来日時に１２歳の中学生だった。彼も母親の再婚での来日で、出身国は前のケースと同じである。ただし父親が日本で暮らす外国人（アメリカ人）というところが、はじめの男の子とちがう。この男の子には、両親は、通称として「いかにもアメリカ人」といったふうの名前を登録している。

子どもたちと母親の母国である東アジアの国は、日本と深い関係にあるが、現在の日本でそれほど良いイメージが持たれているとはいえない。だからこそ、どちらの親も真剣に考えた結果、これまでとは異なる名前を登録したのだろう。前者は日本名をつかう同化（assimilation）、後者はより遠い地域の名をもらう異化（differentiation）だ。ストラテジーこそ反対方向だけれど、両者とも、名前の変更は「ルーツをかくす」意味を持つ。そう、認めなければならない。ここは、「ルーツをかくしたほうが、よりうまく生きられる世界」になってしまっている――少なくとも、そのように考える当事者たちがいる。

２．境界の向こう側とこちら側

「国民の同質性は、人々が共生していくための不可欠の条件ではないにもかかわらず、まるでそうであるかのような考え方が力を持っている」と、杉田（2005, p.vii）は述べる。もちろん、構成員の同質性ではなく多様性をこそ価値あるものとしている地域も、世界にはいくつかある。しかし、東アジアのほとんどの地域には、杉田の指摘が当てはまる。

ここで、次の５つの問いについて、考えてみてほしい（Byram and Zarate 1995, pp.44-45）を改変）。

A)　　あなたの国の人たちが、悪いイメージを持っている国は、どこだと思いますか？（国名を言わないで考えてください）

B)　　その国の人々について、あなたはどう感じていますか？

C)　　あなたの意見は、どんな環境（メディア・家族・学校・友だち・職場など）に影響されて作られたのでしょうか。

D)　　日常生活のなかで、そうした意見を表明していますか。

E)　　あなたのまわり（大学のクラスや地域）は、今、その国の人々にとって、住みやすいものになっているでしょうか。

グローバル化とローカル化が同時進行し、混迷する私たちの社会には、個人では解決しようがないと感じられる問題が、いろいろなところに存在する。そしてその多くが、大手メディアをふくむ日常生活のディスコースでは、二元法（binary categorization）で語られる。境界のあちら側に立つ者が敵／問題の根源であり、こちら側に立つ私たちは被害者／正義だ、という二元法である。そうした二元法には様々な形があるが、いつもその根底には、＜境界の向こう側に生息する者は、本質的につねに誤った者たちであり、こちら側の我々は善である＞というメッセージが流れている。

３．ナショナリズム（nationalism）とパトリオティズム（patriotism）

どちらも日本語に訳せば「愛国心」となってしまう。しかし、ナショナリズムとパトリオティズムは、時には厳しく区別すべきものとして論じられてもきた。ドゥブレ（2006, pp.11-12）は、パトリオティズムを持つ人とは、「自由への愛と自分が生きる国 pays への愛を決して分離することなく、かつ祖国 patrie に近隣諸国に対するいかなる優越性をも認めない人間」として描いている。一方、ナショナリストは「自由を捨てて権力を手に入れる心の準備がいつでもできている、恐ろしい人たち」だという。本発表では、とくに、前者の持つ、「近隣の他の国々に対して、祖国のいかなる本質的な優越性をも認めない」という部分に注目したい。このように厳しく自己を律する態度は、排外的なヘイトスピーチをくりかえす者たちにも「国を愛する」ことを義務教育レベルで強要しようとする政治家にも、決して見られない。このような態度を自分に課すとき、＜境界の向こう＝彼ら＝悪、境界のこちら＝私たち＝善＞という決めつけは不可能になる。

４．＜ともに生きる＞とは、どういうことか？

この「国際学生フォーラム」は、＜ともに生きる＞ことを目的として掲げている。私は、＜ともに生きる＞とは、互いに、相手がいなければできなかったかたちで、何かを達成することだと思う。このフォーラムでの日々を過ごすなかで、進むにつれて見えてくることがあるはずだ。どうか、「緻密で洞察力のある創造的な（多和田 2000, p.121）」理解を試みてほしい。そうした理解の対象は、議論のトピックであり、言葉を交わす相手であり、そして自分自身でもある。

「国際学生フォーラム」の参加者には、日々の食事の食材を、調味料まで国産のみで過ごしている人はおそらくいないだろう、と予想する。あなたの身体は、国境の向こうにも様々な広がりを持つものから作られている。あなたの精神・思想も同じである。あなた自身のなかに、実は複雑で多様な他者がいるはずだ。だから、言葉を交わす相手についても自分についても、二元法で考えないでいてほしい。私たちの心のなかの境界は、空港の＜入境審査＞のような線状のものに

限られることなく、むしろ面積を、広がりと深みを持ったものとしてあり得るのだから。境界のこちら側に引きこもるのでもなく、向こう側に行くのでもなく、境界そのものにとどまり、どうか出会いを楽しんで――＜ともに生き＞てほしい。

引用文献

杉田敦（2005）『境界線の政治学』岩波書店

多和田葉子（2000）「文字を聞く」荒このみ・谷川道子（編）『境界の「言語」－地球化／地域化のダイナミクス』新曜社, pp.112-123.

レジス ドゥブレ（2006）水林章（訳）「あなたはデモクラットか、それとも共和主義者か」レジス ドゥブレ・樋口陽一・三浦信孝・水林章『思想としての＜共和国＞－日本のデモクラシーのために』みすず書房, pp.1-50.（Régis Debray, Etes-vous démocrate ou républicain? in Le Nouvel Observateur, 30 novembre – 6 décembre 1989）

Byram Michael and Zarate Geneviève（1995）Young People Facing Difference: Some proposals for teachers, Council of Europe Publishing: Strasbourg.

Presentations' Summaries

University of Canterbury

Multiculturalism in New Zealand

: The importance of social attitudes and strategies in maintaining a multicultural community

Background

Since its inception as a nation, New Zealand has been an ever-changing ethnic and cultural landscape due to colonization and then further immigration. As a result, the country has had to deal with the socio-political challenges that come along with these changes. From the early governmental stages, it was important to establish an official groundwork for a nation with a duplicity of cultures. This was instituted in the Treaty of Waitangi (1840); a bicultural treatise that defined the relationship and standing between the British Crown and the native Maori tribes. Furthermore, New Zealand had to develop a general social attitude that would positively cultivate New Zealand's society within the unique bicultural context in which it found itself. This also meant that New Zealand had to establish itself as a nation that could cope with further immigration and the integration of more cultures and identities that it would inevitably be faced with, given its own history of immigration, and original idea as a nation of independence and opportunity.

New Zealand has continued to welcome numerous people from a variety of regions; ranging from the Pacific Islands and Asia, to Europe and Latin America. As such, New Zealand has continuously developed with an international mindset in order to engage with an ever-increasing level of cultural diversity and its accompanying changes. Through this paper we aim to explore social aspects that have developed in New Zealand to sustain multiculturalism, and how they could be translated and implemented in East Asia to aid in relieving international tensions. We will also explore the specific experience of Latin American immigrants as a case study and how it exhibits the effectiveness of New Zealand's outlook and approach to multiculturalism.

Research Questions

•What is the context and situation in which Latin American communities have immigrated to New Zealand?

•How has sense of community assisted in ensuring an inclusive and culturally aware environment within New Zealand?

•What opportunities are available for people in New Zealand to experience and understand other cultures?

•How can the points mentioned above be adapted to facilitate peace and understanding in East Asia?

Methodology

In our paper we used information and research derived from academic research papers, interviews, and government websites to provide validity and accuracy to our points of discussion.

Vassar College

William Edward Duffy

Summary of Presentation

In my presentation I explore the different ways an American can help ameliorate relations between Japan and its East Asian neighbors. With a lack of foreign relations and political experience, I do my best to share my personal opinion in Japanese.

First, it is difficult as an American to feel like I can help improve another country's issues when my own country is fraught with internal turmoil. America has long acted as an example of what other countries have aspired to be. Although America was not very involved in East Asian politics until after World War II, until recently our presence was a positive influence. Now times have changed. Our president, aside from being an international embarrassment, employs a harmful set of foreign policy ideas that set to further isolate America from the international community. Until we as Americans can not only elect another president but also elect more progressive-thinking politicians, we need to think globally while acting locally.

In my personal opinion, the best thing to do as a student in terms of Japan and its relations is to learn about them. That sounds simple, but many American high school curriculums do not cover much material focused on Asia. American students can independently research Japan and its history, but to leave it there is not enough. Attempting to learn the language is among the best ways students can learn more about a country and its conflicts. Fluency is not necessary, (I am far from fluent) but the language of a country better reflects how that nation's people think.

Understanding is vital because communicating with others who think about issues differently is the only way to reach any kind of feasible solution. As an individual, constantly challenging one's opinions by discussing with others is the way to achieve this.

Uniwersytet Warszawski

What the world can learn from Poland?

: The role of Poland in process of European integration

Part I　Historical Introduction (10 minutes)

1. Poland during World War I and World War II – 1918- 1945 r.
2. From Polish People's Republic to the Polish Round Table Agreement – 1952- 1989 r.
3. System transformation and the accession process to European Union- 1989- 2004 r.
4. Poland in European Union- 2004- 2019 r.

Part II　What the World can learn from Poland? (10 minutes)

1. Patriotism, not nationalism- the Polish messianic idea till the World War II
2. The Polish way of burying the hatchet
3. The Polish foreign policy- supportive cooperation in striving for stable economic and social progress in the frame of European Union (Single European Market)
4. Poland as a beneficiary of structural funds of UE

Part III　Summary and conclusion (5 minutes)

世界はポーランドから何を学ぶことができるか？

―ヨーロッパ統合の過程におけるポーランドの役割―

1．歴史的な紹介 （10 分）

1. 第一次世界大戦と第二次世界大戦中のポーランド 1918 年～1945 年
2. ポーランド人民共和国から円卓会議　1952 年～1989 年
3. システムの変形 と EU への加盟プロセス　1989 年～2004 年
4. 欧州連合におけるポーランド　2004 年～2019 年

2. 世界はポーランドから何を学べますか？（10 分）

1. 国粋主義の代わりに愛国―第二次世界大戦までのポーランドのメシアニックの考え
2. 元の鞘に収まるポーランドの方法
3. ポーランドの外交政策―欧州連合の中で経済発展と社会発展に向けて連帯な協力（欧州連合のシングル市場）
4. EU の構造資金の恩恵を受けるポーランド

3.　結論 （5 分）

Dalian University of Technology

日中韓大学生連合国際事業グループ

大連理工大学　劉默涵　周姝含

一、　アジアの現状とその啓発

東アジアの共生は政治の力ではどうにもならない様相を呈している。政治以外の手段が用いられるべきである。

1. 経済：東アジア経済の一体化が必要である。大きな資金は一つの国では負えないが、共同の資金源があれば、便利に利用することができ、連帯の責任感も増える。
2. 文化教育：若者たちの共同体意識を育む。日中韓三国の間の関係は共同体の中の人同士の関係となり、対抗意識も最小限に留めることができる。

二、　EU 建設から得た経験と啓発

1. 組織の仕掛け：管理部門の分業。重大な災難が起こった時、被災国が欧州連合の緊急事態応対の中枢――支援調整プログラム（ERCC）に助けを求め、ERCC が 24 時間以内に指示を下し、そして各部門が協同作業を始める。
2. 専門教育：救援隊の共同育成、四川大地震の教訓。一つの国の人手が足りないときは、専業的な救援チームが用意される。欧州連合の各国は救援用語まで統一化されており、定期的に協同訓練を行っているため、ハイレベルな救援隊による救助が可能になった。
3. 普段の教育：一体感の育成、連合の土台。欧州連合の間の留学や海外交流が盛んで、便利な交流機会がお互いの不信感を消して、国際協力の土台となった。

三、　本校の実践と計画

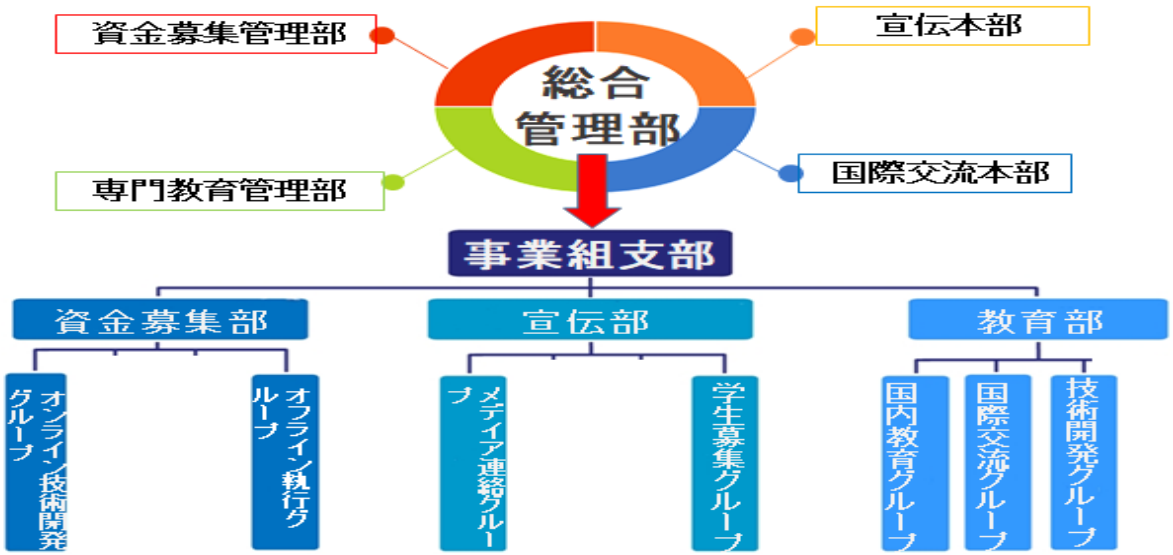
教育の面において、私たちの大学ですでに行った国際教育の実践と将来の計画を紹介したい。

1. 大連理工大学の国際化された大学運営状況：東北アジアでは国際化が行われている「注目」大学の一つで、日本に対する交流が特徴である。東北アジアには世界 11 の最大の経済体の中の 4 つ、「中日露韓」が集中している。
2. 大連理工大学の「同窓友情」育成計画：育成計画、教材、時間割り、テストの内容、テストの時間という五つの要素が同じであることを特徴とし、優秀な教育で共同でエリート人材を育成し、優秀な教師を引き付けることを目標とする。

以上の内容をもとにして、ついに私たちの構想がうまれた。それは、「日中韓大学生連合国際事業組」という組織の構築である。

四、　私たちの考え

前の欧州連合から得た経験に基づいて、まずはこの組織の内部の仕掛けをはっきりしよう。この国際事業グループには総合管理部と支部がある。



1. 経済：大学生寄付連盟（オンライン：支払公益システム、キャンパスカード寄付。オフライン：普段の寄付を呼びかける）

（1）スマホ向け販売サイトには、売買が成功したら、一定の額の義援金が自動的にシステムに支払われる仕組みがある。

（2）学校のキャンパスカードを使用するたびに自動的に寄付できるシステムも開発したい。

2. 文化教育：大学で「国際事業」という新しい専門学部の設置（救済、平和共生）

（1）専業化した訓練と系統だった知識の備えがとても重要であると考えられる。三国が共同に新しい大学専門の建設に協力して、東アジアが全面的に共生する道を模索することを使命とする専門学部を設置する。

（2）各国が自らの優勢をどんどん発揮して、お互いに長所を取り入れ、短所を補い合って、一緒にこの専門教育に協力する。各国の防災と東アジアの安全保障にも大いに役立つ。

（3）一体感の教育を推進するためには、広範な留学や交流が必要不可欠である。三国防災会議を開いたり、大学生が作った救済ロボットの性能を競う大会を行ったりする。

参考文献

1.森山新・向山陽子編著,長友和彦監修,『第二言語としての日本語習得研究の展望：第二言語から多言語へ』, 2016, 5 月, ココ出版

2.竺彩华. 全球化的反思与东亚经济一体化的未来[J]. 国际观察,2017,(3): 20-37.

3.http://www.qxcu.com/domestic/1/90664.htm

4.曹海峰. 欧盟重大突发事件应急协调机制及其借鉴[J].党政视野,2017,(2):24-26.

5.http://www.199it.com/archives/799818.html

6.杨伟超,陈伟哲. 汶川地震志愿者的角色分析[J]. 防灾科技学院学报,2008,(3):138-140.

7.https://baijiahao.baidu.com/s?id=1604241247174166194&wfr=spider&for=pc

8.http://www.ebrun.com/20170421/227262.shtml

9.https://www.taoguba.com.cn/Article/1731034/1

10.http://www.sohu.com/a/215902654_648461

災害から連帯へ:グローバルなネットワーク構築に向けて
―中国と日本に対する韓国人の認識調査と分析、および EU の事例を中心に―

釜山外国語大学校
ベク・ミラ、ソン・ユジン

1.序論

(1) 問題提起

韓国、日本、中国は東アジアを代表する 3 国といえる。昔から漢字、儒教、仏教など文化的共通点を中心に東アジア文化圏を形成した。しかし、同じ文化圏だからと言って、それに属するすべての国が良い関係を維持しているとはいえない。実際、最近の東アジアの対立と葛藤はさらに深刻化している。韓中関係は 2017 年のサード事件をきっかけに悪化し、中国では韓流を追い出そうとする動き(限韓令)があった。日韓関係は慰安婦問題や強制徴用問題といった歴史的問題が毎回問題になっている。このような国同士の問題は最近日本の"ヘイトスピーチ"のような個人に対する嫌悪につながっており、さらに大きな問題となっている。

2.本論

(1) アンケート

20 代の韓国人 115 人を対象に日本や中国に対する好感度や認識、そして東アジアの和合について簡単なアンケート調査を行った。

・日本と中国に対する好感度とその理由
・好感度又は各国に対する認識の確立に影響を与えた要素
・思い浮かぶ日本と中国の人物
・アジアの和合及び平和な未来構築の可能性

(2) 意見(解決案)提示

・エラスムス(交換留学プログラムの活性化)

エラスムスは欧州内の交換留学プログラムで現在 EU の礎石になったと評価されている。東アジアも言語を取得するための語学留学は勿論、IT や技術など様々な分野で交流を行い、言語や文化を専攻する学生以外も参加できる海外交流プログラム又は交換留学プログラムを作る必要がある。さらに留学生たちが参加する授業あるいは海外の大学との遠隔講義を増やし、多様なテーマを中心にお互いが話し合う時間を持つことも重要だ(例:釜山外大-お茶の水女子大)。 また、中高生が参加できる留学プログラムの場合、大学生に比べて少ないといえるので改善が必要である。

・共通教育および文化財に対する共同意識

日中韓 3 国の共同歴史教科書は毎回言及されてきたが、教育の場ではまだ行われていない。最も大きな理由は近現代史に対する 3 国の立場が違うからである。共通教育は近現代史と対立に重点を置くよりも同じ文化を共有し、東アジア文化圏を形成して相互発展してきた交流を中心に行った方がいいと思う。また、各国の文化遺産が散在している状況であるが、このような文化遺産についても東アジアの共同の文化遺産としてアプローチする姿勢が必要だ。

・SNS を利用した情報発信･交流の拡大

最近、SNS を利用する人が急激に増えた。SNS の最も大きなメリットは短時間で多くの人々に情報を共有できることだ。SNS のこのメリットを生かして各国の良い文化を知らせて偏見を無くすこともできる。また、SNS を活用したキャンペーン（例:環境保護キャンペーン）を作って東アジアは勿論、世界が 1 つになるきっかけにもなると思う。

3.結論（提言)

2019 年、現在も韓国と日本のレーダー問題、韓国と中国の微細ホコリ（PM2.5）問題など東アジアは対立している。国家は自国の利益を優先せざるを得ず、今後も多くの対立と葛藤があるだろう。しかし、SNS の拡散と個人間の交流が活発になった今、必ずしも政府間で良い関係を維持することだけが和合と平和のための唯一の解決策ではない。民間でも地道な学問的交流と文化的交流を通じて東アジア共同体形成のための基盤づくりができると思う。

Dongduk Women's University

東アジアの明るい未来への第一歩

同徳女子大学 キム ソハ / チョ ソネ

本発表では、東アジアの連帯を築くために、私たちができることについて発表する。現在、東アジアは、政治・外交的に難しい状況にある。領土問題と歴史問題などで、葛藤の状況に置かれているからだ。韓日の間には、独島・竹島の領有権をめぐる紛争、韓半島と日本列島の間にある海の名称表記をめぐる紛争、また、慰安婦問題や徴用工問題、日本の政治家の靖国神社参拝の問題などで、両国の関係はなかなか改善できないでいる。韓中の間には東北工程問題、サード配置問題、環境汚染問題などがある。日中の間には尖閣列島・釣漁島問題と、南京事件の問題をめぐる紛争がある。ほかにも、過去日本の侵略で生じた様々な歴史問題がある。

東アジアはこのような難しい状況から抜け出し、もっと協力し合い連帯を強めていく必要がある。東アジアの各国は互いに依存し合っているからだ。例えば、貿易において韓国は中国に依存しており、日本は高齢社会での労働人口の不足の問題を解決するため、外国の青年、特に韓国の青年の日本就職を積極的に受け入れている。これからも世界はますますグローバル化し、世界の各国はお互い協力し発展をとげていく方向に進んでいく。このような流れの中で、東アジアの各国も葛藤を解消し、共に生きる道を見出さなければならない。

本発表で、東アジアの連帯を構築するための提案をするに先立って、この提案に至った背景について説明したい。2004 年から同徳女子大学とお茶の水女子大学は、日韓交流セミナーを行い、国際交流関係の回復のために共に悩み、討論を行ってきた。第 1 回から 6 回までは、両国の文化交流を中心にしたセミナーが行われ、7 回からのセミナーでは、扱いにくい歴史問題をテーマとした発表も行われた。例えば、8 回のセミナーでは、慰安婦問題について日韓の大学生が議論し、「ナヌムの家」を訪問した。その結果、お茶大の学生からは慰安婦問題は今まで考えてきたよりもっと深刻であるということを痛感し、被害者のおばあさんたちの痛みが理解できて、大変貴重な経験であったという意見があった。また、領土問題を扱ったチームでは両大学のチームの認識に大きな変化はなかったが、政府や特定メディアの意見ではなく、個人の意見が交換できるいい機会だったと言っている。全体的にこのセミナーに参加した学生たちからは、セミナーの参加を通して日本と韓国の友好的関係の構築への考えが強まり、関係の回復のためには交流が最も重要だと思うという声が多かった。本発表では、このような日韓交流セミナーの成果を踏まえて、東アジアの葛藤問題の解決、及び、連帯の構築のためには、何よりも認識の改善に力を注ぐ必要があるということを主張したい。

本発表では以下の四つを提言する。

一つ目は、差別単語を使わないことである。韓国、中国、日本は相手国を卑下する単語を用いていることに問題がある。韓国は中国のことを「チャンケ」、日本のことを「チョッパリ」、中国は韓国のことを「パンツ」、日本のことを「クイズ」、日本は韓国のことを「チョン」、中国のことを「シナ」などで指称する。本発表では、実態調査のためにインタビューを行ったが、インタビューした男性の一人は、差別単語を使ったことはあるが、「悪意の感情なしに、無意識的に使った」と言っている。また本人が差別単語で呼ばれたら、どのよう

な気持ちになると思うのかという質問に「もっといい言葉があるのに、どうしてそんな言葉を使うのかわからない。気分が悪い」と答えたうえで、無意識的に使った言葉が人の心を傷つけるかもしれないから、これからは気をつけることを約束した。悪意の感情を意図しなかったといっても、差別単語を使ったら、結局その対象を否定的に見つめるようになるため、差別単語は使わないように努力しなければならない。

二つ目は、中高生に東アジアへの正しい認識を持たせるための努力をすることである。中高生が東アジア関連の情報を得るのは、主に学校の歴史授業やマスコミ、インターネットを通してなので、偏った情報を得る可能性が高い。中高生の時代にこのような偏った情報に触れると、偏見や無分別な嫌悪感情が生じやすくなる。そこで、大学生が中学・高校のクラブ活動と連携し、学生に東アジアへの正しい認識を形成させるための様々な活動を行う必要がある。例えば、中高生が興味を持ちそうな、各国の料理を直接作ってみる活動をする。アニメの中だけで接してみた料理を、直接作って食べてみる活動を通して、東アジアに対しての肯定的な見方を持てるように努力する。また各国の偏見を並べて、本当にそうなのか調べてみる活動などを通して、東アジアに対する偏見をなくすように努力する。

三つ目は、韓国と中国、日本が共通に抱えている社会問題を共に解決していくことである。最近、世界各国ではきれいな環境を作るため、プラスチックの使用を減らすことに注目している。プラスチックの使用で環境汚染が深刻になっているからだ。環境汚染というのは、発生地だけでなく、その周辺にも大きな影響を及ぼすので、国内の努力のみならず周辺の国の努力も必要になってくると思う。住みやすい東アジアの環境を作っていくためには、日中韓が共に行動すべきだという認識を持ち、共同対応すれば、東アジアの三国の間に連帯感が生じるだろう。共同対応の例には、プラスチックのストローの代わりに紙ストローを、使い捨てのコップの代わりにタンブラーを、ポリ袋の代わりにエコバックの使用をもっと積極的に実践することなどが考えられる。

四つ目は、慰安婦問題や徴用工問題などを政治的観点で見るのではなく、人権問題の観点で見つめることである。例えば、慰安婦問題を政治的観点で見つめたら、慰安婦のおばあさんたちの被害には無関心のまま、反日の感情が強まっていくだけである。その結果、解決はできず日韓の関係は冷え込むばかりである。そのため、このような問題を人権の問題として扱い、被害者の被害と痛みに共感する態度を持ち、片方に責任を回すのではなく、一緒に被害者への賠償のために努力すべきである。

東アジアで特に葛藤の要素として扱われるのは歴史問題である。必ず解決されるべき問題であるが、この問題を解決するためには、東アジアの連帯の構築が何より重要だ。そのために、相手国を見つめる視線から肯定的方向に改善し、相互疎通と協力を民間のレベルから積極的に行わなければならない。

東アジアの共生のために―EAST ASIAN CITIZENSHIP―

酒井麻祐子・榎本愛子・大山可乃

1. はじめに

東アジアの共生を実現するためには、「東アジアシティズンシップ」の育成が必要である。現在の東アジアは、対立が多く、東アジアレベルでの共生が出来ているとは言い難い。一方、ヨーロッパでは、2 度の世界大戦の教訓を生かし、国家を超えた EU という共同体を作ることに成功している。ヨーロッパのように、私たちが生活する東アジア地域においても、国家同士が協働するという未来を作ることはできるだろうか。

私たちの発表では、まず東アジアが対立している現状を改めて見直し、東アジアが抱えている問題を洗い出す。さらに、国家を超えた共同体を作ることができた EU を成功例として、東アジアと比較する。最後に、私たちから、東アジアが「共に生きる」ための方法を提言する。

2. シティズンシップとは

シティズンシップは大きく分けて、以下の 3 つの概念に分けることが出来る。

「地位」:国民が国家によって与えられている地位。

「感覚」:市民のコミュニティの感覚。

「実践」:人が社会に自由に参加し、他者と結合しながら、人権を求め、それにアクセスすること。

私たちが東アジアの共生のために大切だと考えるのは、「感覚」「実践」のシティズンシップの相互作用である。現在、世界ではグローバル化が進み、人の移動が盛んに行われている。人々は移動により、母国以外のコミュニティに帰属しているという「感覚」を持つようになっている。その結果、同じコミュニティに属する市民同士が結合し、共に人権を求めることが可能である。このように多様性を認めながら、同じ市民として平等を求める「実践」のシティズンシップこそが、共生の鍵なのである。

3. 東アジアの現状

東アジア地域では、国民の感情と国家の政策との間にずれがあり、それぞれの立場において問題が生じている。国家レベルの問題は、国家同士の政府間で完全な合意が出来ていないということである。東アジア地域では第二次世界大戦後、国家間で条約を結び、国交を回復することができた。しかし、条文の認識の違いなどから、戦時中から続く対立構造が改善されないままである。一方、個人レベルの問題は、東アジアに暮らす人々が「東アジア人」としてのアイデンティティを持っていないことである。自らが暮らしている母国と、それ以外の東アジア地域との仲間意識が弱いといえる。そのため、互いに無関心であったり、過度な対抗心を持っていたりするため、国家間同士の対立を解決しようという意識が持てないのである。

4. ヨーロッパ統合の歴史と政策

ここでは、2度の世界大戦の教訓から発足した EU の道のりや政策に言及し、東アジアとの比較を行なう。まず、EU の今日までの道のりを確認しよう。欧州は、世界大戦という2度の悲劇を契機として、欧州全体の平和と安定を望むようになった。そして欧州的価値観を加盟国内で共有することに努めてきた。第一

次世界大戦後には、すでに平和的な欧州統合思想及び独仏和解思想が共有されていた。また、独仏関係の悪化の原因を解消するために、1952 年に ECSC が発足した。この事実から、独仏の対立を当事国だけではなく、欧州全体で解決しようとしたことが分かる。そしてついに 1991 年、EU が発足した。EU は、加盟への前提条件として、自由、民主主義、人権・基本的自由の尊重及び法の支配といった基本的要件を満たすことが求めている。このことから、EU 加盟国間で、共通の価値観を確立しよう姿勢が見受けられる。次に、EU の政策を見ていこう。現行の政策面では、同じ EU 市民としての意識を形成するために、私たちの提言のキーワードでもある「シティズンシップ」を育成する教育が行なわれている。ヨーロッパに関する学習内容を構成した授業レベルでのヨーロッパ教育や、ヨーロッパ学校の設立など新しくヨーロッパの視点を導入する学校改革など、様々な試みが、各国それぞれに独自の強調点をもって進められている。

ここまで、EU について述べてきたが、アジアにも国を超えた組織があるのは事実だ。ASEAN は 1967 年に発足した東南アジアの地域協力機構である。しかし、戦時の対立から生まれた政治的な結びつきが、戦後には経済的な結びつきへと移行したため、ASEAN を共生のための共同体として期待することは難しいという現状がある。

最後に、ヨーロッパと東アジアを比較する。前者は、国家を越え同じ目標に向かって協力し、シティズンシップ教育を通して欧州人としてのアイデンティティを確立させようとしている。一方で、後者は、国家レベルでの対立が多いうえに、東アジア人としてのアイデンティティもなく、共生を目指した組織も存在していない。従って、東アジアにはシティズンシップが欠如しているといえるのではないだろうか。

5. 東アジアシティズンシップ育成のための 3 つの提言と国際フォーラムの意義

ヨーロッパでの事例を参考にしながら、東アジアのシティズンシップ育成し、そして共生実現のためにできることを提言する。

①東アジア共生会議の開催：東アジア全体が参加し共生に向けて話し合う場を作ること

②東アジア教育機関の設立：共通の教育指針を持つこと

③東アジア情報機関の設立：メディアに関する共通政策を立てること

東アジアのシティズンシップを育てるためには、東アジアとしての共通指針が必要であると考えた。東アジアの問題を自分のこととして捉え、解決するべきだという意識が個人に生まれれば、個人の日々の言動が変わる。そういった個人が増えることで、一人ひとりの政治選択にも影響を与えることができるだろう。

ここで、私たちの提言において、振り返って考えてもらいたいことがある。それは、国家も、結局は個人の集まりではないか、ということである。国家が変わるために誰が最初に動くべきなのだろうか。それは、国際フォーラムに参加している私たちである。現代は、国境を越えてビデオ電話もチャットもできる時代である。そんな便利な時代に、私たちはわざわざ国を超えて集まった。そして、同じ場所同じ時間で、ともに楽しい時間を過ごし、時に意見をぶつけ合いながら、刺激を与えあうことができるだろう。このような体験こそが、シティズンシップを育てるのである。私たちはフォーラムを通して、問題に関心を持ったり、考えたりする機会を得て、問題意識を共有することができる。私たちは、ここにこそ国際フォーラムの意義があると考える。大切なのは、ここでたくさんのことを学んだ私たちが、これからどう行動するか、ということだ。私たちがここで得た知識や経験を、他の人やコミュニティと共有していこう。この国際フォーラムで生まれた、シティズンシップの輪を自分の身の回りに広げていくことが重要なのである。

The 8th International Student Forum
Harmonious Relationships in East Asia
From Disaster to Solidarity: Towards Building a Global Network

Edited by Yuriko Kamiyama
Chihiro Kuwabara
Yan Wang
Xinying Zhou

第８回

国際

学生フォーラム

２月７日(木)～16日(土)

@お茶の水女子大学

目次

挨拶 … 01
スケジュール … 02
開講式・歓迎会 … 04
スタディツアー … 05
シンポジウム … 06
日本文化体験ツアー … 07
閉講式・送別会 … 09
付録 … 10

挨拶

学生代表　安食礼子

この国際学生フォーラムに参加して下さり、ありがとうございます！

ここまで、ホスト校として入念に準備して参りました。意義のある学び、議論ができることも勿論大切です。同時に、様々な国から学生が集まっているという多文化空間を、存分に楽しんでくださいね！

学生副代表 本田歩

このフォーラムに副代表として参加できて光栄です。明るい未来に向けて、皆さんと議論ができることがとても楽しみです。どのような功績も相互信頼による関係における小さな会話から生まれるものだと信じています。同時に、固い友情を皆さんと築けることを期待しています。

スケジュール

2 月 7 日(木)	到着・チェックイン		学生寮
2 月 8 日(金)	9:30	奨学金支給	学生センター
	10:00	開講式 基調講演	学生センター棟 第 5 会議室 (☆)
	10:30	紹介 オリエンテーション	
	12:00	キャンパスツアー	
	12:45	昼食	大学食堂
	13:45	招待講演 小松先生 山本先生	共通講義棟 3 207
	15:30	歓迎会	(☆)
2 月 9 日（土)		スタディツアー	
	8:45	池袋駅集合	
	9:30	江戸東京博物館	
	13:00	昼食＠はなの舞	
	14:30	都立横網町公園（15:30 現地解散)	

2 月 10 日(日)	発表準備		
2 月 11 日(月)	10:00	シンポジウム 1	文教育学部 1 号館 第 1 会議室 （＊）
	12:00	昼食	大学食堂
	13:00	シンポジウム 1	（＊）
2 月 12 日（火）	10:00	シンポジウム 2	（＊）
	12:00	昼食	大学食堂
	13:00	全体討論	（＊）
2 月 13 日（水）	日本体験ツアー 詳しくは 7 ページへ		
2 月 14 日（木）	自由研修		
2 月 15 日（金）	10:00	JASSO 報告書記入	文教育学部 1 号館 第 1 会議室
	11:00	閉講式 修了書交付 写真撮影	
	12:00	送別会	
2 月 16 日(土)	チェックアウト・帰国		

Opening

開講式 ＆ キャンパスツアー

9:30 までに集合してください

10:00~ 開講式

開講式では、このフォーラムに参加するにあたり、日程や注意事項などの説明やオリエンテーションを行います。.

12:00~ キャンパスツアー

スタッフにより、海外からの参加者にお茶の水女子大学校内を案内します！

歓迎会

15:30~ 歓迎会

この日の締めくくりとして、歓迎会を行います。軽食を食べながら、アイスブレークやクイズで楽しみましょう！

スタディツアー

8:45 池袋駅集合

9:30 江戸東京博物館

この博物館では、東京の歴史を知ることができます。今日の国際関係を知るためにも、しっかり学習しましょう！

↓

13:00 昼食（ちゃんこ鍋）

ちゃんこ鍋（なべ）は日本の鍋料理で、主に力士にメインディシュとして提供されます。魚、肉、豆腐、野菜がたくさん入っています。

↓

14:30 都立横網町公園

1923 年の関東大震災や 1945 年の東京大空襲で亡くなった人々を記憶するための記念公園です。平和の重要性をじっくり考えてみましょう。

↓

15:30 公園にて解散

シンポジウム

場所：文教育学部１号館　第１会議室

１日目; ２月 11 日(月)　9:40 までに集合してください

10:00～10:40　カンタベリー大学

10:50～11:30　ヴァッサー大学

11:40～12:40　昼食

12:50～13:30　ワルシャワ大学

13:40～14:20　大連理工大学

14:30～14:50　休憩

15:00～15:40　釜山外国語大学

*発表 25 分 ＋ 質疑応答 15 分

２日目; ２月 12 日(火)　9:40 までに集合してください

10:00～10:40　同徳女子大学

10:50～11:50　お茶の水女子大学

12:00～13:00　昼食

13:10～14:40　全体討論

14:50～15:10　休憩

15:20~15:50　先生方からのコメント

*発表 25 分 ＋ 質疑応答 15 分

日本体験ツアー@銀座

9:45 池袋駅集合（JR 中央改札１）

10:00~11:30 歌舞伎座ギャラリー

歌舞伎は日本の伝統芸能の一つで、ユネスコの無形文化遺産に登録されています。元は男女で演じられていましたが、風紀を取り締まるため、女性役も男性によって演じられます。（これを女型と言います。）ここでは、歌舞伎の衣装や小道具に触れることができます。

12:00~14:00 かこいや銀座七丁目店（昼食）

料亭にてコース料理を頂きます。メニューは刺身、天ぷら、たらの西京焼き、乱切りそばです。日本食を食べたい人は是非来てくださいね！↓

14:30~16:30 銀座博品館 TOY PARK

ここは 1982 年 9 月におもちゃのお店として開かれました。全ての年齢の子供たちが楽しめるような幅広い商品が揃っています。4 階建で約 10 万の商品があります。伝統的なおもちゃも置いてありますので、お土産にしても良いかもしれません♪

日本体験ツアー@お台場

9:15 池袋駅集合（JR 中央改札１）

↓

▼フジテレビ

10:00~11:30 フジテレビ

日本の有名な放送局の１つです。展望台に行くことができます。上空 100m からの絶景を楽しみましょう！

↓

12:00~14:00 たこ焼きミュージアム（昼食）

たこ焼きは日本の有名な食べ物です。焼いた生地の中にタコが入っています。ここでは、日本全国のたこ焼きを味わうことができます！

↓

14:30~16:30 浜離宮庭園

この庭園は江戸時代を代表するものです。ここでは、抹茶を飲むことができます。.

↓

16:30~ 浜離宮庭園にて現地解散

▲浜離宮庭園

Closing

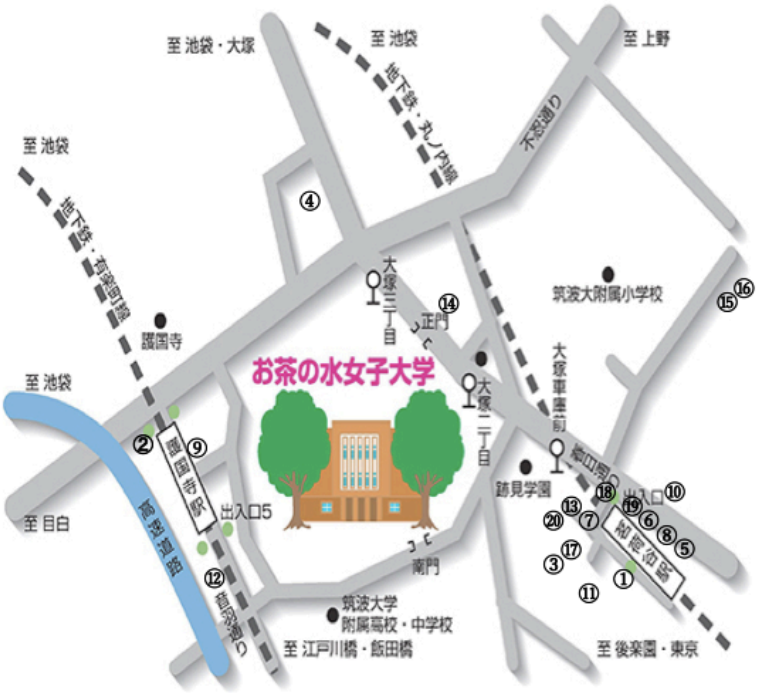
閉講式（11:00~）

送別会（12:00~）

フォーラム最終日になります。閉講式と送別会があります。

送別会では、昼食を食べながら、さらに交流を深めましょう♪!

周辺地図



＊スーパー

1,2: マルエツ 茗荷谷店/護国寺店

3: 三徳　　4: マイバスケット　5: キッチンオリジン

＊レストラン

6: サイゼリア（イタリアン）　7: ガスト（ファミレス）

8,9: ジョナサン（ファミレス）　10: 五右衛門（和風パスタ）

11: 餃子の王将　12: ぼんごぼんた（おにぎり）

13: サンマルクカフェ　14: Café Fuu

16: Café & factory RaLuKe

＊その他

17: ファションセンター　しまむら

18: セリア（100 円均一ショップ）

19: Welcia (薬局)

20: コートダジュール（カラオケ）

…他にも、たくさんのお店があります！

実際、お茶の水女子大学の周辺には、沢山のコンビニエンスストア(セブンイレブン、ローソン、ファミリーマートなど)もあります。

機会があれば、時間をとって日本特有の面白いお店を探検してみても良いかもしれませんね♪

キャンパスマップ

3. 学生センター棟

4. 文教育学部１号館

7. 共通講義棟３

8. 図書館

9. 保健管理センター

10. 大学食堂（2 階:マルシェ, 1 階:リモーネ ＆ 購買）

連絡先

お茶の水女子大学

〒112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1

国際学生フォーラム　運営

国際教育センター：学生センター棟　3 階 305

📞03-5978-5913

森山先生 📞090-4431-7100

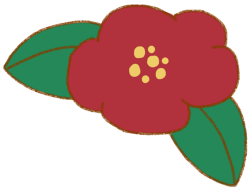
大山寮（国際学生宿舎）

〒173-0022 東京都板橋区仲町 2-1

📞 03-3956-6870

救急車:119

警察:110



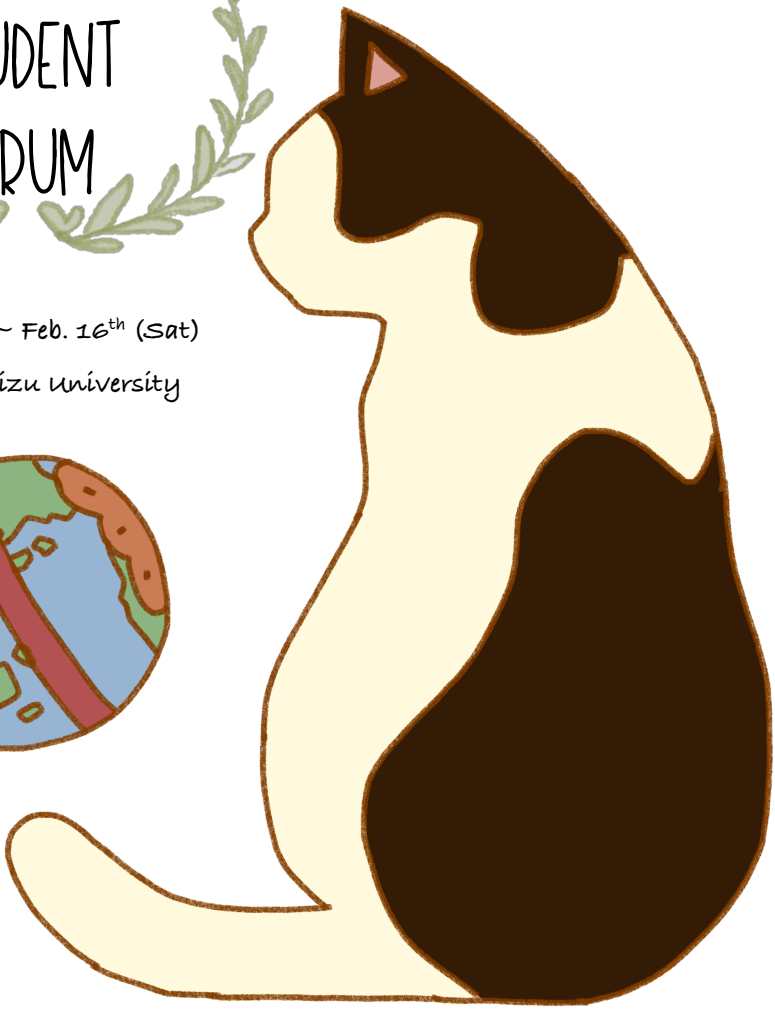
なまえ

THE 8TH

INTERNATIONAL STUDENT FORUM

Feb. 7th (Thr) ~ Feb. 16th (Sat)

At Ochanomizu University



INDEX

Greetings ... 01
Brief Schedule ... 02
Opening Ceremony & Welcome Party ... 04
Study Tour ... 05
Symposium ... 06
Tokyo Tour ... 07
Closing Ceremony & Farewell Party ... 09
Appendix ... 10

GREETINGS

Student-Delegate　Reiko Ajiki

I would like to appreciate for your participation in this international student forum.

As a host, we prepared everything very carefully. Of course, meaningful studies and discussions are truly important. However, at the same time, as students from various countries are gathering at once, please enjoy this inter-cultural space!

Vice-Student Delegate Ayumi Honda

I am honor to participate in this forum as a vice president. So excited to discuss with all of you for our bright future. I believe that any kind of achievements stem from a small conversation in a relationship with a mutual trust. In the sense, our meeting must be a meaningful. I am also looking forward to having a strong friendship with you.

SCHEDULE

Feb. 7th (Thu)	Arrival / Check In		Dormitory
Feb. 8th (Fri)	9:30	Scholarship	Student Service
	10:00	Opening Ceremony Keynote lecture	Student Service Building 5th conference room (☆)
	10:30	Introduction Orientation	
	12:00	Campus Tour	
	12:45	Lunch	Cafeteria
	13:45	Invited Lecture Prof. Komatsu Prof. Yamamoto	Inter-faculty Building 3 207
	15:30	Welcome Party	(☆)
Feb. 9th (Sat)		Study Tour	
	8:45	Gather at Ikebukuro Sta.	
	9:30	Edo-Tokyo Museum	
	13:00	Lunch@ Hana-no-Mai	
	14:30	Yokoamicho Park (15:30 end up here)	

Feb 10th (Sun)	Preparation for the Presentation		
Feb. 11th (Mon)	10:00	Symposium DAY1	Faculty of Letters & Education, Building 1st Conference Room(＊)
	12:00	Lunch	Cafeteria
	13:00	Symposium DAY1	(＊)
Feb. 12th (Tue)	10:00	Symposium DAY2	(＊)
	12:00	Lunch	Cafeteria
	13:00	Debate	(＊)
Feb. 13th (Wed)	Japanese Cultural Experience Tour Detail on page7		
Feb. 14th (Thu)	Free-Day		
Feb. 15th (Fri)	10:00	JASSO report	Faculty of Letters & Education, Building 1st Conference Room
	11:00	Closing Ceremony Certificates Photos	
	12:00	Farewell Party	
Feb. 16th (Sat)	Check Out / Departure		

OPENING

Opening Ceremony & Campus Tour

Please be in the room at 9:30

10:00~ Opening Ceremony

In the opening ceremony, we will give some explanation about this forum to you and have an orientation to tell matters to attend this forum.

12:00~ Campus Tour

We will guide foreign students around Ochanomizu University.

Welcome Party

15:30~ Welcome Party

At the end of the day, we will have a welcome party. You will have some icebreaking time and quiz while eating refreshments.

STUDY TOUR

8:45 Meet at Ikebukuro Station (JR center ticket gate 1)

9:30 Edo–Tokyo Museum

In the museum, you can learn the history of Tokyo. To understand current international relationships, let's learn about it!

↓

13:00 Lunch (Chanko–nabe)

Chanko–nabe is a Japanese hotpot dish. It is usually served to sumo wrestlers as the main dish and is filled with fish, meat, tofu and vegetables.

↓

14:30 Yokoamicho Park

It is a memorial park to remember the souls who died in the Great Kanto Earthquake in 1923 and the Great Tokyo Air Raid in 1945. Please think deeply about the importance of peace there.

↓

15:30 Dissolve at the Park

SYMPOSIUM

Avenue: Conference Room 1, Faculty of Letters & Education, Building 1

Day1; 11th February (Mon) Please be in the room at 9:40

10:00～10:40　University of Canterbury

10:50～11:30　Vassar College

11:40～12:40　Lunch Break

12:50～13:30　Uniwersytet Warszawski

13:40～14:20　Dalian University of Technology

14:30～14:50　Short Break

15:00～15:40　Busan University of Foreign Studies

*25 min presentation + 15 min questions and answers

Day2; 12th February (Tue) Please be in the room at 9:40

10:00～10:40　Dongduk Women's University

10:50～11:50　Ochanomizu University

12:00～13:00　Lunch Break

13:10～14:40　Discussion

14:50～15:10　Short Break

15:20~15:50　Comments from the teachers

*25 min presentation + 15 min questions and answers

TOKYO TOUR(@GINZA)

9:45 Meet at Ikebukuro Station (JR center ticket gate 1)

10:00~11:30 Kabukiza Gallery

Kabuki is a traditional Japanese theater form, which is listed as part of UNESCO's Intangible Cultural Heritage of Humanity. Originally, both men and women acted in Kabuki. However, because of the prevailing moral order, even women's roles are played by male actors, called ONNAGATA. Here gives you the chance to admire Kabuki costumes and props up close.

12:00~14:00 KAKOIYA Ginza 7-chome

We go to Japanese restaurant and eat course dishes for lunch. The menu is Sashimi, Tempura, cod with Saikyo baked and scattered soba. Come if you want to eat Japanese food!!!!!

14:30~15:30 Ginza Hakuhinkan (Toy Park)

This place was opened as a novelty and toy store in September 1982. They sell a wide range of goods that children of all ages can enjoy. It is 4th floored and is a toy specialty shop that can stock approximately 100,000 items. There are traditional toys, so please make it as your souvenir if you like.

TOKYO TOUR(@ODAIBA)

9:15 Meet at Ikebukuro Station (JR center ticket gate 1)

10:00~11:30 Fuji Television Network

This place is a one of the most famous Japanese broadcasting place. We can go an observation tower. Let's watch a breathtaking scenery from 100 meter.

↓

12:00~14:00 Takoyaki museum (Lunch)

▲Takoyaki

Takoyaki is a Japanese popular food. It is like a grilled octopus balls! In this place, we can enjoy Takoyaki's taste of throughout Japan.

↓

14:30~16:30 Hamarikyu Gardens

▲Hamarikyu Gardens

This garden is a representative in the Edo period.

We can drink Matcha (Japanese green tea).

↓

16:30~ Dissolve at the Hamarikyu Gardens

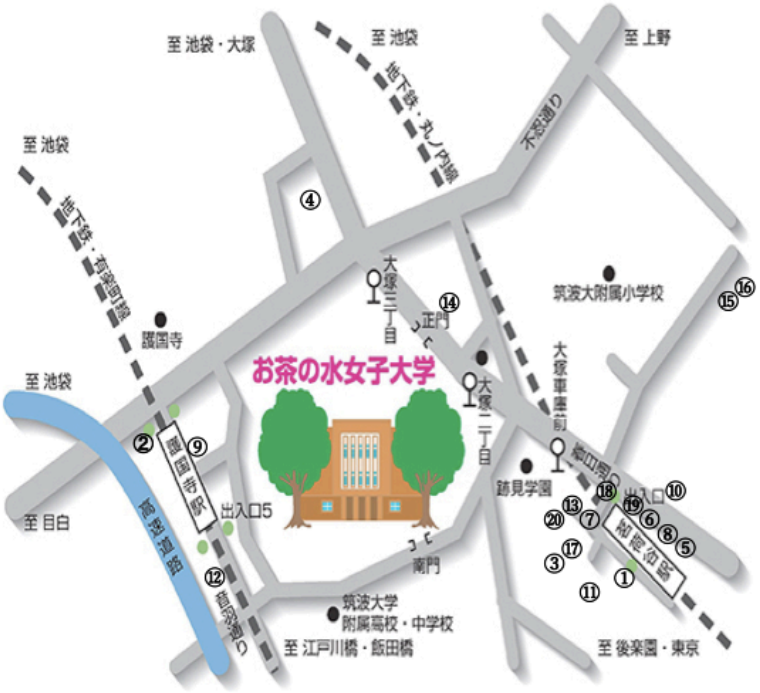
CLOSING

Closing Ceremony (11:00~)

It is the last day of this forum. We will have a closing ceremony and a farewell party. In this party you can eat and talk with friends.

Farewell Party (12:00~)

SURROUNDING MAP



＊Supermarket

1,2: Maruetsu Myougadani/Gokokuji

3: Santoku　4: MyBasket　5:Kichten Origin

＊Restaurant

6: Syzeria (cheap Italian)　7: Gusto (diner)

8,9: Jonathan (diner)　10: Goemon (Japanese-pasta)

11: Ousho (Gyoza)　12: Bongo-Bonta (rice-ball)

13: Saint Marc Café　14: Café Fuu

16: Café & factory RaLuKe

＊Others

17: Shimamura (clothes)

18: Seria (hundred yen store)

19: Welcia (drug store)

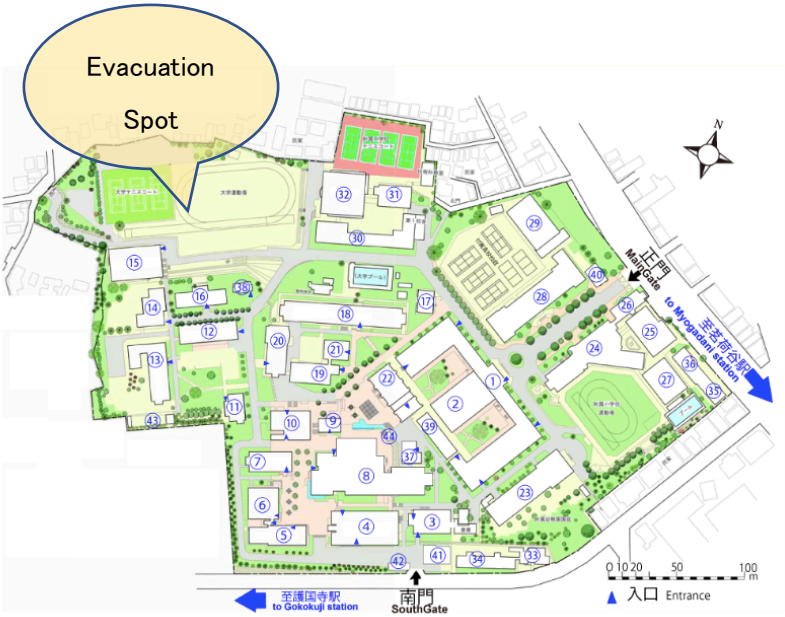
20: Cote Dazur (Karaoke)

…and more!

In fact, there are tons of convenience store (Seven-eleven, Lawson, Family Mart) around Ochanomizu University.

If you have a chance, please spare some time exploring some unique Japanese shops !

CAMPUS MAP



3. Student Service Building

4. Faculty of Letters & Education, Building 1

7. Inter-Faculty Building 3

8. Library

9. Health Care Center

10. Cafeteria (2F:Marche, 1F:Limone & Co-op)

CONTACTS

Ochanomizu University Address

1-1 Ohtsuka, Bunkyo-ku, Tokyo 112-8610, Japan

International Student Forum Executive Office

International Education Center : Student Service Building 3F 305

📞03-5978-5913

Prof. Moriyama 📞090-4431-7100

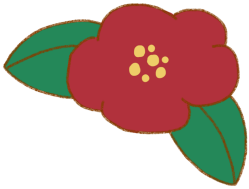
Oyama International Dormitory

2-1 Nakacho, Itabashi-ku, Tokyo 173-0022, Japan

📞 03-3956-6870

Ambulance:119

Police:110



name

編集後記

暉峻淑子氏は著書『対話する社会へ』で、「戦争・暴力の反対は平和でなく対話である」と語った。対話は最も人間らしいコミュニケーション手段であり、人格を自己開放させ、対等で相互的な関係を結び、たとい考えが異なっていても人間としての共通性を感じることができるという。そして相手の価値と尊厳を認め、尊重しあい、ともに生きることができるという。対話によりともに答えを見出す創造的な関係を築く。それがグローバル時代に求められるシティズンシップ教育であろう。Barnett は高等機関である大学に学ぶ者は、クリティカルな視点を持って知識、自己、世界を見つめ、よりよい世界を実現する使命を持った者であるという。今回のフォーラムでは、講演・発表により知識を得、討論・対話により自己を見つめ、ともに国際イベントを作り上げることで世界をよりよいものとする行動力を育むことができた。このような対話の機会が世界に拡大し、対立や戦争を克服し、平和な世界が実現することを願ってやまない。　　（森山：閉講式の挨拶より）

第 8 回国際学生フォーラム報告書

発行日　2019 年 3 月 29 日発行

発　行　お茶の水女子大学国際教育センター・グローバル文化学環

〒112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1

編　集　森　山　　新

〒112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1 文教 1 号館 101-4

E-mail moriyama.shin@ocha.ac.jp